である。これ以外の組織は絶對に反對である。余の唯一の志願は民國十三年に於ける國民黨の革命精神、國民革命の組織方略を復興し、以て三民主義の實現を期するにある」

×　×

然るに蔣介石を中心とするそのファッショ化は爾來一層鋭化して行つたこと第一節に略述した通りであつた。從つてそこには傳へられたやうな藍衣社の如き組織が存在したかも知れない。而かも中央派の獨裁强化の過程は斯うした藍衣社の如き暴力團體の活動に負ふところ多かつたかも知れない。

然しながら、中央派を主體とする蔣介石の統治權力のファッショ强化への過程には、他の先進國のファッシスト黨の如き暴力團體の組織を絶對的に必要としなかつた。それは蔣介石には餘りに尨大な自己系統の軍隊を推し、尙ほ且つ蔣介石自身は一面に於いて新軍閥としての實質的環境にあつたからである。卽ち中央派は實力派を主要構成分子となし、C・C團と稱する文治工作團體をもち、この二系と共にさらに財政系をその鼎の一鼎となしつゝ、各系統とも何れもその勢力の增大を來し乍ら、中央權力の獨裁强化に邁進したからである。自然斯うした客觀情勢の下に於いては所謂藍衣社と稱するが如き部分的の暴力團の組織が餘りに微弱過ぎるのであつた。況んや實力派のなかには、頗る强力且つ組織的な憲兵制度と特務機關が充實してゐるに於いておやであつた。

勢ひ本稿では他に精確なる文獻を蒐集し得るまで、この藍衣社の組織に對しては、單なる黃埔軍官學校の同窓生の一團體であるとし、これを比較的狹義なものとして取扱つて置きたい。唯黃埔系の中堅將校のなかには、各軍に於ける政治訓練部の牛耳を握つてゐるものが多く、而かもこれらの中堅將校は專らファッショ的訓練に重きをおく傾向があるのと、中央軍の特務機關にも亦黃埔系の中堅將校が多く配置されてをり、特務機關は政治的方面にも暗躍する場合が多い結果外觀からは、組織的ファシスト團體としての一大勢力であるかの如く認識された所以であらう。

×　×

大體以上の經緯に基き、こゝでは謂ふところの藍衣社の構成分子を次の如く區分しておかう。

(一)湖南派の一——賀衷寒を主とする一派（その部下には劉詠堯、鄧悌等主として軍部政治訓練部の實權を握りつゝあるものが多い）。

(二)湖南派の二——鄧文儀及びその一派（專ら湖南省出身の靑年將校）。

(三)浙江派——戴笠を主とする一派（主として警政及び特務を司り、よく蔣介石の信任を得つ

つある。その一派乃至部下は祕密とされてゐるが、蔣介石は性格的に浙江、寧波出身者に對して、最もこれを信頼するものゝやうであり、自然各方面に配置されてゐる)。

(四)川貴派――康澤、劉健勤等を主とする一派。

第三章　西南派の形成とその發展及び構成分子

西南派と謂ふのは廣東、廣西の兩省に於ける二派を總稱したものであり、中央派を國民黨内の正統派乃至多數派とせば、この西南派は多數派に對する反對派――野黨とも見做すべきであらう。

元來西南派といふ名稱は、地域的關係にその起源を發してゐるのであるが、この二省に於ける反中央勢力は現在「國民黨中央執行委員會西南執行部」及び「西南政務委員會」と稱する二つの機關の下に、これを統轄されてをり、この二機關の産生以來、西南派と謂ふ名稱が普遍するに至つた。

× × ×

斯くの如くにして「國民黨中央執行委員會西南執行部」及び「西南政務委員會」は、その建前上何れも國民黨の中央黨部に所屬してゐるため、この二機關によつて統轄されてゐる統治形態

は、外形上國民黨の中央部に繋がつてゐなければならぬ所以である。

勢ひ中央派と、西南派とは國民黨内に於ける對立勢力たるを失はないのであり、西南派と稱する反中央勢力の中央に對する反對の内容も亦、あながち國民政府を否認しようとするのではなく、寧ろ國民政府を擁護するためには、蔣介石の私有化を排除せねばならぬと謂ふのである。

そも〳〵以上の二つの機關によつて統轄されつゝある西南派は、どうした過程の下に產生し、乃至中央派に對する對立勢力としてその存立を續けるに至つたのか、こゝでは一應この點を吟味しておきたい。そのためには廣東に於ける獨立政府の出現とその後の經過をさきに叙述しよう。

× × ×

「一九三〇年九月末、擴大會議の北方政府が、實際政務を行ふに至らずして瓦解し、擴大會議の解散と共に、蔣介石對張學良の提携となり、同年十一月十二日から十八日まで一週間に亘つて南京で第三期第四次中央執行委員會全體會議（四中全會）が、全國統一による國是の決定を目的として召集され、蔣介石の獨裁政治が一歩々々奉天派との合作に基いてその基礎が築き上げられて行つた。一九三一年以降現在に至るまでの中國國民黨々治は事實上蔣介石の獨裁への段階であると稱して好い。而かもその間に幾多の波瀾曲折があつたとは謂へ、それらの波瀾曲折は一つとして蔣介石が獨裁途上に於ける獨裁强化の表現たらざるはないのであつた（中略）。一九三一年一月以降、張學良との提携と、その平津出動に次いで北平に副司令部を設置し、張學良が事實上北支の權力を掌握して以來、西北軍の改編となり（一時山西將領の張學良に對する反對熱が昂まつたとはいへ）閻錫山の下野と共に北方の政局が安定するに至つた際、突如胡漢民の逮捕監禁となり、それについで胡漢民を中心とする廣東派の反中央政府熱が高潮しながら、今度は中央政府の基礎に動搖を來し出した。胡漢民の逮捕監禁に至つた表面上の經過は民國二十年二月二十八日夜蔣介石が胡漢民、王寵惠、干右任、戴天仇等と國民會議（同年五月開催の豫定になつてゐた）問題を協議の最中「約法」について蔣對胡の間に激論が闘はされた結果、突然蔣介石は手兵に命じて胡漢民を逮捕せしめ、これを南京郊外の湯山に監禁した（前年李濟深もこの手で監禁されたことがある）（中略）。斯うして胡漢民は依願免職の形式で凡ての地位を褫奪されたが、元老派の斡旋で病氣靜養と謂ふ名目の下に遂に自邸に移されることとなつた。胡漢民監禁事件と共に廣東の時局に重大な衝動を與へ、各地に潛んでゐた反蔣派の擡頭となり、各地に於ける地方黨部の動搖、就中山西軍の縮編に不平をもつてゐた軍隊の反亂が勃發し、雲南の反中央宣告、廣西派の李宗仁、白崇禧、黃紹雄等を主とする廣東派との合流計

劃　廣東實力派陳濟棠等の策應による廣東、廣西の結束と、廣東省政府主席陳銘樞の蔣介石に對する警告電（胡漢民事件を解決しない限り廣東、廣西兩省は自由行動をとる）などとなつて現はれ、廣東派對中央政府の關係は漸次惡化して行つた。勢ひ問題の中心である國民會議の開催期が近づくにつれ、反政府運動が遂に表面化し、廣東廣西の獨立說すら傳へらるるに至り、その間石友三、韓復榘等の連名による國民會議への反對通電、廣東派を代表する中央監察委員、鄧澤如、林森、蕭佛成、古應芬等の蔣介石彈劾の通電等が發出され、廣東の形勢惡化と同時に廣東派の重鎭鐵道部長孫科、司法院長王寵惠等が南京を去つた。次いで廣西派の將領李宗仁、白崇禧、張發奎等が連名で國民會議反對の通電を發し、擴大會議派の汪精衞は天津の同派に對し、反蔣運動開始を督促するやら、同派の連名反蔣通電を發する等、廣東派の中央政府離脫と廣東、廣西、擴大會議派の團結が事實化し、多々益々險惡な空氣を釀すに至つた。斯くて孫科、王寵惠等の辭表提出、陳濟棠の反蔣運動繼續の聲明、陳銘樞の赴日、その他の經緯後、吳稚暉、張靜江、李石曾等三元老の妥協斡旋もその効なく中央軍の廣東派討伐計劃、孫科、許崇智、陳友仁等の南下、九龍會議の開催（南下した孫科ら三氏と汪精衞、白崇禧、張發奎、鄒魯、唐紹儀等の時局會議）古應芬、鄧澤如、林森、蕭佛成等四監察委員の第二回反蔣通電八路軍將領の反蔣通電に次いで、遂に廣東政府成立の段取りにまで漕ぎつけ、五月二十七日の執行監察委員會非常會議で、各種の綱要を決議し、同時に國民政府組織大綱十一箇條を公布しながら、二十八日廣東國民政府は正式に成立するに至つた。政府には主席を置かず、汪精衞、唐紹儀、古應芬、孫科、鄒魯の五名を常務委員に任命し、委員には蕭佛成、李宗仁、林森、許崇智、陳濟棠、唐生智、鄧澤、如烈鈞、陳友仁を擧げ、四委員會の主席には政治委員會主席汪精衞、軍事委員會主席許崇智、財政委員會主席唐紹儀、外交委員會主席陳友仁、參軍所長陳濟棠を任命した。勢ひ、同地の各國領事團も亦これを合法的政府と認めないまでも、地方的實權を交涉の相手とし、慣例上國際法政府と同樣にこれに對するの外なきに至り、和平運動のため南下した張繼すら施すべき策がなかつた。と、中央政府側では共產軍の討伐を控へて積極的の行動に出づることさへ出來ず、自然南北對立の形勢が續けられた。その間廣東政府側では國務公議第二次事務委員會を開催して陣容を整へつつ積極的軍事行動の準備を進めたのに對し、中央政府も亦廣東軍に備へるため軍事編制を變更する一方、依然張繼をして妥協運動を繼續せしめたり、胡漢民を行政院長に、李濟深を考試院副院長に擧げたり（兩人は拒絕した）、專ら、政治的解決に努めた。廣東政府の勢力擴大につれて全國に亘る反蔣熱が更に昂り、大連に脫れてゐ

た閻錫山は、八月三日、大連を脱出して太原に歸り、馮玉祥、孫殿英等と會合の結果、反蔣軍事行動を起すに決し、これに對する蔣介石の懐柔運動があり、漸次積極行動化しつつあつた廣東軍の湘南侵出を傳へらるるに至つたが、時偶ま滿洲事變の勃發による日支問題の紛糾化を來したのを機會として、中央對廣東の妥協氣運が擡頭した。即ち廣東政府は滿洲事變に對し、非常會議を開いて蔣介石の下野を條件に、國内一致國難に當れ、との宣言を決議したのや、張學良が閻錫山、馮玉祥の兩名を起用するに決し、國民政府に閻錫山の逮捕令を取消し、馮玉祥の自由回復を電請した等等の諸事實が、それを表明するものであつた。延いて反日運動の全國的瀰漫と共に、全國の妥協氣運（廣東政府對中央政府、北方に於ける閻錫山と其一派及び馮玉祥等の反中央政府運動とが何れも蔣介石の下野を條件に擧國一致を口實として）が、益々その趨勢を加ふるに至つた（中略）。一方、滿洲問題の擴大と共に、中央政府は外交上に於ける重大危機に立ち、支那全國に瀰漫せる排日風潮の多々益々なる熾烈化等等、是等の環境は、中央政府對廣東政府の妥協の氣運を早めしむるに至つた。斯くて爾來兩者の妥協を策しつつあつた張繼の斡旋により、中央側の代表蔡元培、陳銘樞と廣東側の代表汪精衞、孫科等との香港に於ける會見となり、豫備的妥協の成立を見、廣東側は蔣介石の提議に基き、南北和平會議を上海で開くべく正式代表を派遣することに決定した。當の胡漢民も亦廣東に歸つた（中略）。その後多少の波瀾を經て、妥協の成立と共に、國民黨第四次全國代表大會が、南京側及び廣東側との二箇所で開かれ、双方中央委員を選出した。中央、廣東兩派の四全大會終了後、蔣介石は下野の通電を發したので、十二月十六日中央臨時常務委員會に於いて、林森を代表出席に任命し、上海和平統一會議の協定に基き、十二月二十二日から中國國民黨第四期第一次全體會議が南京で開催されて、所謂統一新政府が生れた（中略）。第四期一中全會により國民政府の改組が行はれ、中央政治會議に於いて各部會長官の人選後、新政府は民國二十一年一月一日産生した。斯くて廣東政府は解消されたと雖も、同時に、西南政務委員會、中央執行委員會、西南執行部、西南軍事委員會が新に組織せらるるに至り、胡漢民の依然たる廣東引籠りと共に、廣東側の對中央の感情には、大きな溝渠のあることを免れなかつた。曩に下野した蔣介石が奉化に歸省し、財政部長宋子文の辭職と共に、國民政府改組後の財政狀態は益々窮境に陷り、一時財政危機が、金融恐慌をすら惹起せしめんとするの狀態にまで沈淪した。その間汪精衞の辭職申出であり、廣東派が實際上政權を掌握したものの、財政難と、滿洲事變の擴大に伴ふ、對日外交問題の紛糾とにより、二進も三進も動けない狀態に陷つた（中略）。軍費の支給難、給料不渡が、國民政府

の基礎をすら動搖せしむるに至り、とうとう蔣介石の復歸となつた。即ち杭州會議の結果、蔣介石、汪精衞の國民政府入りによつて、ここに蔣、汪二頭政治が實現されたのであつた。その當然の經路として孫科、陳友仁等が辭職し、かうして廣東派（改組派及び西山會議派を除く一派）は、全く國民政府を離脱した形を示すに至つた（濱田峰太郎編一九三二—三三年中國年鑑より）

×　×　×

爾來西南系對中央政府との間には依然として深い溝が横はつてゐた。

外形上西南政務委員會も、中央執行委員會西南執行部（西南軍事委員會はさきに解消した）も共に中央に隷屬してゐる關係上、その對峙の姿態に於いてこそ、露骨な敵對行動をとらないだけであつて、西南派はあらゆる點に於いて獨立の狀態にあり、決して中央の節度に服してゐないのである。

×　×　×

然しながら廣東及び廣西の兩省に於ける斯くの如き中央反對の趨勢は、當時新たに發生したものでなく、既に早くから釀されてゐたのであつた。少くとも國民黨が廣東を中心として生れたのを見ても、西南地方が地域的に、中央の統治權力に反抗すべき素地をもつてゐたことが判明し得るのである。

從つて西南側の中央反對への趨勢には、二つの要因が働いてゐることを看過出來ない。この點に關し一部の間では西南派の獨立當時次の如く評價したことがあつた。

「廣東政府の成立までには、二個の要因が働らいてゐた。或は一個の眞因を二個の方面から說明し得るといふ方が一層妥當であるかも知れぬ。一つは蔣介石の專制に對する反動である。一つは浙江財閥に對する廣東財閥の挑戰である。前者は多くの意味に於いてデモクラシーの主張であり、後者は資本主義の覇制時代に入つた——大體に於いて——現代支那に於ける廣東財閥の地盤的主張である。而して前者の理由によりて西山會議派や失意政客派の參加が可能であり、後者の理由によりて胡漢民系統の廣東派右派と、左派たる汪精衞一派の妥協が肯定出來るし、又廣く西廣を一體として一經濟單位を作る廣西派の加入の餘地が出來てくるのである。しかも全體を通じて廣東派がそれを牛耳るといふことともこの二つの理由を打つて一丸として見るとき、極めて當然と思はざるを得ないのである」

蔣介石を中心とする現國民黨統治が、變體的金融資本閥及び國際資本帝國主義の命ずるまま

に、益々獨裁强化への趨勢を顯著ならしめつつある時、産業の資本家閥乃至産業資本家閥の地域的主張のままに、中央統治權の獨裁强化に對して兎角抗爭を敢行しようとするのは、必至の經過であり、この意味に於いて西南派の中央政府に對する反對は、合理的であると共に、これに失意政客の加擔したがるのも亦自然であつた。

× × ×

但し一口に西南派といつてもその中にも亦幾多の派別が存在し乍らそれが時に合流し、時に離反し、時には暗鬪を行ひ時には協調を演ずるのであつた。

× × ×

就中廣東系と、廣西系とは中央派に對する抗爭乃至抗爭への運動に於いてこそ合流し相協調するが、その他の局部的の諸點に至つては、決してその行動を一つにしない。而かも兩派の形成の史的發展に於いても亦同一でなく、中央派に對しての關係に於いても、亦廣東系に較べてそのポジションを異にしてゐた。

× × ×

このことは西南派を構成する分子が決して單純でない點にもよるが、更に廣東派又は廣西派を構成する主要分子たる實力系が封建性軍閥としての素質を多分に具有してゐるからでもある。

實力系封建性軍閥としての素因を脱し切らない結果は、封建性軍閥の特性たる地盤確保乃至その擴大への意圖が常に頗る力强く作用し、それが中央政權の中央集權と矛盾し對立するところ著しいため、そこに中央への對立となつて表現される場合が決して少くない。

本稿起草當時（一九三六年六月上旬）の西南派の反中央軍事行動の開始は、來るべき國民的大會――憲政開始問題を前にして、中央政權の中央集權制强化に對する一種の地盤確保への猛運動の表現であると謂ふことが出來る（これらに關しては後章で言及したい）。

× × ×

斯くの如くにして西南派の形成とその發展及び構成分子を叙述するに當り、その構成分子を廣東系と廣西系とに區分して觀察する必要がある。

謂ふまでもなく廣西系と、廣東系との間は極めて複雜な關係にあつたからであり、歴史的にも時には相敵對し、時には合流しつつ離合極りなかつたからである（これらの點は兩廣の形式とその發展の經過を叙述する際自ら判明するであらう）。

第一節　廣　東　系

現在の廣東系は大體に於いて陳濟棠を中心とする實力派と、去る五月急逝した胡漢民を主とする文治派と、雛魯等の元老派との三派によつて形成されてゐる。

而して實力派は實質的に廣東全省に於ける實權を掌握し、文治派（元老派をも含み）は、寧ろこれに從つた形で、絶えず實力派の利用に任せつつある觀なしとせない。

斯かる場合實力派が文治派（元老派を含み）を利用しようとするのは、その掌握しつつある全省の實權を維持し、その地盤を擁護するために中央權力に對しては、絶えず對立的關係を持續して行かねばならぬのであるが、單なる軍事的の割據には名分上の意義を缺くところ多い結果、文治派の協力を必要とする點から來た所以である。

就中中央派に對する抗爭意識は、實力派よりも文治派（元老派を含み）に於いて一層强烈たるを失はないだけ、實力派にとつては、それだけ利用價値が高い譯であつた。

×　×　×

一方文治派（元老派も同じ）も亦、中央派に對する抗爭を續ける場合、實力的の背景を持たない限り、何等の權威をも認められないため、どうしても實力派との合流、提携を行はなければならないので、斯くの如くにして廣東系は實力派と文治派（元老派をも含み）との相互扶助關係によつて一つの團結をなしてゐるのであると稱して好く、實力派と文治派とが打つて一丸となり、そこに廣東系と稱する一つの團結が形成されたものでないところに、中央派に對する抗爭勢力としての跪弱性を帶有してゐる。

勢ひ廣東系實力派の權力者陳濟棠の中央權力に對する態度は兎角不卽不離たるを免れず、絶へず消極的であり、西南の獨立を策謀しつつある一派からは、西南獨立運動に對する一種の癌とすら見られてゐるのである。

廣東系に於ける實力派と文治派との關係がさうである如く、文治派と元老派との間に於いても亦然りであつた。

然しながらこれらの相互關係は個々の各派を解剖する際に讓り、ここでは唯廣東系に於ける各派別だけを概說しておかう。

(A)　實力派。陳濟棠を主とする廣東軍の主腦部を指し、大體(一)下四府系、(二)舊四軍系、(三)同僚派等に區分出來る。

(B) 文治派　前述の如く胡漢民系を中心とする文治派と元老派とをその構成分子としてゐるが、これをさらに、(一)胡漢民派、(二)準胡漢民派、(三)新興官僚系、(四)荷包派、(五)元老派の五派に分類して好い。

× × ×

但しこの廣東系から實力派の勢力を除いて了つたならば、既に中央統治權力との對立力が全然無くなり、さりとて文治派の理論的指導性を排除するなら、實力派の勢力は當然中央の支配下に屈服せなければならないのであるが、何んといつても廣東系は、廣東軍の基礎の上に立つてゐることを度外視出來ない。

× × ×

元來、廣東軍は李濟深の主宰してゐた軍隊で、李濟深は廣西系の先輩であつて、國民革命軍が北伐の途に上つた時、第四軍長として國民革命軍總參謀長、黃埔陸軍軍官學校校長代理を兼ね北伐軍進攻中に於ける廣東の留守を預つた。次いで國民政府委員、國民政府軍事委員會委員、廣州政治分會委員、廣東軍事廳長等を兼任しつつ廣東の主權を握つた。民國十六年武漢・南京兩派が合作の後、北伐軍第二路總指揮張發奎が廣東に歸るや、張發奎と共に廣東軍事委員會を組織してその主席となつたが、汪精衞と共に上海に赴いた留守中、所謂共產黨事件が發生して一時共產軍、及び張發奎軍のために廣東を奪はれたが、李濟深の部下陳銘樞深び陳濟棠等がこれを討伐して幾何もなく、又李濟深の手に恢復し、民國十七年李濟深の歸廣後、廣州政治分會主席を兼ね、廣東、廣西の軍政兩權を掌握した。北伐の完成後と雖も廣東省政府及び國民革命軍參謀長を兼ねてゐたが民國十八年國軍編遣問題、政治分會廢止問題等で中央派の廣西派に對する壓迫が激化するに及び、暗に李宗仁等の廣西系と通じて兩廣、兩湖を聯ぬる大廣西主義の實現を企劃したが、當時陳濟棠の下に第八路軍總指揮部第四軍長であつた陳濟棠が、蔣介石派に加擔して、突如クーデターを敢行して、第八路軍總指揮となり、同時に李宗仁、白崇禧、黃紹雄等を廣西に逐つたのと、李濟深が蔣介石のため巧みに南京に誘致せられて監禁された等、廣東の實權は、南京政權の廣東に於ける代表者陳銘樞の手に移つたが、胡漢民事件による廣東獨立政府の樹立後は、全く陳濟棠の天下となり、廣東、南京の合作後、廣東の實力は更に加はりつつ、現在に及んでをり、自然現在の廣東軍は次の各軍から成り十一個師及び二個旅その他の特種部隊を加へて約十二萬の兵力と稱へられつつある。

第一軍（軍長余漢謀、二個師及び軍直營隊並びに一個教導團から成り主力は贛州及び安遠附近

に駐屯）

第二軍（軍長陳濟棠、二個師及び軍直營隊並びに一個教導團から成り主力は信豐、興寧附近に駐屯）

第三軍（軍長李楊敬、二個師及び軍直屬營隊並びに一個教導團から成り主力は大埔及び江西留車附近に駐屯）

第一師長（李振球）第二師長（葉肇）第四師長（張達）第五師長（李振良）第七師長（李延禎）第八師長（黃質文）第九師長（陳漢光）獨立第一師長（黃任寰）獨立第二師長（張瑞貴）獨立第三師長（陳漢魂）獨立第四師長（鄧龍光）教導師長（繆培南）獨立第一旅長（范德星）獨立第二旅長（陳章）獨立第三旅長（嚴應魚）獨立第四旅長（李潔芝）獨立第五旅長（陳鐵堅）獨立第七旅長（馬昆）補充旅長（王啓光）

（A）實力派の分子

前述の經緯により實力派は陳濟棠を領袖として、近來益々その勢力を擴大强化し乍ら、更に引續き軍備の擴張を行ひつつあるが、現在の廣東軍は陳濟棠が民國二十一年海軍の實權者であつた陳策及び空軍の張惠長等の異分子を逐つて以來、全く陳濟棠系の分子によつて形成されてゐると稱して好い。

とくに舊四軍系に於いてすら、中央派の系統に屬してゐたものは、その勢力に著しい失墮を來すに至り、何れも陳濟棠系に合流した。

×　×　×

陳濟棠　廣東省防城縣の產。廣東陸軍官學校卒業後、民國九年護國軍空軍第四四大隊長に任ぜられたのを振出しに、次で李濟深の麾下に轉じ、營長、團長、旅長に進み、江門に駐屯してゐたが、その後第十一師長に昇進し汕頭に駐屯した。民國十六年張發奎等の廣東事件に際しその設立に係る臨時軍事委員に擧げられたと雖も就任せず、却つて張發奎討伐の通電を發し、南京政府から左翼總指揮に任ぜられた、民國十七年李濟深が、廣東に復歸するや第八路總指揮部第四軍長に任ぜられ、江門に駐屯し、同時に廣東省黨務委員に擧げられた。民國十八年廣西派の離反に際しては蔣介石側に加擔して突如「クーデター」を敢行して第八路總指揮となり、李宗仁、白崇禧、黃紹雄等を廣西に逐ひ、同年國民黨第三期中央候補執行委員に擧げられ、後陳銘樞と合作して廣東を防守し、爾來廣西派と對立した。然るに民國十九年全國的に反蔣介石運動

が起り張發奎軍が湖南に侵入するに及んで、蔣介石と通じてこれを挾擊し、更に廣西派に大打擊を與へた。民國二十年胡漢民の監禁後に南支一帶に反蔣の機運醞釀するや潛かに李宗仁、白宗禧等と通じ、次いで古應芬鄧澤如等によりて發せられた蔣介石彈劾通電に呼應し、汪精衞、孫科等の廣東政府樹立の實力的背景をなし、政府の成立と共に政府委員、軍事委員會需務委員第一集團軍總司令に擧げられ、同年冬廣東、南京兩政府の妥協後、國民黨第四期中央執行委員に推され、民國二十一年民政府軍事委員會常務委員、西南政務委員會常務委員、中央執行委員會、西南執行部常務委員兼組織部委員となり、現在でも亦第一集團軍總司令、國民政府軍事委員會委員に任ぜられ、同時に國民黨第五期中央執行委員に擧げられてゐる。

×　×　×

而して實力派の陣容を（一）下四府系（二）舊四軍系（三）同僚派の三系統に區分したこと前述の如くであるが、第一集團軍に於ける團長以下の戰鬪單位は大部分高雷、欽廉、時に欽廉（陳濟棠の鄕里）出身の少壯軍人をその中堅となしてゐる。これは陳濟棠の實力基礎であると共に、燕塘軍校出身者を網羅してゐる點に特徵をもつてゐる。

×　×　×

（一）舊四軍系

舊四軍系に屬するうち繆培南、李漢魂、鄧龍等は高州系である關係上、特に陳濟棠の信任篤くこれに反して中央系の舊四年系は專ら東北江系統であるだけに、陳濟棠に信任されない。

×　×　×

繆培南　國民革命軍第四軍長、第四師々長を經て、討逆軍第八路總指揮部參謀長に歷任、現在第一集團軍總參謀長に任ぜられ、國民黨第五期中央候補執行委員に擧げられてゐる。

×　×　×

李漢魂　陸軍第四師副師長を經て現在では第一集團軍第一軍長となり、國民黨第五期中央候補執行委員に擧げられてゐる。

×　×　×

鄧龍光　現在第一集團軍獨立第四師師に就任、同時に國民黨第五屆中央候補執行委員に擧げられてゐる。

×　×　×

（二）同僚派

同僚派とは陳濟棠が第四師々長時代に於ける同僚を指すのであるが、現在では李楊敬、余漢謀、香翰屏等々がその實力を握り、同時に陳濟棠に隷屬しつゝ、陳濟棠の股肱と目されてゐる。

× ×

李楊敬　廣東省東莞縣の產。民國十五年黃埔陸軍々官學校教育長に任ぜられ、十八年陳濟棠の廣東に於ける「クーデター」斷行後、第八路軍總指揮部參謀長となり、第六十三師長を經て民國二十年の廣東獨立に際しては、陳濟棠を助けて活躍し、廣東國民政府成立のゝちは第一集團軍第三軍長兼軍事委員會委員に就任、南京、廣東兩政府の合作後國民黨第四期中央執行委員に擧げられ、現に中央執行委員會西南執行部常務委員として、第一集團軍第三軍長に任じ、國民黨第五期中央執行委員にも選ばれてゐる。

× ×

余漢謀　廣東省高要縣の產。行伍の出身で、早くから廣東軍に入り、民國十八年陳濟棠の廣東「クーデター」直前旅長に進みのち國民政府陸軍第五十九師長となり、廣西に出動した。民國二十年廣東の獨立を宣するや、第一集團軍第一軍長となり、同年末南京、廣東兩政府の妥協後國民黨第四期中央執行委員に擧げられ、二十一年國民政府西南軍事委員會委員となり、同年共產軍が福建に入るや、剿共軍第一路縱隊指揮として江西省大廣方面に出動したが現在では、第一集團軍第一軍長に任ぜられ、同時に國民黨第五期中央執行委員に選ばれてゐる。

× ×

香翰屏　廣東省合浦縣の產。陳銘樞の姻戚であるが、陳濟棠系に屬する同僚派の錚々たるもの、もと軍艦の書記であつたが、陸軍に投じ、陳濟棠の麾下となつて累進し、民國十六年張發奎、黃翔祺の紛亂に際しては國民革命軍第四軍第十二師長に任ぜられ、十八年討逆第八路軍第一師第二旅長となり、間もなく北伐完成後中央軍の改編に際し、第六十二師長に任ぜられ汕頭に駐屯したる民國二十年廣東國民政府成立後、陳濟棠の第一集團軍第二軍長となり、廣州警備司令を兼ね、同年末國民黨第四期中央監察委員に選ばれた。現在では國民黨第五期中央監察委員に擧げられ、依然廣州警備司令に就任しつゝある。

(B) 文　治　派

文治派は(一)胡漢民派、(二)準胡漢民派、(三)新興官僚系、(四)荷包派、(五)雛魯派等の各派に分れてゐること前述の如くである。而してこの文治派の巨頭は何んといつても死んだ胡漢民

と、元老派の巨頭鏞魯とであつた。但し胡漢民が民國二十五年五月急逝した結果、この派に屬してゐた分子がどう離散するか、それによつて廣東系文治派の陣容、勢力等に少なからぬ變化を來たさねば熄まぬであらう。

而かも近來の胡漢民は打續く失意のうちに悶々たるものあり、本格的の神經質に陷り乍ら、香港に於ける一老先生として僅かに反蔣陣營の一角に踏み止つてゐたところ、遂に民國二十四年六月、西南派の反蔣運動に見切をつけたのか、孤影悄然として外遊の途に上つた程で、まさに凋落期に頻しつゝあつた。唯第四期六中全會に於ける汪精衛の遭難、北支自治運動の發展等によつて支那の政局が急激に推移し、南京で開かれた第五期一中全會で、中央執行委員會常務委員會主席に推され、同時に考試院長に擧げられた鏞魯と共に、西南文治派を代表して蔣介石政權に迎へられたゝめ、外遊から歸國したのであつたが、香港まで來て容易に北上しやうとせず、遂巡中遂に世を去つたのであつた。

×　×　×

胡漢民　廣東省番禺縣の產、日本の法政大學に入學中孫文と知り、光緒三十一年同盟會に加入した。歸國後は汪精衛と共に香港に於いて民報を發行しつゝ革命思想を鼓吹したが、幾何もなくて廢刊したので、廖仲愷、朱執信等と新嘉坡に赴いて更に新聞を發行し、華僑に向つて革命の宣傳に努めた。第一革命前孫文に隨つて廣東に歸り、黃克强等と共に兵を起して鎭南關を攻め、砲臺要塞等を占領したが、衆寡敵せず安南に退却、宣統二年檳榔嶼に赴いて孫文と會見し革命の進行を協議の上、歸國香港に留り、黃花岡の役には黃克强と共にこれに參加した上、武昌での旗上げ後、廣東の獨立宣布に伴ひ、廣東都督に擧げられ、民國元年南京に臨時政府成立し孫文が大總統に就任した時、總統府祕書長に就任した。次いで孫文の辭職後、廣東都督に轉じたが、二年六月袁世凱から民黨に隷屬してゐるといふ名目の下にその職を免ぜられ、西藏宣撫使となつた。七月第二革命の蜂起とその失敗後、日本に亡命して孫文の輔佐役となり、袁世凱打倒運動に奔走し、民國十五年陳其美が暗殺された頃、上海に歸り、翌六年廣東で非常國會が召集された際は、大元帥孫文の下に大元帥顧問兼祕書となり、さきに軍政府最高顧問、廣東省長、廣東大本營參議等に歷任し、十三年國民政府の改組後は、第一期中央執行委員會常務委員兼宣傳部長となり、同年孫文の北上に伴ひ、廣東で大元帥代理となつた。斯くて十四年廣東に國民政府の組織された際は外交部長に就任したが、適ま廖仲愷暗殺事件の嫌疑を受けて廣東を去り、ロシアに渡つた（寥仲愷は惠州會館で暗殺されたのであつたが、廖は共產黨系の有力

な指導者でその暗殺事件には、香港の英國官憲と、その勢力の挽回に焦つてゐた胡漢民一派が策動したものゝ如く、胡漢民の弟及び林有逸はために逮捕された）勢ひ國民黨第一次全國代表大會に際しては亡命中であつたといへども、中央委員に選擧され、同時に工人部長に任ぜられた。然し乍ら當時の情勢ではそれは一種のロボットに過ぎなかつた。そのうち十五年廣東に歸來したが、思想的立場から蔣介石一派と相容れず、香港、上海、廣東等の各地で反左翼運動に從ひ、十六年蔣介石一派が國民政府を樹立するや、これに加はり、國民黨中央執行委員政治部主任として、南京に於いて武漢の國民黨左派に對抗し、同年蔣介石の下野と共に外遊した。斯くて武漢、南京の合作後は、中央特別委員會委員、國民政府委員、軍事委員會、主席團委員、中央黨部宣傳部主任等に擧げられ、蔣介石と合作し、翌十七年には國民政府立法院長に就任、當時から「三民主義の連鎖性」と稱する著述によつて孫文の學說を體系づけると共に、病的に鋭い毒舌を弄しはじめ、遂に蔣介石と意見の衝突を招き、二十年南京に監禁されるに至つた。この監禁事件は黨の內外に大衝動を與へ、古應芬、蕭佛成、鄧澤如等が連袂央東に歸り、外遊中であつた林森も亦蔣介石に對して、その釋放を勸告するなど、政局は大混亂に陷つた。これがために南北分裂狀態となり、廣東では非常會議が開かれ、汪精衞、孫科、古應芬、陳濟棠、宋宗仁、唐紹儀、蕭佛成、鄒魯等が中心となつて、蔣介石政權に反對しつゝ、獨立政府が出現するに至つたのである。然るにその後滿洲事變の勃發に依つて、南北の妥協が成立したのを動機に釋放せられて上海經由香港に赴き、靜養することゝなつたのである。胡漢民としては廣東に於いて、反蔣運動を始める積りであつたらしいが、非常會議解散後、實權を掌握せる陳濟棠が、その歸還を歡迎せなかつたのみか、却つてこれを拒絕するが如き態度に出たゝめ、その後香港に蟄居して、新國民黨樹立の運動に着手し乍ら、最近に及び遂に急逝するに至つたのである。

×　×　×

以上の如く、胡漢民の勢力凋落につれて西南文治派なるものが沒落の趨勢を辿りつゝあつた中に、稍や積極的に活躍してゐたのは、雛魯であつた。元來雛魯は胡漢民派一分子として數へられてゐたやうであるが、その閱歷に於いて、その把持せる思想系統に於いて、胡漢民とその軌を異にし、而かも、東江系統であるため、胡漢民派と合流し難い點なしとせなかつた。唯中山大學を根基とするだけで政界の局面に殆どその勢力がないため常に胡漢民派と聯絡しやうとしたのであり この點に於いて西南文治派を形成する一分子として胡漢民及びその一派と對等の地位にあつた。

×　×　×

雛魯　廣東省大埔縣の產。西山會議派の領袖で、今尙ほ「三民主義月刊」に據つて盛に反蔣熱を煽りながら活躍してゐる。廣東法政學堂卒業、のち淸朝の末日本に留學中、同盟會に加入し歸國後、廣東に於いて革命運動に携はり、第一次革命のゝち、廣東都督を代表して南京臨時政府の組織に參劃した。第二次革命の失敗後は、日本及び南洋等に於いて、袁世凱打倒運動に努め、民國十二年廣東省財政廳長に就任、十三年には國民黨第一期中央執行委員に選ばれ、廣東大學の校長になつたこともあるが、思想的には國民黨の極右派に屬し、從つて共產主義とは根本的に相容れず、遂に廣東を去り、國民黨代表として北京に赴き、十五年國民黨內に於ける反共產主義者を集めて北京の近郊西山の碧雲寺に會議を開催した。これによつて所謂西山會議派なる名稱が生れたのであるが、西山會議派は國民黨の最右翼で、孫文の在世中から國民黨內の右翼派は容共政策に反對してをり、孫文の死後遂に左右兩派の對立激化と共に、西山會議の開催を見るに至つた所以であつた。斯くて西山會議は本部を上海に置き、別に中央執行委員會を組織し、第三インタナショナルに對し、第四インタナショナル、卽ち民族インタナショナルを主張したが、その黨勢振はず、その後南京、武漢の合併に際しては、この一派も亦國民黨の各派と合流するに至つた。自然南京、武漢兩政府及び西山會議派の妥協が成立したのち、國民黨中央特別委員、中央黨部青年部委員などに擧げられたのであつたが、結局蔣介石派と合はず、十七年許崇智と共に黨務視察といふ名目の下に米國に赴き、同年秋歸國後も、上海に隱れて依然反蔣工作に盡瘁し、翌十九年には擴大會議に參加し、活躍して失敗に終り、二十年には廣東派の反蔣運動に加はり、廣東に入りて廣東國民政府委員に就任し、同年石友三の反蔣擧兵には天津に赴いて活躍した等、反蔣運動には、常にその裏面にあつて策動し、同年末廣東、南京の合作後國民黨第四期中央執行委員、國民政府委員に推され、二十一年西南政務委員會の設置さるゝや常務委員に任ぜられ、次いで廣州國立中山大學の校長となり、現在では國民黨第五期中央執行委員に選出されてゐる。

×　×　×

(一)　胡漢民派の分子

胡漢民の政治的生涯は比較的長く、而かも國民黨內に於いては汪精衞と共に大先輩であつたがその全盛時代に於いてすら所謂胡漢民派としてそれに所屬する乾分が極めて少なかつた。民國十六年國民黨第三次全國代表大會當時の最も得意の時代に於いてすら胡漢民派としては

劉蘆隱、李文範、桂崇基、焦易堂、馬超俊、繆斌、鄧澤如、蕭佛成、林雲棨等々に上つてゐる。右のうち現在では胡漢民派を離脱して蔣介石系に接近したもの、乃至その他の各派に趨つたものもあり、結局陳融、劉蘆隱、黃季陸等をその直系として、その他傍系ともいふべき蕭佛成、楊庚、堪唐儀、何世楨等々を數へ得るに過ぎない。そのうち陳融、劉蘆隱、黃季陸は寧ろ政界に於ける第二流の人物である。

×　×　×

蕭佛成　福建省の產幼時からシヤムに於いて父業を繼ぎつゝ、商業を營んで成功し、華僑中の大勢力を占むるに至つた。早くから同盟會に入り經濟的に多大の貢献をなし、民國成立後盛谷に華暹新報を創刊して社長兼編輯長となる傍ら、在シヤム國民黨總支部長となつた。十五年國民黨第二次全國代表大會にシヤム華僑代表として參加し、國民黨中央執行委員に擧げられ、十六年中央黨部海外部員となり、十八年には國民黨第三明中央監察委員に選ばれ、二十年國民政府僑務委員會常務委員に推され、爾來シヤムに在留して殆ど歸國しなかつたが、廣東派の反蔣運動に協力し廣東國民政府の成立と共に政府委員に擧げられて廣東に歸り、南京、廣東の合作後は國民黨第四期中央監察委員、中央執行委員會西南執行部海外黨務主任、西南政務委員會常務委員となり、現在でも國民黨第五期中央監察委員として前記の各職に就いてゐる。

×　×　×

楊庶堪　四川省巴縣の產。民國成立後中國同盟會四川支部長、四川省議會議員等に擧げられ、孫文の信任を得て民國八年四川の兵亂に乘じ、四川省長に任命されたが就任するを得ず、十二年廣東大元帥府祕書長となり、十三年國民黨第一期中央候補監察委員に擧げられ、廣東省長となり、十四年孫文派を代表して段祺瑞政府に入り司法總長に就任し、二十年國民黨第四期中央候補監察委員に選出され、國民政府委員を兼ね、現に國民黨第五期中央候補監察委員に選出されてゐる。

×　×　×

唐紹儀　廣東省中山縣の產、米國コロシビア大學卒業後、朝鮮公使館書記官、仁川總領事、天津海關道尹、西藏全權大臣、外務部右侍郎、滬寧、京滬鐵路督辦、稅務大臣、郵傳左侍郎、郵傳部大臣、國務總理、外交總長等に歷任し、民國六年段祺瑞政府に反對して孫文と共に廣東に軍政府を組織の上、軍政府總裁兼財政部長となり、八年南北和議問題に關し、南方總代表として上海にに赴いたが和議決裂に終り、九年廣東軍政府內の軋轢に伴ひ廣東を去つたと雖も、同

年末孫文、伍廷芳と廣東軍政府を再興した。十年財政部長に、十一年國務總理に任ぜられたが就任せず、その後上海、廣東間に自適しつゝあつたところ國民政府が孫文の發祥地たる中山縣を模範縣となすため、中山訓政委員會を組織するや、十八年その主席に就任、二十年中山縣長となり、同年廣東の獨立と共にこれを援け、同政府常務委員に推され、同年末國民黨第四期中央監察委員に選出された。斯くて廣東、南京兩政府の合作後國民政府委員となり、二十一年廣東省政府委員、西南政務委員會常務委員にも擧げられ、現に國民黨第五期中央監察委員、廣東省政府委員、その他西南政務委員等に就任してゐる。

×　×　×

何世楨　安徽省望江縣の產。米國ミシガン大學卒業後、東吳大學法科教授、第三次國際辯護士協會支那代表、安徽省政府委員兼教育廳長、上海共同租界臨時法院長、上海特志大學校長等に歷任、現在では特志大學校長に專任し、國民黨第五期中央候補執行委員に擧げられてゐる。

×　×　×

陳融　廣東省番禺縣の產。胡漢民夫人の實兄。日本中央大學の卒業生、民國十六年廣東省政府委員兼司、法廳長に任ぜられ、その後國民政府政務處長となつたが、二十年廣東の獨立運動起るに及び南京を去り、同年廣東政府成立するや、同政府祕書長に就任し、同年末南京、廣東の合作の後、西南政務委員の設立と共に同委員祕書長となり、更に二十四年末國民黨第五期中央候補執行委員に選ばれた。

×　×　×

劉蘆隱　江西省永豐縣の產。胡漢民の直系として黃季陸と共に最も信任を得た乾分、早くから中國同盟會に加入して革命運動に從事し、民國六年上海復旦大學卒業のゝち渡米「カリフオニヤ」大學に經濟學を學び、全米國民黨支部總幹事となり、十三年國民黨第一次全國代表大會には在米華僑を代表して出席した。その後上海復旦大學社會學科主任、中央半月刊主筆となつたが、十七年胡漢民、孫科、伍朝樞等と共に歐洲視察旅行に赴き、同年歸國のゝち國民政府立法院編譯處長となり、同時に國民黨中央黨部宣傳部副部長に任ぜられ、十八年には國民黨第三期中央執行委員に任ぜられ、十九年中央黨部宣傳部長に、二十年廣東派の獨立に際し、孫科南下の後を承けて考試院副院長代理となつたが、同年南京、廣東兩政府の妥協後、國民黨第四期中央執行委員に選ばれ、中央黨部宣傳委員會副主任ともなり、同年末國民政府の改組に當つて考試副院長に就任したと雖も、二十一年各職を辭して南下し、香港に赴き、爾來胡漢民の新國民黨

創設のために奔走したが捗々しからず、現に國民黨第五期中央執行委員に擧げられ、同時に中央執行委員會宣傳部長に任ぜられてゐる。

× × ×

黄季陸　四川省永寧縣の産。米國カリフオルニヤ大學の卒業生、早くから廣東、上海間にあつて革命運動に從事し、民國十七年廣東省黨部宣傳部長兼廣州民國日報社長となり、傍ら中山大學教授となつた。次いで二十年廣東國民政府委員となつたが、汪精衞との合作に反對して廣東を去り、その後胡漢民の新國民黨樹立運動に參加し、二十四年末國民黨第五期中央候補執行委員に擧げられてゐる。

× × ×

(二)　準胡漢民派の分子

故古應芬の系統に屬する林雲陔一派(古應芬の女婿劉紀文をもこの部類に編入すべきであらう)は、胡漢民派に近く、これを準胡漢民派と稱することが出來る。この一派即ち所謂高州系は政界に相當の根基を有してをり、而かも比較的鞏固で、現在では後述せる新興官僚系に壓迫されつゝありと雖もこの派には以上の分子のほか、崔廣秀、李綺庵、楊熙績、詹菊似、羅翼羣、李文範等々があり、比較的多士齊々で、これらは何れも國民黨第五期中央委員に選ばれてゐる。

× × ×

劉紀文　廣東省東莞縣の産。前清末日本法政大學に學びつゝ、革命運動に投じ、廣東軍政府金庫監理、廣州市審計處長、陸軍部軍需要司長、大元帥府審計司長等を經て民國十二年渡英し、ケンブリツヂ大學、倫敦大學に入り、歐米都市行政狀態を調査の上十五年歸國後廣東省政府委員兼農工廳長に任ぜられ、同年北伐軍の進出と共に國民革命軍總司令部軍需處長、經理委員會主席となり、十六年國民革命軍の南京占領と同時に同市長となつたが同年蔣介石の下野と共に辭任し、蔣介石に從つて日本に赴き、十七年國民政府建設委員會委員となり、北伐完成後南京特別市々長に就任、十八年國民黨第三期中央執行委員に選ばれ、十九年上海々關監督に任ぜられたが、二十年廣東派の反蔣介石運動に參加し、廣東獨立政府成立するや、同政府政務委員會常務委員となり、陳友仁と共に渡日し、同年末南京、廣東兩派の合作後、國民黨第四期中央執行委員に擧げられ、二十一年西南執行部常務委員祕書長、西南政務委員、廣州市長に就任し、現在では、國民黨第五期中央執行委員、西南各委員に就任してゐる。

× × ×

林雲陔　廣東省高州の產。米國留學生出身。民國十六年廣州市政委員長に任ぜられ、同年廣東共產黨事件起るや、一時辭任したが、十七年李濟深の廣東に歸るに及んで再び市政委員長となり、廣東政治分會委員を兼ね、同年特別市政施行と共に廣州特別市々長兼廣東省政府委員に就任した。十八年國民黨第三期中央候補監察委員に選ばれ、二十年胡漢民の監禁事件後、古應芬の下にありて廣東獨立を策し、廣東國民政府成立の後は、廣東省政府委員兼行政廳長、廣東財政特派員、財政委員會委員等々となつたが、南京、廣東兩政府の合作後國民黨第四次中央候補監察委員に選ばれ、中山大學校長となり、二十一年西南政務委員常務委員、廣東省政府主席に任ぜられ、現在でも亦依然西南政務委員會常務委員、廣東省政府主席として國民黨第五期中央監察委員に選ばれてゐる。

×　×　×

崔廣秀　現在國民黨第五期中央候補監察委員に選ばれてゐる。

×　×　×

李綺庵　華僑の出身、國民政府僑務委員會委員に任ぜられてゐたが、民國二十四年末國民黨第五期中央候補監察委員に選ばれた。

×　×　×

楊熙績　湖南常德縣の產。南京特別市黨部執行委員、國民政府文官處祕書兼文書局長等に歷任したが、現在國民黨第五期中央候補監察委員に擧げらる。

×　×　×

詹菊似　現在國民黨第五期中央候補監察委員に擧げられてゐる。

×　×　×

羅翼群　廣東省の產。黃埔陸軍々官學校卒業のゝち、孫文の下に於いて憲兵司令官、軍需品總監總參議。第一軍長、公路局長等に歷任し、その後日本に留學して民國十九年歸國。二十年廣東國民政府獨立するや、同政府政務委員に任ぜられ、同年末廣東、南京兩政府妥協するに及び、二十一年西南政務委員會常務委員に擧げられ、現在更に國民黨第五期中央候補監察委員に選出されてゐる。

×　×　×

李文範　廣東省番禺縣の產。胡漢民の義弟として寧ろ直系胡漢民派の中に入れねばならぬ。部類に屬する。日本法政大學卒業後胡漢民に從つて革命運動に携はり、曾て廣東省長公署祕書と

なつた。次いで民國十六年廣東省政府委員兼民政廳長政廣州治分員に會委任ぜられ、十七年廣州市黨務指導委員となり、北伐完成後國民政府の改組さるゝや立法院長胡漢民の下に祕書長となり、十八年國民第三期中央執行委員に擧げられた。二十年春兩廣黨務視察專員として南下したが、胡漢民監禁事件勃發と共に廣東に止まり、古應芬と策應しつゝ反蔣運動に從事し、孫科及び汪精衞等反蔣政客を誘ふて廣東に中央執監委員非常會議を組織の上常務委員となり、國民政府を樹立し、政務委員會常務委員に就任、同時に最高法院々長代表ともなつた。斯くて南京、廣東兩派の妥協後は國民政府第四期中央執行委員に擧げられ、胡漢民に從つて香港に滯留し、現在でも引續き國民黨第五期中央執行委員に選ばれてゐる。

×　　×

王寵惠　支那隨一の法律家として、元來準胡漢民系なるが、胡漢民事件後に於ける廣東派の獨立に際しその立場を失ひ、現在では中央派と西南派との間にありて中立的態度を持しつゝ、海牙國際司法裁判所の判事の閑職に就任、廣東省東莞縣の產、天津北洋大學卒業後、政治研究の目的で日本に留學し、次で米國に赴きエール大學で法律を專攻の上歸國後、南京臨時政府外交總長、司法總長、上海中華書局編輯、復旦大學副校長、國立北京大學教授、大理院々長、國際聯盟及び華盛頓會議代表、國際常任法廷副審判官、國務總理、關稅特別會議委員會委員等の各職に歷任し民國十六年南京國民政府成立するやこれに參加して司法部長となり、次いで南京政府の代表として海牙國際司法裁判所に派遣せられ、十七年國民政府司法院長、國民政府委員、國民黨中央監察委員、中央政治會議委員等政府及黨の要職にあつたが、前記の經緯によりその立場を失つたゝめ、各職を辭した以來、現に國民黨第五期中央監察委員、中央政治委員會委員に擧げられ同時に國際司法裁判所判事に留任しゝある。

×　　×　　×

(三) 新興官僚系

新興官僚系は、陳濟棠系に屬し實力派と相呼應し乍ら、西南政界に於いて漸次その勢力の擡頭を示現するに至つた。從つてこの系統の擡頭と共に胡漢民派、特に準胡漢民系が壓迫され出して來た。

而してこの系統に屬するものは、林翼中、區芳浦等の準陳濟棠系を筆頭に、陳嘉祐、黃麟書、陸幼剛、程天固等々であるが、相當の政治的履歷をも有し、何れも現在國民黨第五期中央委員に選ばれてをり、現に實力派と共に廣東省建設三箇年計劃の實行に當つてゐる。

林翼中　廣東省合浦縣の產。廣東高等工業學校卒業後、曾て廣州第一中學校教員となつたことあり、民國十三年陳濟棠の赴露に隨行し、歸國後廣東省黨部內左派の中堅として活動したが、十八年廣東省政府委員に擧げられ、二十年民政廳長、二十一年西南政務委員會常務委員に選擧され爾來今に至るまで留任しつゝ、二十四年來國民黨第五期中央執行委員にも擧げられた。

×　×

區芳浦　廣東省南海縣の產。早くから陳濟棠の下にあつて活躍し、民國十六年に於ける清黨運動の際の如きとくに功績を擧げ、第十一師政治訓練部主任となつたが十八年陳濟棠が討逆第八路總指揮に就任するに及んで總指揮部政治訓練部主任に就任した。十九年の兩廣戰の當時は廣東軍梧州行營祕書長兼梧州市長となり、兩廣の妥協後市長を辭職、二十年廣東に國民政府の成立するや政務委員兼第一集團軍政治訓練處主任に擧げられ、同年南京廣東の合作と共に政治訓練處主任に專任し、二十年西南政務委員會常務委員となり、次いで廣東省政府委員兼財政廳長を兼ねつゝ現在に及び、二十四年末更に國民黨第五期中央候補執行委員に選ばれた。

×　×

陳嘉祐　湖南省湘陰縣の產。日本陸軍士官學校第八期步兵科卒業、第一革命當時湖南獨立團長湖南護國軍梯團長に任ぜられ、更に譚延闓の舊部下として廣東軍第四軍長を經て十六年國民革命軍第十一軍長となり、同年武漢、南京兩政府合作後國民黨第二期中央執行委員、武漢政治分會委員に擧げられ、十七年武漢軍の左翼東路軍前敵總指揮として湖南軍と戰ひ、同年國民革命軍第十四軍長、軍事委員會委員、湖南省政府委員となり、十八年國民黨第三期中央候補監察委員に擧げられて以來、現在に至るまで、每期とも中央候補監察委員に選出されてゐる。

×　×

黃麟書　現國民黨第五期中央候補監察委員。

×　×

陸幼剛　廣東省信宜縣の產。國立北京大學卒業、曾て廣州市政府教育局長となつたことがあり、民國二十年廣東の獨立後廣州市政府祕書兼土地局長に任ぜられ、二十四年末更に國民黨第五期候補監察委員に擧げられて現在に及ぶ。

×　×

程天固　廣東省中山縣の產、米國シカゴ大學及カルフォルニヤ大學に學び、歸國後一時孫文の祕書となり革命運動に從事したが、のち中山大學教授、外交部法律顧問を經て、民國十七年廣

州市政府工務局長に任ぜられ、十八年以後市政府職員の多くが、陳銘樞側に加擔したに拘らず、獨り林雲陔を押したてゝ陳濟棠側と合作し、十九年廣州市黨務執行委員に推され、二十年廣東國民政府の成立するに及んで廣州市長兼廣東省政府委員となり、工務局長を兼ねた。斯くて同年末廣東、南京兩政府の合作なるや國民黨第四期中央執行委員に擧げられ、二十年西南政務委員會常務委員にも選ばれて、同時に市長及び工務局長を辭し、廣東省政府建設廳長代理に任ぜられたが、これ又辭任し、現在國民黨第五期中央候補執行委員に選出されてゐる。

第二節　廣　西　系

同じく西南派と稱する團結のなかでも、廣東系には實力派と文治派とが分立し乍ら、而かも兩派の關係に於いて著しく錯綜してゐるのに對し、廣西系は文治派と雖も凡て全く實力派の下に抱擁されつゝ、そこに何等派別の存在がないのである。

それは廣西系（桂系と稱へられてゐる）の形成が比較的その歴史に古いのと、一時その勢力が天下を風靡するまでの全盛時代をすら示現したに拘らず、爾來失脚に次ぐ失敗を以てし乍ら、その後久しく消極的守勢の時期を繼續して來た上、廣西省の地域的關係が爾かなさしめた所以と謂ふを得べく、蓋し必然の經過であらう。

從つて廣西系はそれ以來、單獨的に行動する程の能力を所持し得なくなつたと共に、自然西南派の一構成分子としてのその存在を繼續してゐるのである。卽ち廣西系としては、廣東系實力派及び文治派との提携を前提としない限り、天下に呼號することを得ない環境の下におかれるに至つたのである。

これを國民黨の初期當時に比較するとき、その萎縮振りの顯著なること蓋し驚異に價するものありと謂はざるを得ぬ。

×　　×　　×

「元來國民革命軍が北伐を開始しない以前の國民黨は、その權勢の及ぶ範圍が僅かに廣東、廣西の二省に過ぎず、とくに廣西系は既に實際地盤の一半を占有してをり、その勢力には當然侵すべからざるものがあつた。自然國民黨內に於ける廣西系と稱する團結はこの時に形成されたと謂つて好い。

謂ふまでもなく、國民黨の第二次全國代表大會は共產黨及び國民黨左派の操縱の下に於いて擧行されたのであつたが、共產黨及び國民黨左派と雖も、廣西系の勢力の侮るべからざる事は

これを認識してゐた。從つて新たに李濟深が執行委員に當選し、李宗仁及び黃紹雄が候補監察委員に擧げられ、第一次全國代表大會當時から引續き留任せる李宗黃、張知本に加へて、廣西系は五委員を送り出してゐるのであつた。而かもこの時代の廣西系としては黨內に於ける勢力の强化など殆ど問題でなく、その軍事的實力の擴張を謀るに汲々たるものがあつた。(斯うした意圖は今に至るまで毫も變更されない)。勢ひ廣西系軍人と黨とは比較的その緣が薄く、自然黨を重視しなかつた。然るにこと軍事に至つてはその競爭に極めて激しく、李濟深は旣に廣東軍中最も精銳なる第四軍を掌握し、李宗仁の第七軍も亦尨大なる編制を行ひ、その兵數五旅と稱へられ、これを編制當時の一軍九團に比較するとき殆ど倍加してゐたのであつた。斯くの如くにして北伐軍の出發に當り最も重要な後方の經理は廣西系の李濟深がこれを承り、而かも前敵總指揮には李宗仁が當りつゝ、湖南から湖北に湖北から江北に進攻したのであつた。同時に廣西系の靈魂と謂はれる白崇禧は國民革命軍總司令部參謀長兼東路總指揮として上海を陷れ、南京を克復した後廣西系の勢力は多々益々膨脹するに至つた。その後、武漢政府の倒壞後(南京、武漢の合作)蔣介石も亦下野するに至つた結果、この時代の中央部は旣に全く廣西系の統制下にあつたと稱して好い。その間臨時執行監察委員會議が存在してゐたとは謂へ、それらは單に名目のみに過ぎなかつた。延ひて、廣州に張發奎及び共產黨の二事變が前後して勃發したと雖も、これも亦久しからずして李濟深の部下により平定せられ、勢ひ、南支及び中央一帶は一時廣西系の手に歸して了つた觀さへあつた。次いで武漢政治分會も亦その實勢力をもつてゐた程潛が白崇禧のために監禁せられ、武漢一帶には廣西系の胡宗鐸、陶鈞がこれを占據し、尙ほ白崇禧は又、第四集團軍を率ひつゝ、第一、第二、第三集團軍の北伐成功の機會に乘じて疾馳、北京に入り、その雄厚なる兵力を以つて楊宇霆と結んで張作霖倒伐の暗躍をなした等、北平政治分會の實權は白崇禧の左右するところとなつた。加ふるに李宗仁は南京を統制し、黃紹雄が廣西に鎭坐してゐた。この時蔣介石が復職したに拘らず廣西系には何等の動搖をも來たさなかつたのである。自然第二期四中全會及び五中全會に於ける國民黨は、廣西系の手に操縱されてゐたのであつた。然し乍らもと〳〵廣西系が斯うした權勢を獲得した所以のものは、常に絕好の機會を捉へてこれに乘じ得たからであり、從つて又その崩壞への機會に遭遇したのは寧ろ當然であつた。卽ち湖南事變に伴ふ蔣介石派の廣西系討伐がそれであつた。國民黨第三次全國代表大會に於ける廣西系の討伐決議後　李濟深が湯山に監禁されて廣東に於けるその地盤は部下の陳濟棠、陳銘樞等に襲奪され、南京側の征西軍(この時の征西軍の陣容は討逆軍、第五路總

指揮唐生智、第六路總指揮方振武、討逆軍第一軍長劉峙、第二軍長朱紹良、第三軍長朱培德、第四軍長何健、第五軍長魯滌平、第八軍長李品仙、第九軍長何成濬、第十軍長方振武であつた)は、何んの苦もなく湖北省に進攻し、胡宗鐸、陶鈞、伍庭等は二十萬の大軍を擁しながら、一戰をも交へずして僅かに身を以て逃れた。時に偶ま智謀を以て聞へた白崇禧は病氣のため北京郊外、西山の碧雲寺に横臥し、李宗仁も亦湘南で病氣の靜養に當つてゐた。白崇禧は病を押して平津に脱出したがその統率してゐた十萬の大軍は四散して中央軍に收容され、李宗仁は湖南で敗走の兵を收集し乍ら北上しようとしたが、後方には早くも廣東軍が迫つて來たゝめ、廣東を奪取すべく南下した。そこで中央の西征軍は各方面から湖南に入りこれを平定したのである。廣西系にとつては幸ひ黄紹雄のみ獨り廣西省を守つてこれを接應した結果、敗殘兵を收容することを得た。以上の徑緯により廣西系は一朝にして失脚したのであつたが、唯その兵力及び財力に於いて尙ほ頗る餘裕を存してゐた等、白崇禧が廣西省に歸省以來、その補强工作に努め、胡宗鐸、陶鈞、伍庭等の手から兵權を奪取して親ら前敵指揮となり、ためにその軍勢著しく振興するに至り、果然梧州から肇慶に於ける廣東軍を擊退して小北江から清遠を陷れ、最後に廣州を距る僅か百支里の白泥まで進擊したが、白泥の一戰で全部潰滅に近いまでの打擊を受け、敗退しつゝさきに占有した廣東西北部を盡く失ひ、且つ梧州、桂平、桂林等も亦相繼いで陷り、辛うじて南寧、柳州でこれを喰ひ止め得た際、偶ま張發奎軍の廣西入りと共に、その應援を得て全滅を免れ、その後張發奎軍廣西軍との聯合軍は一たび清遠、花縣等まで反攻したが、深入りを避け、爾來一歩も省境を出でなかつた。そしてこれより後、全支に於ける反蔣勢力の錚々たるものとして各方面に勃發した反蔣運動にはこれに參加することを吝しまず、馮玉祥、閻錫山等の擴大會議にも亦加はり張和本、胡宗鐸を代表として派遣し、胡漢民の監禁事件に端を發した廣東系の反蔣運動にも亦加擔して、非常會議では張定璠、李宗仁、白崇禧、黄旭初等が中央委員に列して、廣東國民政府の組織に當りつゝ、南方に於ける反蔣勢力の團結を示現し、湖南にまで兵を進めたが、廣東、南京の妥協成立と共に、西南政務委員會、中央執行委員會西南執行部の構成分子として、廣東系實力派、文治派と協力し乍ら中央に對する對立勢力を形成してゐるのである。」(社會新聞第一卷第二十五期「三中全會前に於ける國民黨各派系の史的分折」から要譯)

×　×　×

以上によつて知り得た通り、廣西系は同じ西南派中に於いても胡漢民一派の文治派と最も關係

深く、胡漢民派の反中央工作には常にそれに對する援助を怠らず、一時胡漢民派と合作して廣東實力派に向つての攻勢の陰謀説すら傳へられたことがあつた。

然しながら廣西系は、さきの反蔣運動の失敗以來、專ら省内の自治と、内部の充實に專念しつつ、あらゆる方面に亘りその建設に勇往邁進した結果、全支那に於ける模範省と稱へらるゝまでの現在の廣西省を築き上ぐるに至つた。

即ち廣西省を模範省とするためには、非常に積極的進取的にあらゆる新文化を取り入れ、新施設を試み、經濟委員會を創設したり、日本から飛行教官を招聘して軍備の方面にもその充實を圖り乍ら、貧しい廣西省を以て今日の進歩を持ち來たしてゐる。

× × ×

而して現在の廣西系は李宗仁と白崇禧とがこれを背負つて立つてをり、これらの實力派の下に文治派をも抱括しつゝあること前述の通りで、而してその軍隊は廣西軍（舊第四集團軍）と稱へられ、形式上中央政府の統制に服するも、廣東軍との間は財政的の補給を受くる關係上反軍となつてゐるに過ぎないのである。いまその軍の内容を示すと次の如くである。

第四集團軍（總司令　李宗仁、副司令　白崇禧、總參謀長　葉琪）

第七軍（軍長　廖磊、二個師、特務團）

第十五軍（軍長　白崇禧の兼任、三個師及び特務營一）

第十九師（師長　廖磊）第二十四師（師長　覃連芳）第三十一師（師長　韓彩鳳）第四十三師（師長　黄鶴齡）第四十四師（王贊斌）第四十五師（師長　李品仙）

× × ×

而して廣西系は李宗仁、白崇禧を領袖として現在國民黨第五期中央委員に選出されてゐるものに次の六人がある。

李品仙、李任仁、張定璠、甘乃光、黄旭初、張知本。

× × ×

李宗仁　廣西省桂林の産、廣西陸軍學堂卒業後陸榮廷の麾下にあつたが、陸榮廷の失脚後は孫文の下に走り、民國十五年國民黨第二期中央候補監察委員に擧げられて北伐軍に參加し、革命軍總指揮兼第七軍長に任ぜられた。北伐軍の長江進出の後、武漢、南京の分裂に際しては、南京側に於いて國民政府軍事委員會常務委員、安徽省政府委員兼軍事廳長となり、武漢政府が共産黨を排擊した後は南京派を離れて武漢派に接近し、漸く反蔣的態度を明らかにして遂に蔣介

石を下野せしめ、次いで汪精衛、胡宗鐸、朱培德等と九江に於いて武漢、南京の無條件合併を決議し、南京に統一政府成立するや、中央特別委員會委員、國民政府委員、軍事委員會主席となつた。斯くて民國十六年蔣介石の復職後は更に蔣介石と提携し、長江に兩湖會議を開き、武漢政治分會を組織の上、自らその主席となり武漢を中心に兩湖地方に着々その地盤を擴大し、十七年白崇禧を前敵總指揮として北伐に參加せしめ、北伐完成後北京に於ける巨頭會議に參加した。翌十八年頃から蔣介石は露骨に廣西派の壓迫を開始し、編遣問題、政治分會の廢止問題が表面化するや、李濟深等と共に大廣西主義實現のため積極的行動に出で、先づ蔣介石派の湖南省政府主席魯滌平を長沙から追放した（前述の湖南事件とはこれを指す）その後この運動は失敗に歸し李濟深が監禁されるに及び、廣東に歸つて兩廣の實權を一先づ掌握しつゝ、兩湖地方に進出の上蔣介石に抗爭すべき方策をとつたが、陳濟棠のクーデターにより、廣西に退却し、各地の廣西軍も亦相繼いで潰滅するに及び、爾來廣西に遁入し反蔣運動を續け、民國十九年の閻錫山、馮玉祥の反蔣擧兵に呼應しつゝ討蔣軍第一方面軍總司令として、又もや湖南に進出の上一時は長沙をも陷れるまでの優勢さを示したと雖も、再び廣東軍のために後方を脅かされて廣西に歸還した。二十年廣東派の獨立に際してはこれと合作し、廣東國民政府委員、軍事委員會常務委員、第四集團軍總司令に就任、同年又兵を湖南に進めたが、廣東、南京間に妥協成立したため中止し、翌二十一年には西南政務委員會常務委員となり、同時に廣西省の建設事業に對する努力を續け、中央側に於いては國民黨第五期中央監察委員、軍事委員會常務委員に擧げられてゐる。

×　×　×

白崇禧　桂系の靈魂と謂はれ、廣西系の知囊として知られてゐると共に用兵家としては支那に於ける第一人者で蔣介石と並び稱へられつゝあり、李宗仁の理想的の參謀長である。廣西省桂林縣の產、保定陸軍軍官學校を卒業後、廣西第七軍參謀長、國民政府參謀本部副部長の各職を經て、民國十五年の北伐に際しては、國民革命軍總司令部參謀長として參加し、十六年浙江攻略ののち、上海戒嚴司令、上海臨時政治委員會委員、江蘇政治委員會委員、淞滬衛戍司令等の各職に歷任した。その上海在住中は共產黨が武漢派の指令に基き、蔣介石の地位轉覆を目的として行つた上海租界騷擾事件に對し、敢然疾風迅雷的の彈壓を加へ、一躍內外人の名聲を博するに至つた。十七年南京、武漢の合作後武漢政治分會委員に擧げられ、李宗仁を助けて武漢地方を中心とする兩湖一帶に廣西派の地盤を築き、同年第四集團軍前敵總指揮として北伐戰

繼續戰に參加し、京漢線に沿ひつゝ北上して北平に入り、北平政治分會委員に擧げられた。北平入りが極めて容易に斷行されたことに關しては、楊宇霆との間に密約が出來てをり、楊宇霆はその機會に乘じて張作霖を打倒する豫定であつたゝめであると謂はれてゐる。北平在住中、十八年湖南事件に端を發して蔣介石對廣西派の關係が決裂した時は、北平の近郊西山の碧雲寺で病氣靜養中であつた爲、流石智謀を以て自他共に許した男も、如何ともし難く辛うじて平津の地を離れ、身を以て日本經由廣西に歸還した。爾後李宗仁と共に廣西に立籠り、或は强力なる民團軍の訓練に、或は廣西をして支那第一の模範省たらしむべく建設事業に孜々としてその全力を傾けて來た。而かも一方相變らず宿敵蔣介石一派に對しては反抗運動を執拗に繼續し、十九年の馮玉祥、閻錫山等の反蔣運動にはこれに呼應し、廣東國民政府の成立に際しても亦加擔した。翌二十末未南京、廣東の合作後、國民黨第四期中國執行委員に選出され、廣東側では國民黨中央執行委員會西南執行部常務委員、國民政府西南軍事委員會委員に選出され、現在でも西南執行部常務委員及び中央執行委員に再選されてゐる。

×　×

李品仙　湖南省道縣の產、唐生智系から廣西系に轉じた實力派、保定軍官學校卒業後、唐生智の部下となりて累進し、民國十五年には第八軍副軍長に任ぜられた。十六年更に第八軍長兼武漢衛戍司令湖北省政府委員等に歷任、次いで同年唐生智の組織した武漢政治分會の委員となつたが、唐生智討伐の南京軍が漢に入るに及んで湖南に退き、唐生智の下野後廣西軍に投じ、十七年國民革命軍第四集團軍第二軍團總指揮兼第八軍長として唐生智系の軍隊を率ゐて李宗仁の下に屬し北伐に參加した。斯くて北伐完成後第五十一師長となり、十八年廣西派の中央離反後も亦行動を共にし、第八軍長として廣西省桂林方面に駐し、二十年廣東の獨立後第四集團軍第八軍長兼第二十二師長及び軍事委員會委員に擧げられ、南京、廣東の妥協ののち二十一年には西南軍事委員會委員に當選し、現在では第四集團軍第十五軍第四十五師長に就任、中央方面では國民黨第五期中央候補執行委員に選ばれてゐる。

×　×　×

李任仁　現在廣西省政府委員に就任、同時に國民黨第五期中央候補執行委員に選出されてゐる。

×　×　×

張定璠　江西省南昌縣の產。保定陸軍軍官學校卒業後、廣西司軍旅長、黃埔陸軍軍官學校總辦公廳主任等に歷任し、民國十五年國民革命軍總司令部參謀處長として北伐に從ひ、江西臨時政治分

會委員南昌市政廳長に任ぜられ、次いで白崇禧の北伐軍東路前敵總指揮に參謀長となり、十六年上海占領後、淞滬衛戍司令部參謀長に任ぜられ、白崇禧の代理として上海に留まり、その後上海特別市長を兼ねた。十七年北伐完成後、上海市長を辭し、同年廣西派の南京離反後日本に亡命した上、二十年廣東の獨立と共に廣東國民政府委員に任ぜられ、同年南京廣東の妥協に際して、國民黨第四期中央候補執行委員に選出され、現在でも引續き國民黨第五期中央候補執行委員に擧げられてゐる。

× × ×

黄旭初　廣西省の產。元來黄紹雄の幕下であつた。保定陸軍軍官學校卒業後日本に留學し、民國十五年國民革命軍第七軍（軍長黄紹雄）所屬部隊の旅長となり、同年第六師長に昇進し、十七年黄紹雄の第十五軍長となるに及んで同副軍長兼第三師長に就任した。十八年廣西系が反蔣軍を起すや黄紹雄と共に廣西に於ける後方軍政事務の處理に任じた。二十年黄紹雄の後を承けて、第十五軍長に進み、同年廣東の獨立後、廣東國民政府から廣西省主席に任命され、民政廳長をも兼ね、二十一年南京廣東の合作なるに伴ひ、西南政務委員會常務委員に擧げられ、同年第十五軍長を辭し、現在では國民黨第五期中央執行委員に當選、同時に廣西省主席に就任しつゝある。

× × ×

張知本　西山會議派から廣西系に轉じた政客、湖北省江陵縣の產。日本法政大學の卒業生、第一革命後湖北司法司長、衆議院議員、湖北省立法科大學校長等に歷任し、民國十三年國民黨第一期中央候補執行委員に擧げられ、十四年西山會議に參與したが、十六年武漢國民政府が共產黨を排除した後、漢口に入り、國民黨中央執行委員會宣傳部委員、湘鄂臨時政務委員會委員に任ぜられ、十七年湖北省政府主席、武漢政治分會委員等に推されたが、同年辭職し、爾來西山會議派の一人として反蔣介石運動に從ひ、十九年閻錫山、馮玉祥等の反蔣擧兵に參與し、二十年國民黨第四期中央候補執行委員に當選、現に國民黨第五期中央候補執行委員に擧げられてゐる。

第四章　汪精衛派及び太子派の形成とその構成分子

汪精衛派及び太子派（孫科の一派を太子派と呼んでゐる）は、その階級性を吟味するとき、何れも小資産階級及び民族産業資本家階級の一部を代表する派系であると稱して好い。

而かも前者は國民黨内に於ける左派として派生し、後者は國民黨右派として生れ、且つ何れもその存在を續けて來たところに各々の特徴と好個の對照とを示してゐた。

即ち西南派が專ら實力系に領導されながら、一定のイデオロギーを持たず（胡漢民一派の文治派の唱道する孫文主義を表看板としてゐるが）、寧ろその地盤の擁護乃至地盤獲得欲に支配されつつ動き、舊軍閥と殆ど異るところのない存在を繼續してゐたのに對して、汪精衛派及び太子派は小資産階級乃至民族産業資本家階級の一部を代表する黨派として、民主政治の實現を鬪ひとらんとするイデオロギーを多分に帶有しつゝ、その實踐に可成の努力を拂つて來たのであつた。

×　×　×

然し乍ら小資産階級が常に投機性を帶び、一種の日和見的態度を持しつゝ、機會主義に陷り易い如く、その階級を代表するこの二つの派系も亦、到底機會主義者たることを免れ得なかつた。それは後節に略述するが如く、兩派の辿つて來た足跡を見るとき、自ら判明する。

就中汪精衛派の如きは、國民黨左派（民主々義の範圍に屬する）として行動したゞけ、革命運動の經過と共に、極左翼主義と極右翼主義との動向が劃然と區分され、而かも兩者の相距る距離が益々遠くなるに從ひ――換言せば赤と白との二色にのみ劃分されて來るにつれ――漸次その階級的立場に動搖を來しながら、遂に支配階級に隷屬せざるを得なくなつた。

斯うした點に至つては孫科派の如く、最初から極右派として立つてゐた黨派は別問題であつた。即ちこの階級の代表者は最初から支配權力のなかに割込まんとする政治的努力を最も露骨に續けてゐたからである。

×　×　×

謂ふまでもなく、先進國の例に徵するとき小資産階級乃至民族産業資本家階級の一部を代表する黨派は、議會政治の實現を欲求し乍ら常に政治的デモクラシーを要望し、所謂民主政權の樹立

を期することを目標として闘ふのを既定のコースとなしてゐたが、過去に於ける汪精衛派も太子派も、共に議會政治の實現に對しては比較的その精力を傾注しつゝ戰つて來たのであつた。

然るに支那の如き半植民地社會に於いては、その國際的環境と、その統治上に於ける買辦性乃至複雜性とは、これらの小資産階級及び民族産業資本家階級の民主政治實現への欲求をして到底それを可能ならしめなかつた。

汪精衛派も、太子派も時には獨裁統治權力と妥協し、時にはデモクラシーを振りかざして獨裁權力に抗爭し乍らその實踐に對して著しく不忠實であつたことを免れなかつた所以は、その原因をこの點に求むることが出來る。

× ×

「我等の所謂民主勢力は全國の生産に從事する分子を指す。中國は植民地的國際環境裡にあり、國内にも亦封建勢力が蟠踞しつゝある。ためにすべての生産階級は何れも壓迫を受けてゐる」（汪精衛の「如何にして民主政治を實現すべきか」の一節から）。「所謂革命の意義は壓迫されつゝある下層の大多數の民衆を喚起して政治闘爭に從事せしめ、以て政權を得致し、痛苦を解除し幸福を增進するにある。この大多數の民衆は下層に於いて壓迫されつゝある結果、生活條件例へば衣食住等に於いてすら相當の供給をも獲得し得ない。尤もその精神上に於ける生活要素例へば學問智識等は零に等しく、勢ひこの大多數の民衆をして政治闘爭に從事せしめんとするには、その中の最も覺醒せる分子を團結して起たしめて、訓練と組織とをもたしめ、能力のある戰闘員たらしめたのち、よく一般民衆を領導し乍ら積極的政治闘爭に參加させるにある。この種の團結が卽ち黨であり、この種の戰闘員は所謂黨員である（中略）政治闘爭の戰線中に於ける最要條件の一つは力の集中であり、一つは領導權の統一である。」（汪精衛の黨治に關する談話の一節）

とは、汪精衛が民主政治實現への闘士としての態度を表明した言說であるが、斯うしたイデオロギーを絶へず實踐し續けることを得なかつたところに、小資産階級及び民族産業資本家階級の一部を代表する黨派としての最も大きな惱みがあつた。

× × ×

このことはイデオロギーの確立してゐない孫科派に於いて一層その傾向を顯著ならしめた。

× × ×

汪精衛がその後兎角その政治的節操をまで疑はれ、從前國民黨左派を標榜してゐた當時のやう

に、國民黨下級黨部から崇拜渇仰されなくなり、その一派がだん〳〵影を薄めて行つたのや、孫科派が漸次凋落を深めつゝあるのは支那政治機構が如何なる本質であるか、乃至小資產階級及び民族產業資本家階級の一部を代表する黨派が如何に能力を缺くかを表明するに足る一例證であらねばならぬ。

× × ×

民國二十四年末開かれた國民黨第五次全國代表大會に於いて憲法草案を通過せしめ、國民大會の開催期を確定させたことはこの二派の不斷の努力があづかつて力なしとせないのであるが、然しながらその出來た憲法草案は結局中央派の獨裁强化を法文化したのと異るところないのを見るとき汪精衛派及び孫科派の機會主義とその無力さとが一層明白に表象されてゐるのである。

第一節　汪精衛派

汪精衛派は改組派とも奥方委員派とも呼ばれ、汪精衛を盟主としてその傘下に集まつてゐる一團を指す。元來汪精衛は國民黨左派の領袖であつたゝけ、その勢力下に集つた分子にも亦左派の理論家が多かつた。

× × ×

汪精衛　浙江省山陰縣の產、幼時廣州の學海堂に學び、十九歲で秀才となり二十歲の時廣東から日本留學を命ぜられて法政大學に入つた。日本に留學中中國同盟會に加入し、その機關紙「民報」の記者として革命思想の宣傳に努めたが、光緒三十二年孫文、胡漢民等と共に南洋各地に歷遊しつゝ同盟會支部を創設し、宣統二年單身北京に入り清朝の攝政王載灃の暗殺を企てゝ失敗に終り、捕はれて死刑を宣告された。然るに肅親王にその奇才を惜まれて死一等を減ぜられ、監禁を受けたと雖も第一次革命後釋放された。出獄後上海に於ける南北媾和會議に參與し乍ら北方全權唐紹儀を抱込み、遂に袁世凱と孫文とを握手せしめた。民國二年第二次革命の失敗後佛國に赴き、社會學及び文學を研究して五年歸國し、次いで平和會議に當り廣東政府代表を命ぜられたと雖も受けず、非公式に再び渡佛し歸國後廣東政府に於いて孫文を輔佐し、十年廣東教育會長、廣東軍政府最高顧問に任ぜられ、十一年總參議となつたが、陳炯明の叛亂により孫文と共に上海に赴いた。十三年一月國民黨の改組と共に第一期中央執行委員に擧げられ、孫文の代表として張作霖、段祺瑞を訪ひ、反直運動を協定し、曹、吳の失敗に伴ひ孫文に隨つて北上した。斯くて十四年孫文が北京で歿するやその遺囑を筆記し、その後胡漢民、廖仲愷と共

に國民黨の中心となり國民政府を廣州に組織の上、その委員長及び宣傳部長に推された。然るに十五年國民黨左右兩派の軋轢激化して蔣介石の共産黨に對するクーデターを斷行するや、蔣介石と意見を異にしたゝめに廣東を去つて外遊した。十六年國民政府の武漢進出後、漢口に於ける中央全體會議の決議により迎へられて歸國し、武漢派、蔣介石派の軋轢に對しては上海で陳獨秀との共同聲明を出しその緩和に努めたが、而かも依然蔣介石と意見合はず、ために武漢に去り、共産黨分離後に於ける武漢政府の主腦者となり、蔣介石が下野するや南京武漢の兩政府を合體の上統一政府を樹立したと雖も、中央全體會議の開催に失敗して下野を聲明し、その後間もなく武漢派、南京派、西山會議等の三派會議の結果、中央特別委員會の成立を見るに至り、同委員及び國民政府委員、軍事委員會主席團委員、外交委員會委員、中央黨部組織部主任等に擧げられ、更に唐生智一派が武漢政治分會の廢止に反對して武漢政治分會を再設するに及び、その調停に奔走したが失敗に終り、唐生智討伐令の發せらるゝに伴ひ廣東に赴いた。斯かる間に蔣介石が日本から歸國すると共に上海で蔣介石と會見のゝち、これと提携し乍ら第二期四中全會準備會議を開催したが、廣東に共産黨事件起り、その責任を問はれて各方面の攻擊を受けた結果、政界引退の聲明を發した上、佛國に赴いた。そのゝち十八年祕かに歸國し、香港に於いて廣西系及び張發奎軍を指導し乍ら、反蔣運動に從ひ、十九年の秋北方に於ける閻錫山等の反蔣派と聯絡の上、西山會議派をも加へて、北平に國民黨中央擴大會議を招集しつゝ、新たに國民政府を組織し、反蔣派の大同團結を策したが、軍事行動に敗れて北京政府も亦瓦解するに至り、一時太原及び天津に轉じ、二十年の春香港に赴いた。次いで蔣介石、胡漢民の軋轢によつて廣東獨立政府樹立するや迎へられて同政府組織に參與し、北方の反蔣派とも策應しつゝ、蔣介石の下野を要求した。偶ま同年末蔣介石が國民政府主席及び陸海空軍總司令等の職を辭するに及んで、南京政府と妥協し、一時統一政府に入つたが、そのゝち孫科辭任の後を承けて、二十一年初め行政院長に就任、次いで鐵道部長を兼ね、軍事を蔣介石に委ねて自ら政務に當り、所謂蔣、汪の合作政權を樹立した。然るに數個月にして張學良に對し、滿洲回復に何等の努力を拂はず軍費を求むることにのみ急なるを理由として辭職を勸告する傍ら、自らも一切の官職を辭すと稱へ、上海を去つたが、蔣介石の慰留に努めたのと、張學良の北平綏靖公署主任を免じて、同公署に代ふるに國民政府軍事委員會分會を北平に設置し、蔣介石、張學良の二派以外北方將領をも委員たらしむるに及び、國民政府よりは退くも、國民黨中央執行委員會常務委員として黨務に當り、外より政府を援くることゝして妥協するに至つた。但しその後再び國民政

府に入り、行政院長兼外交部長として政府部内に入つたが、北支事件の際、全面的に日本の要求を容れたと稱し、所謂親米派及び國民黨の反汪精衛派、西南派等が、屈辱外交、亡國外交であると非難し、續いて起つた新生事件等により、益々非難攻撃の的となつたゝめ、二十四年八月病氣靜養と稱へて青島に滯在中、中央に對し行政院長外交部長を辭職する旨を申出でた。蔣介石側では折柄對日問題が窮迫した情勢にあつたので、一應留任を勸告することゝし、辭意を翻へさせたが、偶ま六中全會開會式の當日に於ける射撃事件後、再び辭表を提出し、同年十二月の第五期一中全會でその承認を得、蔣介石が行政院長に就任したのと共に、中央政治委員會主席に選ばれ、現在外遊中であり、同時にその一派は何れも南京政府から去つた。

× × ×

大體右の經歷が示す通り、汪精衛の政治的生涯は頗る數奇を極めてをり、勢ひその一派も亦同樣の經過を示してゐること謂ふまでもない。順序上、汪精衛派と稱する派系の形成されるに至つた概要に關しては、社會新聞第一卷第二十五期「三中全會前の國民黨各派系の史的分析」の中から左にその分を摘錄しよう。

× × ×

汪精衛の地位　汪精衛は國民黨内に於いて聖人の稱がある。これは幾分諷刺的の意味を含んでゐるとはいへ、これを以てしてもその國民黨内に於ける地位の重要さを知ることが出來る。汪精衛の國民黨内に於ける歷史は蔣介石に較べて更に永く、孫文に追隨し出してからでも二十餘年を經過し、國民黨の元老としては既に第一人者のうちに數ふべきである。然るに黨内に於いて所謂汪精衛系が形成さるゝに至つたのは近年の事實に屬し、蔣介石系に較べてすら遙かに遲れてゐたのである。これは汪精衛が元來その性淡白で、權勢の爭奪に對してはこれを好まない上、黨中黨をたつることを希望しなかつたからであつた。勢ひ國民黨改組以前に於ける汪精衛は何れの派系にも屬してゐなかつた。改組後も亦然りであつた。而かも國民黨改組當時の汪精衛は單に普通の中樞工作人員に過ぎなかつた。從つて胡漢民の如きは既に代理元帥となり、廖仲凱も亦廣東省長から財政部長となつてゐたのに比較するとき、寧ろ失意の時代と謂ふべきであつたであらう。孫文の死後黨はその中心を失ひ、共產黨が益々その勢力を伸張するに至つた。而して十四年國民政府が廣州に成立した初期時代に於いて汪精衛はガロン・ボロヂン等のソヴエート顧問に認められ、ために政府主席に任ぜられた。自然汪精衛の政治的地位に著しき遞高を來し、黨内に於ける權力も亦躍進するに至つた。とは謂へ當時尙ほ汪精衛派なるものが形成

されてゐなかつたのである。第二次全國代表大會の際の汪精衛個人の聲名は頗る昂り、黄金時代の觀すらあつた。然るに汪精衛は國民政府主席として實際政治の責任を負ひつゝ、その工作に忙殺され乍ら、黨事を顧るの餘裕がなかつたのと、且つ共産黨に對しこれを信任するところ篤かつた結果、中央宣傳部長としての工作は、毛澤東に代理せしめ、常務會議の事務も亦譚平山、林祖涵等の處理に任せてゐた。故に黨内に於ける汪精衛は一種のロボットに過ぎなかつた。このことはまた政治工作上に於いても略同樣であり、政府主席としての實權をもつてゐたと雖も、當時の國民政府は高等顧問ボロヂンが一切を主宰してをり、勢ひ汪精衛は政治上獨立した一派系を形成するの機會と餘裕をもたなかつたと謂つて好い。

最初の汪精衛系形成　斯かる間に問題の中山艦事件の發生と共に汪精衛は病と稱して離國した。この事件は汪精衛にとつて多大の打擊たるを失はなかつたと雖も、ために汪精衛の聲名は益益昂められた。自然汪精衛の佛國亡命以後、共産黨系を中心として「所謂迎汪運動」なるものが發起され、全國に亘る各派黨部、民衆團體も亦これに饗應するに至つた。この運動によつて汪精衛の三字が支那青年の腦裡に極めて深刻な印象を留めたのであつた。汪精衛を黨の聖人と稱するに至つたのはこゝに基因するのである。その後民國十六年四月汪精衛は佛國から歸つて武漢に入つた以來、既に全國青年の崇拜の的となつた。所謂汪精衛系はこの時から漸を追ふて形成されるに至つたのである。然るに當時武漢に於いては漸次共産黨對國民黨左派との關係に疎隔を來しつゝあつた。このことは革命工作の進展と共に社會民主々義對純共産主義との間に於いて理論上の對立を來さなければならぬ必然の經過から生じた現象であつて、武漢側に於いては非共産黨系の左派人物中徐謙を除き、陳公博、顧孟餘、王法勤等が共産黨の壓迫を感じ出したのと、蔣介石系との合流も亦到底不能であつた關係上、期せずして汪精衛の傘下に集り、當然こゝに一つの派系が成立するに至つた。尚ほ且つ南京、武漢の合性以後、汪精衛、顧孟餘、陳公博、王法勤等は一層その政治的立場を共通ならしむるに至つた結果益々團結の度を強め、勢ひこれらの左派は武漢の失敗以後、廣州に走つた。

奥方委員と改組派　時偶ま共産黨の暴動があり、ために汪、顧、陳、王等は失敗を重ねて廣東を離れざるを得なかつたが、當時廣州に集中した左派委員を所謂奥方委員派と呼んだのである。謂ふまでもなく汪精衛系の別稱である。その後陳公博、顧孟餘等は上海に至り、陳公博は雜誌「革命評論」を發行し、顧孟餘は雜誌「前途」を創刊した。汪精衛も亦別に代表者を出してこれらに貢献するところあり、その主張と主義の鼓吹に努めた。これらの左派が集團の上改

組派と稱する組織の形成されたのは當時のことであつた。但しこの時の改組派は實質上純粋の國民黨組織ではなく、その構成分子のなかには國民黨々籍の共産黨投機分子をも包含してゐた。施存統、劉侃元、馬濬、德珩等何れも當時の改組派の幹部として混入してゐた等それである。

改組派の分裂と改造　民國十七年の冬改組派は上海に於いて第一次全國代表大會を擧行した。同時にこの會議でその分裂を宣告し、國民黨々籍を有しない共産黨投機分子――施存統等――を改組派からこれを驅逐した。而して改組派を純粋な國民黨左派の集團となしたのである。ときに汪精衛は佛國に滯在中であつたと共に改組派に對しては單に名義上の領袖に過ぎなかつた。自然實際の指導權は陳公博、王樂平等の掌中にあつた。改組派は固より汪精衛系の一部分であつたと雖も完全に汪精衛系の全體を代表したものではなかつた。所謂汪精衛系のなかには改組派に屬しないものが居つた。顧孟餘等がその例である。

擴大會議と汪精衛系　汪精衛系が具體的に形成するに至つたのは民國十七年からであつた。蓋し民國十七、十八の兩年は汪精衛系に取つて顚沛流離の時期であつた。張發奎等が幾度か失敗し、唐生智、馮玉祥も亦失脚するに至り、汪精衛自身は依然佛國に於いて流浪生活を送つてゐた。民國十九年には閻錫山、馮玉祥が北方に於いて發動したゝめ、汪精衛も亦黨內に於ける地位と聲望上當然これに參加し、海外から歸國しつゝ北平に赴き、直ちに擴大會議を成立せしめた。斯くて北方の黨權は一時汪精衛の掌中に歸し、汪精衛系はこゝに於いて得意滿面たるものがあつた。然るにその威勢も亦久しからずして閻錫山、馮玉祥らの軍事的失敗と共に消滅し、擴大會議の流產に伴ひ、汪精衛はまた海外に亡命した。延ひてその一派も亦四散せざるを得なかつた。

非常會議と汪精衛系　民國二十年陳濟棠等が廣州で獨立の旗を翻へした際、汪精衛も亦、廣西省出身の故と、蔣介石に對する反對の立場を同じくする關係上、廣州に赴きその運動に參加しつゝ、黨務を主持し非常會議を成立せしめた。然しながら非常會議時代の汪精衛及びその派系の權勢は擴大會議時代に較べて少なからざる差異を示してゐた。卽ち擴大會議時代には軍政の大權が閻錫山、馮玉祥等の掌中にあつたと雖も黨權は全く汪精衛の手中に握つてゐたのに反し、非常會議に於ける汪精衛及びその一派の地位は單なる伴食に過ぎなかつたからである。

滿洲事變後の汪精衛系　汪精衛系の形成は非常會議の際から終熄した。卽ち汪精衛系は從來中央派反對の地位に終始し、南京政權に對する攻勢に餘力を遺さなかつたのであつたが、民國二十年滿洲事變の發生後、所謂國難時期に於ける全國の團結一致と稱する名分上、蔣介石、汪精

衛の兩系が遂に合作するに至つたからである。斯くて汪精衛自身が南京政權の行政院長に就任したのと共に、汪精衛系の驍將陳公博、顧孟餘、褚民誼、曾仲鳴等は何れも南京政權の構成分子となつた。

×　×　×

以上の經緯に從ひつゝ蔣介石系と合作するに至つた汪精衛及びその一派は、爾來時に應じては中央派と離反し、或はまたこれと合作し乍ら現在に及んだと雖も、從來國民黨左派として主張した理論からは全く轉向して了つたのである。

而かも最近の汪精衛は南京政權から離脱（全然反對派として立つてゐるのではない）し、その一派の人々も亦何れも政府各部から辭職しつゝ野に下つたが、憲政開始期を前に不氣味な程鳴りを靜めてゐる。

×　×　×

汪精衛派の形成とその發展の概要は以上によつてほゞこれを明らかにし得たのであるが、前に一寸觸れておいた通り、汪精衛系には舊改組派と、汪精衛の直系とがあり、これを大體次の如く區分して好いだらう。

（一）廣東系――陳公博を主とする一派
（二）非廣東系――顧孟餘等の一派
（三）荷包派――汪精衛夫人の指揮する一派
（四）その他――谷正綱等の一派

（A）廣東系分子

汪精衛のうちの廣東系を代表するものは陳公博であり、この派に屬する分子も亦少くないが、何れも餘りに得意ではない。この點に至つては陳公博も同樣である。

×　×　×

陳公博　廣東省南海縣の產、十六歲の時興中會に入り、その父に追隨して革命運動に從ひ、長ずるに及んで北京大學に入學し哲學を修め、のち米國に留學の上紐育大學に學んで同校卒業後歸國するや、民國十四年七月國民政府の廣州に成立すると共に廣東省政府農工廳長に任ぜられ十五年一月國民黨第二期中央執行委員に當選した。次いで廣東大學教授に就任したが、革命軍の北伐出師に際しては總司令部政治訓練部長に任ぜられ、同年九月湖北の平定に伴ひ、湖北財

政委員會主席、湖北交渉員及び江漢關監督等に就任した。斯くて民國十六年三月第二次三中全會が武漢で開會されるに及び、中央黨部常務委員兼工人部長に擧げられ、十六年八月武漢、南京の妥協につれて、蔣介石の下野するや、干右任、汪精衛、顧孟餘等と南京に赴き第四次中央執行委員會全體會議を開かんとして失敗し、下野を通電の上廣東に至り、十一月十七日第二方面軍張發奎軍と共に、廣西系の黃紹雄軍を驅逐しつゝ、遂に廣東省政府主席に選出されたが、十二月共産黨事件の發生により、その責任者として汪精衛、陳樹人等と共に本兼職を免ぜられ香港に亡命した。從つて十七年二月南京で開かれた四中全會に出席することを得ず、同年五月上海で雜誌「革命評論」を主宰し乍ら反蔣運動を續け、同時に國民黨の改組を主張し、又改組同志會を組織するに至つた。所謂改組派とはこれを指すのである。十七年九月革命評論も亦發行を停止されたゝめ、十八年の春顧孟餘、潘雲超等と「民心週報」を發刊して、民國十三年の國民黨改組當時のイデオロギーを鼓吹し、農工及び小市民を以て、國民黨の基礎となすべき意見を主張し乍ら、國民黨左派として鬪ひ、汪精衛等と共に第三次全國代表大會に猛烈な反對を行つた等、南京の三全大會でその黨籍を削除された。斯くて民國十九年閻錫山、馮玉祥等の反蔣運動に汪は精衛等と連袂して北平に赴き、擴大會議で組織部委員に選ばれたが失敗し、民國二十年廣東南京兩政府の合作するに及び、第四期中央執行委員に當選後、同年末國民政府の改組により國民政府實業部長に就任、二十一年一時鐵道部長兼任を命ぜられ、程なく兼任を解かれたと共に最近汪精衛の遭難に伴ふ南京政府の離脱と共に辭任、現在では國民黨第五期中央執行委員に擧げられてゐる。

(B) 非廣東系分子

汪精衛系のうち非廣東系に屬するものは顧孟餘を主とする一派である。但しこの派は汪精衛夫人陳璧君との間に於いて兎角意見の一致と、感情の融和を缺き自然汪精衛とも多少疎隔を來すに至つたことを免れない。

× × ×

顧孟餘　湖北省宛平縣の產、獨逸に留學して伯林大學に入り經濟學を專攻の上卒業歸國後、民國十一年國立北京大學の教授となり、次いで同校教務長に任ぜられた。十五年國民黨第二期中央執行委員に選ばれ、十六年武漢に於いて國民黨中央執行委員會常務委員、中央黨部宣傳部長、政治委員會委員、國民政府委員、軍事委員會委員等に擧げられつゝ、爾來國民黨左派の領袖と

して武漢を中心に活躍し、同年武漢政府教育部長に就任した。その後武漢南京の合作に伴ひ、中央黨部宣傳部委員、武漢政治分會常務委員等となり、次いで廣東に去つて廣東政治分會委員に推されたが、廣東共産黨事件の發生と共に下野して香港に赴き、さらに外遊したと雖も、二十年廣東南京兩政府の合作成立に當り國民黨第五期中央執行委員兼執行委員會常務委員に當選、二十一年汪精衛の南京政權入りに隨伴し乍ら、國民政府鐵道部長に任ぜられ、二十四年汪精衛派の失脚につれて辭職、現に國民黨第五期中央執行委員に擧げられてゐる。

(C) 荷包派の分子

この一派は汪精衛夫人陳璧君の指揮するグループで、曾仲鳴、林伯生、陳耀祖などをその構成分子をなしてゐる。陳耀祖は陳璧君の實弟で、陳璧君の外間に於ける評判が面白くないだけ、この一派は汪精衛派の癌とされ、民國二十四年十二月の五中全會に於ける汪精衛の狙撃事件の裏面にはこの一派との關係がわだかまつてゐると謂はれ、當時の世評は「汪精衛は荷包派のおかげで衞生彈三個のお見舞を受けた」とすら稱した程であつた。

× × ×

陳璧君　廣東省番禺縣の産、民國十五年國民黨第二期中央監察委員に選ばれて以來、十六年の武漢、南京の合體後は中央黨部婦女部委員に擧げられ、同年汪精衛が廣東共産黨事件の責任者として下野外遊するや、共に佛國に赴いた。十八年汪精衛と同伴歸國の上反蔣介石運動に從ひ、汪精衛と行動を共にしつゝ、二十年國民黨第四期中央監察委員に當選して以後、二十四年には國民黨第五期中央候補監察委員に選擧された。

× × ×

曾仲鳴　福建省閩候縣の産、佛國巴里大學及び里昂大學卒業の文學博士で、民國十一年里昂中法大學の祕書長となり、十三年歸國して國立廣東大學教授に任ぜられ、十四年廣東國民政府に入り、國民政府祕書、政治委員會主任祕書等に歷任し、次いで汪精衛に隨身し乍ら汪精衛と共に赴佛したが、十八年その歸國に隨伴して香港に歸り、南華日報の編輯に携はつた。その後十九年汪精衛の祕書長として北平に入り中央黨部擴大會議及び反蔣政府に參與し、その失敗後二十年廣東國民政府にも參加した上、政府祕書となり、同年南京、廣東の合作成立するや、國民黨第四期中央候補執行委員、中央政治會議祕書長に擧げられ、二十一年國民政府鐵道部長政務次長、行政院祕書長に就任し、次いで汪精衛、蔣介石の合作政權成るに及んで鐵道部常務次長

に任ぜられ、最近まで現職にゐたが、二十四年末汪精衛の辭職とその一派の南京政權離脱と共に辭任し、現に國民黨第五期中央候補執行委員に擧げられてゐる。

（D）その他の分子

汪精衛派のうちには前記の廣東系、非廣東系、荷包派の何れにも屬せざる分子が相當に多い。現在の國民黨中央委員のなかでは谷正綱、陳樹人、褚民誼、郭泰祺、彭學沛、潘雲超等がそれである。

×　×　×

陳樹人　廣東省番禺縣の產、日本に留學して京都美術學校、京都帝國大學文科に入り、又山本春擧畫伯について日本畫をも學んだ美術家である。その後一時東京華僑學校に教鞭を執つたが民國十二年歸國の上廣東政廳長となり、次いで廣東政府內政部總務廳長、華僑廳長、廣東代理省長、國民黨政治會議廣州分會委員等に歷任したが、十六年李濟深等の共產黨驅逐運動の結果民政廳長を辭し、同年秋國民黨組織部委員に就任したと雖も、幾何もなく廣東に歸り、廣東省政府委員兼建設廳長に擧げられ、十六年廣東に於ける共產黨事件の責任者として汪精衛、陳公博等と共に下野香港に亡命ののち、專ら繪畫の研究に沒頭してゐたところ、十九年閻錫山等の反蔣運動起るや、汪精衛に從つて北上し、これに參與したと雖もその失敗の後、二十年廣東國民政府の成立に伴ひ、廣東に歸來の上、獨立政府政務委員會委員、國民黨第四期中央執行委員に擧げられ、同年末廣州、南京の合作により國民政府の改組實現するに及び、南京に赴き、二十一年國民政府僑務委員會委員長に擧げられ、二十四年末國民黨第五期中央候補執行委員に當選、近來汪精衛の南京政權離脱と同時に南京を去つた。

×　×　×

褚民誼　浙江省吳興縣の產、前清末日本に留學して日本大學に入り、次いで佛國に赴いた。夙に中國同盟會に加盟し、佛國に於いては蔡元培、吳稚暉、李石曾等と革命思想の宣揚に努めつつ本國の革命運動を援助した。民國三年歐洲大戰の勃發直後歸國して依然革命運動に携はつたが、再び渡佛して「ストラスブルグ」大學に於いて醫學及び藥學を修め、十年里昂中法大學の創設に參與し同校の副校長となり、更に校長代理に推されたのち歸國し、十五年國民黨第二期中央候補執行委員に擧げられ、次いで北伐軍に從ひ、總司令部軍醫處長に任ぜられた。斯くて十六年辭任後、上海中法工學院長に就任し、十七年公共衛生事務視察のため歐洲に赴き、歸國

するや國民政府に入つて保健事務を主宰し、十八年國民黨第三期中央候補執行委員に當選、二十年第四期中央候補執行委員に再選され、汪精衛の行政院長となるに及んで行政院祕書長に任ぜられたが二十四年末汪精衛の辭職と共に辭任、現在國民黨第五期中央監察委員に擧げられてゐる。

×　×　×

郭泰祺　湖北省廣濟縣の產、米國ペンシルバニヤ大學の卒業生、民國元年第一次革命當時歸國し、黎元洪の祕書となり、五年黎元洪の大總統となるに及んで大總統府英文祕書長兼外交部參事に任ぜられた。六年黎元洪が非常國會の解散を行はんとするや、これに反對して辭職し、次いで張勳の復辟後廣東に赴き、孫文の護法政府に參加した。七年廣東政府の命を承けて王正廷陳友仁等と共に渡米し、一八年巴里平和會議に支那代表部專門委員となり、九年廣東で唐紹儀の祕書に選ばれ、十年廣東非常大總統府參事兼宣傳部長に擧げられ、十一年政務廳長に、十二年には外交部次長に就任した。次いで廣東交涉員に任ぜられたが孫文の死後湖北に歸つて武昌商科大學校長につき、十五年革命軍の北伐開始と共に再び外交部祕書となり、十六年蕪湖交涉員及び江蘇交涉員、中央執行委員會宣傳部駐滬辦事處國際科主任等を經て、外交部次長兼江蘇特派交涉員に擧げられた。斯くて十七年伍朝樞の辭職後一時外交部長を代理したが、同年黃郛の外交部長に就任するや本兼職を辭し、駐伊公使に任ぜられた。然るに同國には赴任せず汪精衛に隨從し乍ら反蔣運動に携はり、十九年天津方面に活躍の上、二十年廣東獨立政府の樹立するに及び政務委員會委員となり、二十一年廣東南京の合作後、國民政府外交部政務次長に就任同年上海事變の直後上海日支停戰會議首席代表として停戰交涉に當つたが、政府の外交政策に反對した學生の暴行を受けて負傷し、停戰協定の調印後辭任、そのゝち汪、蔣合作政權の成立につれて駐英公使に任ぜられつゝ今日に及び、現に國民黨第五期中央候補監察委員に選出されてゐる。

×　×　×

彭學沛　江西省安福縣の產、佛國留學生出身。歸國後國立北京大學政治學教授、上海中央日報主筆等に歷任し、民國二十一年馮玉祥の下に內政部政務次長となり、同年四月馮玉祥の辭職するや、一時部務を代理したが、その後汪、蔣の合作政權成立と共に、益々汪精衛系としての色彩を加へ、汪精衛の行政院長時代には、行政院政務處長に任ぜられたと雖も現在では辭職し、全國經濟委員會委員及び國民黨第五期中央執行委員に擧げられてゐる。

×　×　×

潘雲超　民國十六年湖北特別委員會となり、更に同年武漢政治分會委員に任ぜられ、次いで國民政府監察院監察委員に擧げられたが、以來官界の表面に立たず、現に國民黨第五期中央候補監察委員に選ばれてゐる。

第二節　太　子　派

太子派はこれを嚴密に分析すれば廣東系に屬する一支流である。從つて主流たる廣東系が西南派の構成分子として中央政權と對峙的關係にあつたゞけ、その支流としての太子派も亦、中央派に對しては一つの對立的勢力を形成してゐたこと謂ふまでもない。

然るに太子派は廣東系の一支流とは謂へ、既に獨立の一派を形成してゐたのと、一種のイデオロギーをもつてゐただけに、絶へず獨自の立場から行動し、現在では蔣介石獨裁政權に合流し乍ら、立法院を根城として、院長孫科の下に所謂立法院系と稱する一勢力をすら築きつゝあることは周知の通りである。

×　×　×

この派の全盛時代は滿洲事變の勃發後、南京、廣東の和平會議が上海で開かれ、蔣介石の下野を條件として南北合體政府の樹立を見たとき、卽ち事實上南京政權の實權が孫科一派の手に握られた當時であつた。

ときに孫科自らは行政院長に就任して責任內閣を組織し、外交部長に陳友仁を、財政部長に黃漢梁を据へたのであつたが、間もなく上海銀行資本家系のボイコット（この時既に中央派財政系の基礎が着々鞏固な發展段階にあつたゝめ、上海銀行資本家系のボイコットは中央派財政系の反政府工作であつた）と、それに因する財政破綻に遭遇して瓦解するに至つたのみならず、その勢力範圍にあつた廣東海軍及び空軍の兩軍が陳濟棠に奪はれた結果、跪くも失脚したのであつた。

但し形勢不利と見た孫科及びその一派は、後繼內閣たる汪精衛、蔣介石の合作政權に對して、「救國綱領」を叩きつけ乍ら、民衆の人氣を集め、また文化運動で智識階級に呼びかけ、各種の雜誌・刊行物を買收しつゝこれらを利用して（一時上海の新聞雜誌で孫科の息のかゝらぬものがないとまで謂はれた）、太子派一派支持の輿論を製造し、遂に孫科をして汪・蔣合作政權に割込ましめ立法院院長に就任させることを得たと共に、爾來、汪、蔣の對立を狙ひ、この間にその勢力增大のため腐心しつゝ現在に及んだのであつた。

× × ×

所謂太子派はその形成の歴史が比較的古いのと、孫科自身の經歴とにより、國民黨内に於いては相當の勢力を獲得しなければならぬ筈であるにも拘らず、依然廣東系の支流たるに過ぎないかの如き狀態を呈しつゝあるのは、さきに略述したこの派系の階級的跪弱性による所以であると共に、孫科が餘りに機會主義者の域を脱しない上、この一派に確固たるイデオロギーをもたない等等の結果とされてゐる。

× × ×

孫科　廣東省中山縣の産　孫文先夫人の嫡子。布哇ホノルルに於いて中等教育を受け、次いで米國カルフォルニヤ大學及びコロンビア大學を卒業し、民國六年歸國後、孫文に從つて廣東軍政府組織に奔走し、七年廣東非常國會の祕書に任ぜられ、爾來西南政界に活躍する傍ら、廣東タイムスその他の新聞記者ともなつた。十年廣東市長兼廣東治河處督辦に就任、十一年陳炯明の背叛によつて上海に逃れたが、十二年また廣東市長に復任した。十三年孫文に從つて北上したと雖も、十四年孫文の客死後廣東に歸り、そののちは所謂太子派の領袖として左派に對抗し、十四年國民政府委員に任ぜられ、同年共産黨系に追はれて一時は上海に去つたが幾何もなくして廣東に歸り、十五年國民黨第二期中央執行委員に擧げられ、國民政府委員及び廣東省政府委員兼建設廳長に就任、同年さらに國民政府交通部長に任ぜられた。斯くて國民政府の武漢移轉と共に武漢に入り、湖北省政府委員を兼ね、十六年國民黨中央執行委員會常務委員、中央執行委員會青年部長に選ばれた。武漢、南京の合體後は中央特別委員會委員、國民政府委員、同軍事委員會委員に選任され、次いで財政部長となつた。同年伍朝樞、許崇智等と南京、武漢の軋轢融和に努めたが失敗に終り、十七年財政部長を辭し、建設部長に任ぜられたと雖も就任せず、胡漢民、伍朝樞等と共に歐米の經濟事情視察のためと稱して外遊し、濟南事件後國民政府米國駐在代表としてワシントンに赴き同年歸國し、國民政府考試院副院長兼鐵道部長に任ぜられた。然るに蔣介石殊に宋子文と合はず、胡漢民に接近し、二十年胡漢民の監禁事件起るや、古應芬鄧澤如等の胡漢民派と結んで、改組派、西山會議派その他の反蔣各派と共に廣東に新たに國民政府を樹立して、國民政府常務委員、同財政委員會常務委員、國民黨中央執行委員、非常會議常務委員、同組織委員會委員等となり、同年蔣介石の國民政府引退を條件として南京と妥協するに及び、統一政府組織の上自ら行政院長に擧げられ、南京の政權を掌握し國民黨第四期中央執行委員會常務委員に任ぜられた。然るに合作を期待した胡漢民、汪精衛も共に出動せず、加

ふるに蔣介石派の反對工作により遂に投げ出しを餘儀なくされ、二十一年蔣、汪の合作成るに及んで行政院長を辭して上海に去つたが、その後立法院に任ぜられ現在に及び、同時に國民黨第五期中央執行委員、國民政府委員に擧げられてゐる。

× × ×

太子派は孫科が以上の如き政治的經過を辿りつゝある間に形成されたもので、その間少なからぬ消長、盛衰を繰り返へしたが、その形成の過程に對し「社會新聞」(第一卷第二十五期)「三中全會前に於ける國民黨各派系の史的分析」では大要次の如く叙述してゐる。

× × ×

太子派の歴史的發展　孫科が總理の嫡子として黨内に於ける勢力の雄厚たるを失はなかつた關係上、これを利用しようとする政客が絶へず、自然そこに太子派なるものが形成されるに至つた。從つて黄惠龍等が當時の太子派の中堅分子であつた。而かも孫科が少なからぬ私財を擁してゐただけ、この派に附和雷同するものすら多く、勢ひ太子派の發展に可成りの拍車を加へた。

第一次大會當時の太子派　國民黨第一次全國代表大會當時に於ける孫科は孫文から指定された國民黨中央執行委員中の一人であつた(その時の中央委員は執行委員が僅かに二十四名で外に候補執行委員十七名、監察委員五名と合計四十六名であつた)。而してその選出された中央委員中太子派と直接又は間接的に關係を有してゐたものは、賈振、石青陽(以上執行委員)、茅祖權傅汝霖(以上候補執行委員)、鄧澤如(監督委員)等々であり、恰も「門前大樹好適陰」をなしてゐた。勢ひ各方面から一種の反感をさへ以て迎へられつゝあつたと雖も、その發展には何等の障碍をも及ぼさなかつた。自然孫科が中央委員に指定されたほか、廣州市黨部をもその勢力範圍のなかに收めつゝあつた所以である。もとより當時の國民黨の權力は僅かに廣州の一偶にしか及ばなかつただけに、市黨部の地位は低かつたとは謂へ、蓋し黨内に於いては重要な構成分子たるを失はなかつた。

孫文死後の太子派　太子派の發展は孫科の勢力と比例してゐたとは謂へ、大部分は孫文の光が手傳つてゐた。自然民國十四年の孫文の死は、太子派の發展にとつて大きな打擊たるを免れなかつた。民國十四年國民政府成立の當初孫科は廣東省政府及び廣州市黨部の中にその椅子を割當てられたのみに過ぎなかつた。それは單に廣東に於ける鼎の三足(蔣介石、汪精衛、廖仲愷)に及ばなかつたのみでなく、古應芬(廣東省政府主席)にすらも一籌を輸してゐた。蓋し太子派凋落の段階に踏み込んだのであつた。

大規模の補強工作　孫文の死が太子派の將來に對して莫大な打擊を與へたと雖も、他の一面からこれを見るとき、それはまた太子派をして發奮せしむる唯一の動機でもあつた。その結果は孫科をして勢力挽回への努力を怠らしめなかつた。當時胡漢民系も亦その勢力擴張に懸命となつてゐたが、太子派の補強工作は著しく積極的で大體に於いて次のプログラムに從つた。(一)黨の方面では當時廣州中樞に於いて共產黨がこれを把持して居つたと雖も、太子派自身がこれに轉向することの困難な環境にあつたゝめ、別にその出路を求めなければならなかつたのに鑑み新らしい局面を創造すべく、民國十四年の冬、西山會議の開かれた際には、具體的にその意志を表示しなかつたが孫科から中央黨部の經費を支出した。(二)外交方面に於いては伍朝樞をして香港で一億萬元の大借款計畫を進行せしめ香港の罷工停止及び或る種の條件を交換條件とし、別の方面では倫敦及び香港から財政以外の或る種の援助を受くべく運動せしめた。(三)軍事の方面に於ける相當の計劃——等々。

補強工作の慘敗　孫科を主とする太子派の積極的補強工作は、孫科等の寢食を忘れての努力に拘らず完全に失敗した。黨務の方面では西山會議が失敗し、上海の第二次大會も亦その結果がなく、上海環龍路四十四號の中央黨部すら消滅し、廣州中樞の太子派に對する空氣が益々險惡化して行つた。と共に外交方面に於ける一億元の大借款はほゞ成功したが調印する段取りになつて祕密漏洩のため、伍朝樞が廣州當局に監禁されてこれ亦失敗に終り、軍事方面の陰謀さへも亦廣州軍事當局に感知されて瓦解するに至つた。

孫科の新方面への轉換　以上の如き經緯により窮境に陷つた孫科は、遂に思ひ切つた局面打開策を演ずるに至つた。即ち元來凡傭ではないのと、持ち前の機會主義とによつて、巧みに方向轉換を試みつゝ、共產黨系に接近し出したことがそれであつた。この企は奏功して、武漢方面に於ける太子派は漸次その勢力を挽回するに至つた。武漢、南京の分裂以前孫科は直に武漢に赴き、第二期三中全會で盛んに活躍した。從つて武漢政府成立の當初、孫科は黨部の方面では中央常務委員兼青年部長に擧げられ、政府では國民政府委員兼交通部部長に任ぜられた。

國民黨再造の主張　然しながら武漢政府時代に於ける孫科は共產黨系に接近したとは謂へ、完全に共產黨に同化したのではなかつた。自然汪精衛の領導する左派に比しても亦その趣を異にしてゐたのは謂ふまでもない。自ら一系を形成しつゝ自身の系統を中心とする小組織の强化に對して著しく努力し、特に共產黨の組織力に鑑み、組織の點に重きを置いた。武漢政府の失敗後孫科は南京に赴いたが、この時孫科は國民黨再造を主張し、旬刊雜誌「再造」を發刊（民國

十六年の冬創刊）の上、その主張を鼓吹した。太子派を別に「再造派」と謂ふのはこゝから來たのである。

孫科の南下と太子派　その後孫科の南京に於ける工作が三、四年の久しきに及んだ。鐵道部長の地位は決して高いといふことを得ないが、その經濟的に惠まれてゐる點に於いては、頗る優勢な地位にあつた。勢ひこの時期に於ける太子派は可成の發展を示現した。然るに民國二十年胡漢民事件に伴ふ廣東系の反蔣運動が具體化するや、孫科は突如南京を離脱しその一黨を率ゐて廣東に至り、非常會議に參加した。もと〳〵非常會議は擴大會議の際に於ける反蔣各派の勇將を網羅してゐた。孫科も亦固よりそのなかの一流分子たるを失はなかつた。とくに孫科系は廣東に於いて尙ほ海軍及び空軍をその統轄の下に收めてゐた上、數年に亘る鐵道部長時代に蓄積した巨額の現ナマを擁してゐたに於いてをや。この點に至つては汪精衛系が兵力を有せず、空手空拳で馳せ參じたのとは、大いにその趣を異にしてゐた。自然非常會議中の太子派の他位は遙かに汪精衛系を凌いでゐた。

統一政府と太子派　九・一八事變の發生後は廣東、南京兩政府の合作と、蔣介石の下野とにより、孫科が行政院長となつて、責任內閣を組織し、陳友仁が外交部長となり、黃漢梁が財政部長に任ぜられた。陳友仁と黃漢梁とは太子派の嫡流であつた。從つて當時の太子派は全盛時代を示現したのであつたが、財政上の破綻によつて支へられず、孫科の辭職に次いで、陳友仁、黃漢梁も亦同時に下野した。斯くて廣東の海、空軍は陳濟棠の手に收容された。

その後の太子派　然るに孫科は比較的反撥力に富む人物であつた。失意に際しても亦決して捲土重來の氣魄を失はなかつた。勢ひ後繼內閣たりし汪、蔣の合作政權に對し「救國綱領」を叩きつけるだけの智慧と勇氣とを持つてゐた。それによつて民衆の同情を喚起し、同時に文化運動に從ひつゝ、その環境を有利に展開せしめた。ために爾後蔣介石政權に合流しつゝ、その一黨を率ゐて立法院に納つてゐること周知の通りである。

×　×　×

斯くの如くにして太子派は近來立法院を牙城として、幾分その勢力を增大するに至つたものゝ如くであるが、唯その一派中に所謂人才が乏しい點に大きな缺點をもつてゐる。それかあらぬか一般社會からは「太子派に二流以上の人才なし」とすら批評されてゐるのである。而かもその一派のなかには米國歸りのモダーンボーイが多く、ダンスこそ上手であるが、その識見、貫祿に至つては殆ど論ずるに足りない。

この代表的なものを梁寒操となし、就中この一派は最近徒らに中央派の鼻息を窺ふことに汲々としてゐるものゝやうである。

その他馬超俊、劉維熾の兩人は太子派中での二流であるが、これ又中央派に接近せんとする傾向なしとせない。

兎まれ現在太子派中に於ける中央委員は以上のほか王漱芳、傅秉常、王崑倫、吳經等の數名を數へられてゐる。

×　×　×

梁寒操　廣東省高要縣の產、廣島高等師範學校の卒業生、民國十六年國民政府財政部參事に任ぜられ、十七年孫科の鐵道部長時代に、同部の簡任祕書となり、十八年鐵道部參事を經て總務司長に昇進、二十年再び鐵道部參事に就任したが、同年廣東派の獨立に際して孫科と共に南下しつゝこれに參加し、廣東中央執監委員、非常會議祕書長に擧げられると雖も、その後南京、廣東兩政府の合作後も亦孫科と行動を共にし、爾後孫科の立法院長に就任すると同時に同院祕書に任ぜられ現在に及んでゐる。同時に二十四年末國民黨第五期中央執行委員にも選ばれた。

×　×　×

馬超俊　廣東省臺山縣の產、香港商業、南華學校を卒業後、日本に留學し、その間中國同盟會に加入し乍ら革命運動に參加した。歸國ののち民國十二年廣東兵工廠長に任ぜられ、十二年廣州特別市黨部執行委員會委員兼工人部長となり、十六年國民政府勞工局長兼勞働兵典起草委員會常務委員に擧げられ、十七年には廣東特別市黨部指導委員兼宣傳部長に就任、次いで廣東省政府委員兼農工廳長となり、更に建設廳長に轉じた。十八年國民黨第三期中央候補執行委員に當選、同年國際勞働會議に出席の上歸國するや、國民政府立法院立法委員、中央訓練部祕書兼民衆訓練處主任等を經て、十九年國民黨中央黨部訓練部長となつたが、二十年廣東の獨立に伴ひ外遊し同年末南京、廣東兩政府の合作による國民政府の改組と共に、國民黨中共黨部民衆運動指導委員會副主任及び、海外黨務委員會副主任に擧げられ、二十一年南京市長に就任した。然るに間もなく辭任して南下、同年中央黨民衆指導委員會副主任の職をも辭し　現在國民黨第五期中央執行委員に選出されてゐる。

×　×　×

劉維熾　廣東省の產、米國留學生出身。歸國後廣東電話局長、廣州市財政局長に歷任し、民國十六年國民政府財政部鹽務署長に任ぜられ、十七年鹽務稽核所長に昇進した。越へて十八年孫科

の鐵道部長時代に鐵道部參事兼平漢鐵路管理局長に就任。同年末鐵道部業務司長となつたが、十九年辭任して、さらに孫科と行動を共にし、現在國民黨第五期中央執行委員に選ばれてゐる。

× × ×

王漱芳　王伯群の系統で、王伯群と共に太子派に屬してゐるもの、貴州雀磐縣の產、國立東南大學及び黃埔陸軍軍官學校の卒業生（第一期）民國十五年以來、國民革命軍第一軍司令部祕書長となり、次いで國民黨漢口市黨部整理委員、浙江省黨部黨務指導委員等に歷任し、十七年國民政府交通部簡任祕書に擧げられた等の經歷を有してをり、現に國民黨第五期中央執行委員に選出されてゐる。

× × ×

傅秉常　伍朝樞と親戚關係にあり、自然伍朝樞を通じて太子派に屬した。廣東省南海縣の產、香港大學卒業後、民國八年巴里平和會議支那代表參贊に任ぜられ、十一年廣東省政府交涉員兼廣東海關監督となり、十六年國民政府外交部祕書及び外交部次長に任ぜられ、同年伍朝樞とゝもに米國に赴き、十七年歸國して國民政府外交委員會委員並びに立法院立法委員に就任、十八年駐日公使に任ぜられたが赴任せず、二十年末南京、廣東兩政府の妥協後統一政府の樹立に際し陳友仁の下に外交部常務次長となつたが孫科內閣の瓦解と共に辭任し、次いで孫科の立法院長となるに及び立法院外交委員會委員長に任命され、同時に國民黨第五期中央執行委員に擧げられてゐる。

× × ×

王崑倫　現國民黨第五期候補執行委員。

× × ×

吳經熊　浙江省鄞縣の產。民國九年上海東吳大學法學院卒業後、米國に留學し、十年ミシガン大學から法學博士の學位を授けられ、次いで佛國巴里大學、獨逸伯林大學、米國ハーバート大學に學び、十三年歸國して上海東吳大學法學院教授となり、十六年同院長に任ぜられ、同年上海共同租界臨時法院民刑事判事に任ぜられ、十七年國民政府司法部編訂法典審查委員に推され同年上海共同租界臨時法院刑事部長に就任、十八年臨時法院院長代理となり十九年上海東吳大學法學院院長、上海共同租界工部局顧問に擧げられ、現に國民黨第五期中央候補執行委員に選出されてゐる。

第五章　舊馮玉祥系及び山西派の形成とその構成分子

馮玉祥系及び閻錫山を中心とする山西派の過去に於ける地位は、舊軍閥としての存立と何んの異るところもなかつた。

そも〳〵舊軍閥は封建制度の上に建立された上層建築であつたゞけ、自然馮玉祥系及び山西派の存在と、その客觀性には、夥しく封建的殘滓の膠着してゐる事實を否定し得ないのであつた。

然し乍らこの二派系は他の軍閥に比して稍やその素質を異にしてゐる上、多少のイデオロギーを持つてゐたのと、稍や進步的であつた關係上、逸早く國民黨に加盟しつゝ、民主々義革命戰に參加したゝめ、軍閥の形態から脫することを得たのであつたが、前述の如くその存在とその客觀性に夥しい封建的殘滓を包含してゐた結果、必然的に中央統治權力（中央統治權力はその統治權の擴大强化を圖るべく中央集權の達成に向つて努力するのを常態となした）と對立せざるを得なかつた。

×　　×　　×

國民革命軍の北伐完成に基く封建勢力の掃蕩は、頗る不徹底であつた上、舊軍閥の封建殘滓をまで一掃して了ふことの不可能（このことは國民革命と稱した民族資產階級の民主々義革命が國際的關係乃至國內關係に基く、あらゆる障礙のために――それは半植民地支那の社會的經濟的機構の齎らす必至的動向であつたが――遂に達成出來なかつたからである）であつた。當然の趨勢として、國內各地に依然舊軍閥とその質を同じくする封建性殘滓の割據と、存在とを許し、それらの勢力が必然的に中央權力と對峙するに至つたのは、當時に於ける支那の局勢の客觀的姿相であつた。

從つて各地に割據してゐた地方的勢力には廣西系があり、廣東系があり、四川軍閥があり、貴州軍閥があり、山西系があり、西北軍系があつたと雖も、就中西北軍系（馮玉祥派）と、山西派と、廣西系とは、その封建性殘滓の頗る濃厚なる點に於いて群を拔いてゐた（謂ふまでもなく、四川や、貴州その他の邊陲各省には尙ほ純然たる軍閥割據の局勢を展開しつゝあつたが、これを別問題として）。

×　×　×

勢ひこれらの地方的勢力對中央統治勢力との確執は、爾來ことある毎に表面化するに至つた。中央統治權力の地方的勢力に對する壓迫が征服にまで延長するに至り、これに對する地方的勢力の反噬が表面化せねば熄まなかつたからである。

そして、斯うした中央の征服により最も早くその崩壞作用を開始し出したのは馮玉祥系であつた。閻錫山を中心とする山西派も亦同樣さうした運命の下におかれてゐたが、馮玉祥系に比してその崩壞作用進展の程度が、著しく緩漫たるを失はなかつた。

それは閻錫山中心の山西派は、その根據地たる山西省が地域的に惠まれてゐたのと、山西省を中心とする閻錫山及びその一派の所謂地盤なるものが、餘りに鞏固であつたからである。

この點に於いては廣西系、その他四川、貴州の兩軍閥などとほゞ同樣の趣をなしてゐた。

×　×　×

斯かる經緯は、中央統治權力に對する抗爭のため、各地方、勢力を——馮玉祥系をも、山西派をも、廣西系をも——常に相互的に或る程度までの連絡または一種の聯盟を結ばしむるに至り、自然これらの地方勢力的中央との抗爭が大規模の內國戰にまで擴大しつゝ、この種の軍閥戰を繰返へさせた事實は近年の歷史に明らかである。

×　×　×

前述の如く馮玉祥及びその一派には、山西系や、廣西系のやうな根强い地盤——根據地——をもたなかつたゝめ、中央權力の征服には跪くも崩れねばならなかつたのであつたが、馮玉祥自身は近來政界に復活することを得るに至つた。然しながら一たび崩壞した馮玉祥系は、再びその團結を形成すること不可能である。とは謂へ擴大會議の反蔣戰に失脚以來、流浪しつゝあつた馮玉祥が中央政界にその勢力を復活し得た所以のものは、その背後に依然舊西北軍系としての一派が根强く殘されてゐたからに外ならぬ。

無論一たび崩れた馮玉祥系は、西北軍華やかなりし時代のやうな團結を再び形成出來さうにもなく、爾來、或るものは中央派に投降して完全な蔣介石系化して了ひ、或るものは既に獨立的の一系を形成しつゝ、中央とは不卽不離の關係を維持してをり、この點に至つてはその崩壞時期の最も早かつたゞけに、舊西北軍に所屬してゐたものゝうち、今や全く純馮玉祥の系統と稱すべきものが一人もなく、自然馮玉祥を盟主となす、その派系は全く存在しなくなつたのである。

さりとて分散した舊西北軍が準中央派として、乃至中央派との對峙勢力として各地に存在を續けつゝある限り馮玉祥の政界に於ける地位はこれらの諸勢力を基礎として依然相當の程度までこれを確保されるであらう。

× × ×

馮玉祥系が全く分散しつゝ、既に馮玉祥系と稱する一派が解消され、その派系の構成分子が一方に於いて、既に獨立した派系をすら形成するに至つたのに反し、閻錫山を主とする山西派は依然純山西系としてその舊勢力を維持しつゝある。

最近共產軍の山西省侵入を機會として中央軍の山西省入りが實現した以來、後節に叙述するが如く、中央の軍事的勢力に蠶食せられ、閻錫山系の誇りつゝあつた山西モンロー主義すら踏みにぢられて了ひさうであると雖も、山西派の地方的勢力たるや左程簡單に分散する程の跪弱性を具有してゐないのである。

第一節　舊馮玉祥系

前述の如く馮玉祥は舊軍閥出身であつたゝけ、所謂馮玉祥系に屬するものも亦、大部分その舊部下であつた。

馮玉祥は一軍人として身を起して以來、西北軍（舊第二集團軍）を組成し乍ら、尨大なる軍事的勢力を擁するに至るまでの間に、所謂馮玉祥系なるものを形成するに至つたのであつて、その經歷が示す通り、決して凡庸の器でなく、而かもその一派も亦多士齊々であつたこと謂ふまでもない。

× × ×

馮玉祥　安徽省巢縣の產。十一歲にして母を喪ひ、幼時父に從ひつゝ軍隊生活に入つたが、その正式に隊士として入隊したのは光緒二十三年十六歲の折からであつた。二十七年「練軍」が命令によつて「准軍」に改編されたゝめ、呂本元の統轄にかゝる元字前宮に隷屬し乍ら保定に駐屯し、次いで淸道職に昇進したが、當時准軍の給與は一箇月三兩三錢であつたと謂ふ。翌二十八年改めて袁世凱の新建軍に入り、六棚正兵に補せられ、のち武衞右軍に轉じ、獨流楊柳等に駐屯した。斯くて韓家堡に移つた際三十一年武衞右軍が第六鎭に改められて南苑に移駐し、三營司務長となり、本連排長に昇進した。三十三年三營督隊に任ぜられ、宣統元年には第一混成協督隊官に就任、奉天黑山縣に駐し、更に第二鎭八十標第三營管帶として山東に赴き、その

後同志と共に武學研究會を組織の上、革命の進行に努力するところあつた。宣統三年武昌に革命の蜂起するや二十鎭統制、張紹曾が政治改革意見十九個條を清廷に要挾して容れられ、且つ張紹曾を宣撫使となしたので、王金銘、施從雲等の所屬隊及び孫文から聯絡のため派遣されてゐた白雅雨等と灤州の獨立を密謀しつゝ、王金銘を北方大都督に施從雲を總司令に推し、自ら參謀長となつたが、事洩れて失敗するに至り、捕へられ保定に押送された。勢ひ灤州の失敗後讀書靜養に耽つてゐたところ、民國元年陸建章が命を奉じて左路備補軍を編成するに及び第二路營長に任ぜられ、二年同軍が京衛軍と改稱されたゝめ左翼第一團々長兼第一營々長を兼任し、三年北京齊化門內豐備倉に駐屯した。そのゝち陸建章の陝西剿匪督軍に任ぜられたのと共にこれに隨つて陝西に入り、所屬部隊を改編し乍ら第十師第十四旅となし、旅長に就任、白狼の亂の平定後、第十六混成旅に改められその旅長に昇進し、模範連を組織の上、李鳴鐘を連長に、朱子揚、劉郁芬、蔣鴻遇を教官となした。四年四川に入つて剿匪に從ひ、五年袁世凱の死と共に黎元洪が總統を繼ぐに及び、その命を奉じて北京に還り、六年段祺瑞が國務總理として陸軍部長を兼ね、傳良佐、徐樹錚等が次長となるや、南巡防統領に任ぜられ、六年張勳の復辟に際して廊坊に歸り、舊部下を收容した。そのゝち段祺瑞が馬廠に於いて師を誓ひ討逆軍總司令に就任した際十六混成旅長に任命され、楊桂棠が總司令部參議となり、斯くて遂に張勳討伐の通電を發した上、北京に進攻したのであるが、張勳の敗退とその和蘭公使館への逃匿とにより、事定まつて廊坊に駐し、七年護法軍の湖南進攻と共に命を受けてその討伐のため出發し、湖北省武定に至つたとき通電を發して獨立を宣言した。ために段祺瑞は旅長の職を免じ同時に曹錕を派遣の上、これを査問せしめたが、六月常德を占領するや、北京政府はその功を嘉して免職處分を取消し、浙西鎭守使の兼任を發令した。そこで軍法官薛篤弼を常德知事に任じ、軍醫官鄧長耀を澧陸知事となし、教育と實業を振興し、勢ひ湖南西部は大いに治つた。翌九年湖南督軍張敬堯の失敗逃走により、命を受けて北歸しつゝ、漢口に至り孫文の派遣した徐謙、鈕永建等と會見し、十一月信陽に駐屯して、任右民を廣東に派遣の上、孫文を訪はせ、十年陝西督軍閻柏文に隨つて陝西に赴き、八月命を承けつゝ旅を改めて師となし、十一師長に就任の上石敬亭を參謀長に任じ、李鳴鐘を二十一旅長に、張之江を二十二旅長に、孫良誠、張維璽、宋哲元、劉郁芬等を團長となした。次いで北京政府から陝西督軍に擧げられ、十一年奉直戰爭の際所屬軍を率ゐて直隸軍を援け、その平定後河南督軍に轉じ、所屬部隊を擴張し乍ら、一師三混成旅となし、張之江を第七混成旅長に、李鳴鐘を第八混成旅長に、宋哲元を二十五混成旅長

に任じ、鹿鐘麟、劉郁芬を十一師の兩旅長に任命した。斯くて河南の督軍となること半箇年、清郷、興學、禁娼、禁賭、理財、修路、植樹等に力を用ひてその治績大いに擧がつた。十月末陸軍檢閲使に任ぜられて南苑に駐軍し、部隊の積極的訓練に當り、十二年直隷派が曹錕を總統となすべく、王懐慶等と共にその意を承けて黎元洪の驅逐を實行した。斯くの如くにして黎元洪の去つたのち、曹錕が所謂賄選によつて大總統に繼任したゝめ、廣東、奉天、浙江等の各省が聯結して直隷系に反對するに至つた等、その機運に乘じて吳佩孚との反目を加へ、反直隷と接近し、十三年第二次奉直戰の勃發に當り、討伐軍第三軍總司令に任命されて熱河に向け進發したが、十月胡景翼軍の北京に引返したのと共に、突如反旗を飜して北京を占領し、曹錕を幽閉して直隷系沒落の原因を作つた。このクーデター斷行を動機として孫岳、胡景翼等と國民軍を組織し、國民軍第一軍司令兼全軍總司令に任ぜられ、同年末軍を率ゐて宮城に入り、十一月黄郛を國務總理として攝政內閣を組織せしむるに至り、馬白を派遣して孫文の北上を歡迎しつつ、同時に鹿鐘麟をして、大總統令による清室優待條件を修正せしめ、宣統帝及び皇后を醇親王府に移した。このことのあつたのち張作霖と妥協し、段祺瑞に臨時執政々府を組織させ、自ら西北邊防督辦に任じ、張家口に於いて北京政府を操縱し、さらに同年甘肅軍總督辦及び西北邊防督軍を兼ね、北方一帶にその勢力を伸ばし、劉郁芬を蘭州に入らしめて甘肅督軍の職を代理させ、薛篤弼を甘肅省長となした。然るにその後奉天軍との不和が昂じ、齡松齡と結んで奉天軍を倒さんとし、直隷軍李景林と戰ひ、張之江を攻津總司令として天津を攻擊させたが、遂に失敗した等。十五年一月一日下野外遊を聲明して歐米視察專使に任ぜられ、國民軍の統制を張之江に委ねて莫斯科に赴いたと雖も、その間國民政府から國民政府委員、軍事委員會委員、國民黨代表に任ぜられたゝめ九月歸國した。時既に吳佩孚、張作霖らが敗れて、平地泉以西を退守しつゝあつた。勢ひ綏遠省五原で舊部下を糾合したのち、西北國民聯軍總司令となり、甘肅、陝西を經て、十六年河南省に入つたと共に、五月國民革命軍第二集團軍總司令に就任して北伐戰に加はり、潼關に駐軍し、鄭州を占領、開封を陷れ、武漢政府側の汪精衛、譚延闓、徐謙唐生智等と鄭州で會議を開き、隴海線以北、京漢線以東の軍は第二集團軍が、これを擔任することを決議し、六月十三日河南省政府主席となり、安徽省政府委員等に任命されたのであつた。同年武漢南京兩政府の合作後、中央特別委員會委員、軍事委員會主席、國民政府委員となり、十七年蔣介石の北伐に呼應する傍ら、自派の要人を南京國民政府に加入せしめ、開封政治分會主席を兼ね、津海線方面の蔣介石軍に策應しながら、京漢、隴海の兩線の軍を進めて、奉

天軍と戰ひ、北伐完成のゝち、蔣介石、閻錫山、李宗仁等と北京會議を開き、八月國民黨第二期執監委員が南京に第五次大會を開いた際これに列席した。二十四日南京から河南に歸り、直ちに西安に赴き、十七年十月國民政府の組織改造により、國民政府委員、行政院副院長兼軍政部長となり、自ら南京に赴いて就職すると同時に、河南省政府主席を辭任して部下韓復榘にこれを繼任せしめた。斯かるうちにも兎角南京政權の諸政策乃至それを繞る環境に嫌らなかつた結果、十八年二月病と稱して離京し、輝縣の百泉に赴いて辭表を提出した。時に國民黨第三次全國代表大會の開催中であつたゝめ、三月百泉から更に華山に移つたが南京の三全大會では依然中央執行委員に擧げた。然るに國民革命軍の編遣問題及び山東處分問題が發生して愈よ蔣介石派と並び立たざるに至り、山東省政府主席孫良誠をして山東を撤兵の上河南に入らしめ、次いで五月第二集團軍の將領劉郁等が馮玉祥擁護の通電を發した等、中央背叛の態度を明らかにしたゝめ、國民黨中央執行委員會常務會議でその除名處分と逮捕令の發出を決議して兩者の關係の決裂を來した。勢ひ起つた兩廣の反蔣運動に呼應して河南、湖北に軍を進めたが、その部下韓復榘、石友三等の離反と、同軍對勦炳麟軍とが河南西部黑石關で衝突し、早くも軍事行動の發生を見るに至つたと雖も、偶ま閻錫山から下野勸告電及びその外遊に同行する旨の通電を受けた等遂に屈服し、六月山西省に入り、最初晋祠に居り、のち建安村に移つて雌伏したが、十九年二月、第二、第三集團軍の聯合反蔣軍の結成に伴ひ、閻錫山を陸、海、空軍總司令に推した上、自ら副司令に任じた。斯くて汪精衛派、西山會議派、廣西系等も亦それに加擔しつゝ、三月十日山西省から潼關に歸つて軍事を指揮し、九月北平に擴大會議開催され新政府の組織を見るに至つたと雖も、張學良の出兵により、山東の第三集團軍が先づ敗退して、河南の第二集團軍も亦陸續山西、陝西に退却しつゝ、遂に敗亡に陷り、山西省境に走つて汾陽に閑居するに至つた。越へて二十年胡漢民の監禁事件に端を發して廣東に獨立政府組成せらるゝや、暗にこれに連絡し、その形勢の挽回に努めたが、同年九・一八事變の發生により南京、廣東兩政府の妥協なるに及んで國內各派の大同團結を圖るべき主旨により、國民黨籍の恢復を見、十二月二十三日洛陽を離れて南京に入り、二十一年一月國民黨第四期中央執行委員、國民政府委員、中央政治會議委員、軍事委員會委員に復任し、二月さらに國民政府內政部長に任ぜられたが、依然蔣介石との關係面白からず、辭職して病氣保養と稱しつゝ、山東省泰安に閑居中、宋哲元の察哈爾省政府主席に任ぜらるゝに及んで、同省に赴きさらに泰安に靜養してゐたところ、二十四年の北支問題紛糾に伴ひ再び全國各派の團結が云爲されて復活し、現に國民黨第五期中央執行委

員、軍事委員會常務委員、中央政治委員會委員等に擧げられ、南京に活躍しつゝある。

× × ×

右に叙述した馮玉祥の略歴が指示してゐるが如く、馮玉祥系の形成過程には、相當久しい期間が費されてゐたと雖も、その勢力の最も強化されつゝあつた時代は、北伐戰を戰つてゐた當時、馮玉祥自身が第二集團軍總司令としてその所屬各軍を統轄した居つた際である。この時代の馮玉祥系には

孫良誠(第三軍長)、馬鴻逵(第四軍長)、石友三(第五軍長)、孫連中(第二方面軍總指揮)、韓占元(第一軍長)、泰德純(第十四軍長)、馮治安(第二十三軍長)、韓復榘(第三方面軍總指揮兼第六軍長)、劉鎭華(第八方面總指揮兼第二十三軍長)、劉恩茂(第二十六軍長)、萬選才(第二十八軍長)、鹿鐘麟(第九方面總指揮兼第十八軍長)、劉汝明(第二軍長)、龐炳勛(第二十軍長)、王鴻恩(第二十七軍長)、劉驥(第三十軍長)、鄭大章(騎兵第一軍長)、

等々の將領が居り、さらにこれらの軍將以外に、政界の方面に活躍してゐた一族郎黨を數へ上げるとその主なるものは大體次の如くであつた。

× × ×

何其鞏(ソヴエート、ロシアで政治學を學び歸國後馮玉祥の幕下となり民國十六年その秘書を勤めた)、劉守中(民國十五年以來國民黨中央執行委員となつてゐた)、薛篤弼(國民政府內政部長及び衛生部長に任ぜられたことがある)。郭春濤(第二、第四期中央候補監察委員に選ばれた)、魏宗晉(財政通として知られてゐた)、林世則(西北軍天津辦事處長となつたことがある)朱敏章(民國十六年第二集團軍司令部外交處副處長となつた)、熊斌(民國十七年以來馮玉祥の代表として南京に活躍した)、劉治洲(天津に於ける馮玉祥の代表)、張之江(民國十七年以來馮玉祥の代表として南京に居つた)、劉郁芬(北伐後甘肅省政府主席となつた)。劉之訪(國民政府禁禁委員會副委員長)、劉寶珊(陝西省政府委員)、方振武(民國十五年獨立を宣し第五國民軍と稱したが、のち馮玉祥軍に投じ鹿鐘麟の下に第二軍長となつた)

× × ×

然るに北伐完成後、兎角中央派との關係に於いて面白くなかつた馮玉祥系は、國民革命軍の編遣問題が蔣介石側から主唱されて以來益々疎隔するに至り、馮玉祥の中央に對する抗爭的態度が鮮明となるにつれて、兩者の衝突が具體化し乍らそれが全面的衝突にまで延長するに及んだ結果馮玉祥系の勢力が著しく殺減されるに至つたこと前述の如くである。

馮玉祥系對中央派との衝突の最初は、日支山東協定後に於ける蔣介石の壓迫に端を發し、山東省主席孫良の山東放棄、馮玉祥を主とするその一派が反蔣擧兵を決行した際であり、この擧兵は閻錫山の勸告により、馮玉祥の下野となつて一先づ終熄したのであつたが、その時韓復榘（當時河南省主席）及び石友三（第二十四師長）、馬鴻逵（暫編十七師長）の三部下が、中央擁護を通電の上、馮玉祥系から離反した。次いで民國十八年十月韓復榘、石友三、馬鴻逵を除く以外の西北軍全將領が、蔣介石討伐の通電を發すると共に兵を擧げた。右の通電には、宋哲元劉郁芬、孫良誠、石敬亭、龐炳勛、孫連中、張維璽、劉汝明、梁冠英、程心明、魏鳳根、張凌雲、田金凱、馬鴻賓、吉鴻昌、馮治安、趙席聘、陳毓耀、門致中、鄭大章等々が署名してをり同時に鹿鍾麟、劉驥等も亦加つてゐたが、劉鎭華、萬選才、劉茂恩等の第十一路軍系はそれに對して反對の通電を出し、その他早くから蔣介石系に接近してゐた李鳴鐘、方振武等はこれに加擔しなかつたのは謂ふまでもない。

×　×　×

その後石友三（當時安徽省主席であつた）が反蔣軍事行動を起したが敗れて失脚し、民國十九年、馮、閻を主とする北方反蔣派及び其他各方面の反蔣勢力を網羅した擴大會議による北方政府の樹立に伴ふ軍事行動發生の際にも亦、前記の中央派に投降した各將領を除く馮玉祥系の大部分はこれに參加したが、この敗戰によつて、馮玉祥系の大半は沒落するに至つた。即ち石友三、梁冠英、吉鴻昌等の中央投降、鹿鍾麟の下野通電、劉郁芳の下野等がその主なるものであり、戰爭終熄の結果、李鳴鐘は豫皖鄂省邊防三清鄉督辦に、劉鎭華は陝甘晋三省邊防清鄉督辦に、張文江は江蘇清鄉督辦に任ぜられ馬鴻賓は甘肅省長に擧げられた。斯くの如くにして馮玉祥系は崩壞の過程を辿り乍ら、擴大會議の直後、殘つた各將領は韓復榘（第三路軍總指揮兼第六軍長）劉鎭華（第十一路軍總指揮）、馬鴻逵（第十五路軍指揮）楊虎城（第十七路軍總指揮）李鳴鐘（第二十一路軍總指揮）梁冠英（第二十五路軍總指揮）孫連中（第二十六路軍總指揮）宋哲元（第二十九軍長）龐炳勛（第四十軍長）馮欽哉（第七軍長）鄧寶珊（新編第一軍長）馬步芳（新編第二軍長）等等であつた。

×　×　×

而かも以上の各將領は原則上中央の統轄に屬し、その大部分は中央派即ち蔣介石系に隷屬しつつあると雖もそのうち中央派に對して不卽不離の態度を持してゐるものに次の各分子があり、これを舊馮玉祥系と呼稱すべきであらう（但しそれは國民黨第五期中央委員のなかゝら選び出した

人々である)。

(一)實力派――韓復榘、宋哲元、龐炳勛。

(二)元老派――薛篤弼、石敬亭、馬麟、鹿鐘麟。

(A) 韓復榘とその一派

舊西北軍中獨立組とも稱すべきものゝ尤なるを韓復榘となし、それに次ぐを宋哲元となすこと周知の如くであるが、龐炳勛をも亦このうちに入れて好い。

とくに韓復榘と宋哲元とは舊西北軍中に於ける先輩、若くは同僚が何れも沒落し乃至中央派に投降し乍ら、純蔣介石系としてその地位を維持しつゝあるのに對して、これらに倣はず以て少からず異彩を放つた存在振りを示現してゐる。

就中韓復榘の如きは、七萬以上の兵力を擁してゐるのであつて、その所屬軍は他の中央軍(韓復榘は中央軍第三路軍と稱へられてゐる)に比し、著しく特殊的の存在を形成しつゝある所以のものは、韓復榘自身の閲歷と、その根據とする山東省の地方的地理的關係が爾かあらしめた結果であり、勢ひ山東省は南京政府の所在地に近い中央直屬の諸省に較べて甚だしく自治的色彩に富みさらに韓復榘は馮玉祥に學んで地方政治には極めて熱心であり、比較的惠まれない山東省に於いて着々その實蹟を擧げて來たところに一層その特徴を顯著ならしめてゐる。

以上の如く韓復榘は特殊的存在として認識されてゐるだけに、何にか事が起れば中央派に對する反對側に數へられ問題視されるのである。最近北支自治問題の發生と共に、冀察政權なるものが宋哲元を中心として組成されたのを機として、韓復榘も亦山東省をひつさげつゝ北支自治聯盟に加はるべく豫想されたなど、この特殊的存在が齎らした結果である。

× × ×

韓復榘　河北省霸縣の產、宣統三年灤洲事變の勃發した時馮玉祥の部下に隷屬し、民軍との饗應を謀つたが敗れて鄉里に歸り、民國元年馮玉祥が左路備補軍營長に就任した際、舊誼を以てその部下に投じ、排長から連長、營長に昇進し、馮玉祥の知遇を受けた。十一年第一次奉直戰のゝち、第十一師第二十二旅、第四十三團長に任ぜられ、十三年の第二次奉直戰の後には國民軍第一師第一旅長に昇進、十四年西北代表として日本に派遣せられ陸軍大演習を參觀し、歸國後國民軍對直隷軍との衝突には李景林軍を敗つて、第一師長に擧げられ、十五年春李景林軍の反攻に當り、鹿鐘麟の命を奉じてこれを襲擊し、馬廠、興濟、青縣を陷れ、滄洲を圍攻したが

のち國民軍の北京に退却するや軍に從つて黃村一帶に轉戰した。次いで又國民軍の南口退守に隨ひ、さらに山西北部の攻擊に赴き、山西軍が孤村に大敗した際これを大同に進圍し勇名を驍かせ、十五年八月、國民軍の寧夏、甘肅方面に撤退後、一時山西軍と妥協の上、商震の下に移り綏遠に駐屯し、山西軍第十三師長に任ぜられたが、同年馮玉祥の露國から歸るに及びこれを迎へ、十六年三月第三方面軍總指揮に任ぜられ、斯くて西北軍が北伐に參加すると共に、國民革命軍第二集團軍と名づけられるに當り、第三方面軍總指揮兼第八軍長として十七年春京漢線方面に出動しつゝ、山西軍と協力の上奉天軍を破り、革命軍の先鋒として北京郊外南苑を占領したと雖も、折柄北京の治安維持のため殘留してゐた奉天軍鮑敏麟旅の武裝を解除して問題を惹起したのみならず、また先鋒の功を山西軍に奪はれたゝめ北京に入ること出來ず河南の西方に移駐せしめられた。十八年の春馮玉祥の反蔣軍を興した際、山西軍討伐軍の討伐を命ぜられたが無意味な內戰に參加し得ずと稱し、陝州で石友三と共に馮玉祥との關係を離脫して中央擁護の通電を發し、同時に河南省政府主席に任ぜられて就任し、十九年陳調元に代り、討逆第三路軍總指揮として濟南に進んだ。同年馮、閻等を主とする北方反蔣派の總聯盟による反蔣軍事行動に際しても亦、依然中央側として討逆第一軍團總指揮に就任、山西軍と戰ひ、一時膠濟鐵道線に壓迫されたが、蔣介石軍の濟南克服と共に再び濟南に入り、次いで山東省主席に任命され、二十年魯豫淸鄕督辦を兼任、同年夏、爾來最も密接な關係を有した石友三が反蔣軍を興したと雖も、これにも加擔せず中央擁護を標榜し、石友三の敗退後その殘軍を改編收容した。二十一年東北政務委員會委員、國民政府軍事委員會分會委員に任ぜられ、現に山東省政府主席として魯豫淸鄕督辦、第三路軍總指揮、國民黨第五期中央執行委員に就任、山東省に蟠踞しつゝある。

× × ×

因に韓復榘系に屬する分子としては、現山東省政府委員たる李樹春、何思源、王向榮、張鉞、王芳亭、陳耀漢、張鴻烈、林濟靑等を擧げ得べく、第三路軍系には、第十二軍長孫桐萱、第二十二師長谷良民、第二十九師長曹福林、第八十一師長展書堂等をその主なるものとする。

× × ×

(B) 宋哲元とその一派

宋哲元は次に摘錄するその略歷が物語つてゐる如く、馮玉祥系の嫡流であつたと共に、過去に於いては絕へず馮玉祥及びその系統の反蔣軍事行動に對する先陣を承つてゐたのみでなく、その

最後まで馮玉祥と行動を共にしたのであつたが、現在では他の馮玉祥系が沒落し、又は中央派に投降した中にあつて、韓復榘と同じく依然特殊の存在を續け乍ら、中央に對しては不卽不離の態度を持しつゝある。

×　×　×

而かも現に——少くとも北支自治運動とその趨勢とが興味ある懸案となつてゐる際、北支一帶に於ける花形に祭り上げられ、やがては北支一帶を支配するやうになりはしないかといふ漠然とした期待を或る一部の間から持たれてゐるのであり、斯くの如くにして、現實の宋哲元は、國民黨第五期中央監察委員、冀察政務委員會委員長、河北省政府主席、河北全省保安總司令、第二十九軍長、平津衞戍司令、冀察綏靖主任といつた數多い肩書をもつてゐるのみでなく、北平市北秦德純、天津市長肅振瀛、察哈爾省政府主席張自忠等自己直系の幕下を擁し、その他察哈爾、河北の二省に於けるあらゆる要職は盡く宋哲元一派の占有に任せてをり、勢ひ宋哲元は北支の主人公として納まるに至つたのである。

×　×　×

宋哲元　山東省樂陵縣の產、馮玉祥に隨從すること多年、その腹心の部下として國民軍の中堅であつた。民國十二年第二十五混成旅長に任ぜられ、十三年北京のクーデター後、直ちに第十一師長に昇進し、十四年には第四師長となり、次いで熱河に入り國民軍の全盛時代に當つて熱河都統となつた。十五年奉天軍對國民軍の衝突惹起するや、北京總指揮兼暫編第一師長として熱河正面の防備に任じたが敗れたゝめ綏遠に退き、さらに甘肅、寧夏に移つた。十六年馮玉祥軍が北伐戰に參加するに及んで、國民革命軍第二集團軍第四方面軍總指揮に任ぜられ、次いで陝西省政府主席代理、國民政府軍事委員會開封政治分會委員、山東省政府委員等を兼ね、北伐完成後に於ける國民革命軍の改編に際しては、第九師長に任ぜられて陝西に駐し、甘肅の劉郁芬と共に後方警備に當つた。十八年馮玉祥が反蔣介石軍を興すや、河南に進出して蔣介石軍と戰つたが敗れて陝西省に退き、十九年閻錫山、馮玉祥等の反蔣擧兵には馮玉祥に代つて西北軍の總指揮となり、中央軍と戰つた。然るにその戰ひに敗れて山西省南部に退いた後は、西北軍を纏めて張學良の手で改編された上、東北軍第三師長に任ぜられ、十九年改めて中央陸軍第二十軍長となり二十一年東北政務委員會の北平移轉後同委員に就任し、その後張學良が北平綏靖公署主席を辭任したのちは、察哈爾省政府主席として二十九軍を率ゐて察哈爾に移駐し、二十四年まで蟠踞してゐた。然るに偶ま察哈爾事件の發生と共に、同省政府主席を罷免せられたと

雖も所謂北支問題の惡化につれて時の平津衞戍司令王樹常の罷免に伴ひ、直ちに平津衞戍司令に返り咲き、北方に於ける形勢の進展につれて、河北省政府主席商震の退却後、河北省政府主席を襲ひ、遂に現在の要職を占めつゝ、以て北支の花形となるに至つたのである。

× × ×

以上の如く察哈爾省事件で失脚した宋哲元は、その直後知らぬ間にだん〳〵と地位を得ると共にぐん〳〵肥つて行つたのであつた。これは宋哲元自身が好運を掴み得た所以でもあらうが、北支に於ける宋哲元及びその一派の實力と、環境とがさうさせたものであつた。そしてそこには宋哲元及びその一派の軍閥的存在と、所謂北支一帶の地域的特殊關係が横はつてゐる事實を看過出來ない。

かうした點――北支に於ける宋哲元及びその一派の存在と勢力――に關し、北支の現地報告では次の如くこれを評價してゐる。

「しかしこれで所謂北支問題が解決したとか、明朗の第一歩を踏み出したなどと思ふものがあつたならば、それこそ非常な錯覺である。宋哲元によつて北支の政治安定が招來せられ、經濟開發がやれると考へてゐるものがあるとしたならば、飛んでもない誤謬に陷るであらう。正直のところ宋哲元の政權は軍閥政權と一つも變りがない。謂はゞ宋哲元並びにその一派がたゞ儲けをしてゐるといふに過ぎない。北支事件、察哈爾事件の總決算が冀察政務委員會となつて現はれ、宋哲元の一族郎黨がその地位を得たと謂ふだけで、北支の自治運動もどこへやらである。（下略）」

× × ×

尙ほ宋哲元の一派には秦德純のほかに、遇之翰、肅振瀛、張維藩、趙伯陶、荊得文等の文治派系があり、實力系には馮治安（第三十七師長）張自忠（第三十八師長）趙登禹（第百三十二師長）等がその主勢力を占めてゐるが、最近肅振瀛を主とする文治派と張治忠を中心とする實力派との間に對立激化して來たとの噂さへある。以上のうち泰德純は國民黨第五期中央監察委員に選出されてゐる。

× × ×

（C）龐炳勛とその一派

龐炳勛は實際上宋哲元一派に入れて好い。宋哲元が察哈爾省政府主席時代には同省政府委員に

擧げられ、その所屬部隊も亦、察哈爾に駐屯してゐた。

龐炳勛　河南省の產、馮玉祥の部下となつて以來、武漢政府時代には馮玉祥系を代表しつゝ唐生智の下に武漢軍事委員會に屬してゐたが、唐生智の失脚後、河南に歸り、民國十七年河南省政府委員に擧げられ、十九年の反蔣介石運動の際には第二方面軍鹿鐘麟の下に第三路軍總指揮として出動したと雖も、山西南部に後退し、二十年陸軍第四十軍長兼第三十九師長に任ぜられ二十一年末宋哲元の察哈爾省入りと共に、同省に至り政府委員に擧げられ、現在國民黨第五期中央監察委員に選出されてゐる。

×　×

(D) 元老派の分子

舊馮玉祥系の中で元老派に屬するものゝうち、獨立組とも稱すべきは、前述の如く薛篤弼、石敬亭、馬麟、鹿鐘麟等である。但し馬麟は依然靑海省雜軍の統率者で、實力派であると共に靑海省主席に選ばれてゐるだけ、舊馮玉祥系の元老派と謂はんよりも、寧ろ準蔣介石系と稱して好い。

×　×

薛篤弼　山西省解縣の產、山西法政學堂卒業後、民國初年山西省で司法官となつたが、三年馮玉祥の陸軍第十六混成旅執法官に任ぜられて爾來馮玉祥に從ひ、湖南、陝西等の縣知事を經て馮玉祥の統轄下に於ける各要職に歷任のゝうち、馮玉祥が北京政界を失脚の上、甘肅に退くや、これに隨ひて甘肅省長に就任し、十六年馮玉祥と共に河南省に入り、十七年河南省政府委員兼民政廳長となり、同年馮玉祥系の勢力を代表して國民政府に參加しつゝ政府委員兼內政部長、中央政治會議委員等に任ぜられ、同年衞生部長に轉じたが馮玉祥と蔣介石との衝突により辭任して馮の下に赴き、十九年北平の反蔣政府にも參與したと雖も失敗後、二十年國民黨第四期中央候補執行委員に選出され、現在でも第五期候補執行委員に擧げられてゐる。

×　×

鹿鐘麟　河北省定縣の產、馮玉祥の麾下で累進し、民國十五年馮の外遊中國民軍を率ゐて奉天軍と戰ひつゝ北京の防守に當り、次いで南口を根據として、のち察哈爾都統を兼ね、久しく奉天軍と對峙したが、支持し得ず、同年春敗退の上遂に露國視察に赴き、同年春馮玉祥の再起に參劃しながら綏遠、甘肅、陝西を經て十六年河南に入り、河南省政府委員兼鄭州市政廳長、南

京政府軍事委員、國民軍第一路總指揮兼第一軍長等に歴任し、十七年北伐に參加して第二集團軍北路總司令となり、京漢線を北上の上、北京に入り、北伐完成後、馮玉祥が國民政府軍政部長となるや、その下に於いて軍政部次長に任ぜられたと雖も、馮の南京離脱に伴ひ辭任し、その後馮玉祥と共に反蔣運動に從事して失敗以來、天津に隱退するに至つたが、その政治的生命は全く消滅するに至らず、第三期以降各期とも國民黨中央候補執行委員に選出され、最近宋哲元の北支政權組成後、冀察政務委員會の最高顧問に任ぜられてゐる。

×　×　×

石敬亭　山東省利津縣の產、前清奉天新民府中央陸軍第一混成協隨營學堂の學生出身、早くから馮玉祥に隨つてその部下となり、漸次累進の上、民國十六年には既に陝西省政府委員に擧げられ、十七年國民革命軍第六方面軍總指揮兼第二十二軍長、國民政府軍事委員會委員に就任、北伐の進攻に伴ひ、山東省平定後は山東省政府委員となり、省主席を代理し、その後西北軍の總參謀長として馮玉祥を輔佐し乍ら、屢次の戰鬪に從ひ、十八年馮玉祥の下野、山西入りのち、馮玉祥に代つて西北軍の最高政策を處理し、十九年の北平に於ける反蔣介石政府の組織に伴ひ、馮玉祥が西北軍總司令に復任するや、依然その下に總參謀長となり、失脚後も亦馮玉祥と行動を共にし、これを輔佐した。從つてその政治的生涯は尙ほ消滅せず、第二次以降各次の國民黨全國代表大會に於いては中央候補執行委員に當選し、現に國民黨第五期中央候補執行委員として、宗哲元の冀察政權產生と共に冀察綏靖公署總參議兼冀察政務委員會委員に任ぜられてゐる。

×　×　×

馬麟　甘肅甘州鎭守使を經て青海省政府委員兼建設廳長となり、國民革命軍第二集團軍暫編陸軍第四混成旅長として舊西北軍に所屬しつゝあつたが、元來青海省雜軍の將領、現に國民黨第五期中央候補監察委員に選ばれ、青海省政府主席に任ぜられてゐる。

第二節　山西派

山西派とは閻錫山並びにその幕下の面々を總稱するのであるが、盟主閻錫山は民國以來督軍その他の名義で山西省の實權（山西省の權力は綏遠省にも及んでゐる）を握りつゝ現在に及び、斯くの如く長い歲月に亘つて、同一の地盤を確保して來たことは廣い支那に於いてすら、餘りにその比を見ないのであつた。

尙ほ且つその期間内に於いて當の閻錫山は熱心に山西省の自治に努力し乍ら、同省をして模範省たらしめたのであるだけ、その存在の實質に於いては軍閥的であり、その努力も亦軍閥の地盤確保の範圍を一歩も出でなかつたとは謂ふものゝ、一種の特殊的な存在であること謂ふまでもない。

×　×　×

元來閻錫山は本質的に極めて地味で、際どい冒險をやらぬ性質であるのと、大きな野心をも持たなかつたゞけ、そこにあれだけの勢力を形成しつゝ、山西省及び綏遠省の二省に亘る實權を掌握し得た所以であり、從つて北伐戰に參加したのち、北京から奉天系を追ひ出したゝめ、京津衛戍總司令として北京に進出し、大山西主義の實現を期し得たと共に、その勢力の增大を來した結果は、反蔣派に加擔し、民國十九年の反蔣戰を展開し乍ら敗北に陷つたとは謂へ、馮玉祥系のやうな慘めな沒落と崩壞を見るに至らなかつたのは、山西省の實權が何物の手をもつてしても、これを攪亂することを得ない客觀的情勢を具へ、堅固な防壘によつて包圍されてゐたからであつた。

こゝに閻錫山及び山西派の特殊的な存在があつたといつて好い。以上の經緯に對しては「露西亞と極東問題」の著者の如き次のやうな批判を下してゐる程である。

×　×　×

「別の有力なる軍閥は閻錫山である。閻錫山は山西の模範督軍であつて、常に中立を守つてゐる神祕的存在であつた。卽ち戰爭と政治競爭の渦中に入らなかつた。而して閻錫山が神祕的存在たり得た所以はその地域的關係からも來てゐた。斯うした環境に於いては自然的に戰爭の渦中から遠ざからしめ、或は敏速なる襲擊の禍を受けしめないからであつた。換言せば山西省は戰地と外力侵略の中心から遠く離れてゐたのみでなく、北平と滿洲とに近く、經濟的に富裕で內戰の影響を受けなかつたゝめ、山西省が現在の域にまで到着し得た所以である。而かも斯くの如く例外的の幸運と相對的の隆盛を以てした上、經濟狀勢に惠まれたのみならず、山西省の人民には叛逆性の成熟がなかつた。斯くて閻錫山は斯かる好條件を具備せる地域の主人であつたほか、人民福利に對し相當の注意を怠らなかつた。勢ひ人民は長期間に亘る保護を受け同時に戰爭の苦痛から免れ得たのである。然るに革命の發展と革命勢力の普遍とは全國に於いて單獨の地位に居る一省もなく、この點から山西省も亦到底例外たり得なかつた。同時に北京の幸運と閻錫山とには重大な關係があつた。一九二七年から二八年にかけて北京への聯合進攻と張作霖の後退とにより、閻錫山は北京を占領の上、一九二八年の冬、南京國民政府からの官位を

受けた。然るにその翌年閻錫山は自身が既に不良なる政治的の渦中に入つたことを自覺しつつ、蔣介石に迫つて外界との關係が發生し、最後に南京に反抗した」（下略）

× × ×

上述の經緯の下に山西系は、民國十九年擴大會議の開催に伴ひ政爭の渦中に投じながら、閻錫山をして陸海空軍總司令の職に就任せしめたのであるが、蓋しその當時を山西系の全盛時代と稱すべきであらう。

× × ×

閻錫山　山西省五台縣の產、光緒二十八年武備堂卒業後、三十年日本に留學して陸軍士官學校歩兵科を卒業した。日本留學中既に同盟會に加入し、李烈鈞、孔庚等二十八人と「大夫國」を組織の上、孟子の「不淫、不移、不屈」を團綱となした。宣統元年歸國後、山西講武堂々長及び歩兵標統協統等に任ぜられたが、第一次革命の際は兵を太原に擧げ、山西巡撫陸鐘琦を斃し、推されて山西都督となり、山西の獨立を宣言すると共に兵を率ゐて娘子關に進攻し乍ら清軍の入晉に備へた。その後清軍の勢優勢となるや敗退し、省城を棄てゝ平陽、包頭の南北に移駐したが、南北統一と共に正式に山西都督に就任し、民國三年同武將軍を授けられ、五年山西督軍となり、六年更に省長を兼任しつゝ、爾來山西省にあつて專心省治に努め、政局の推移に關與せず、保境安民を保持し乍ら、所謂山西モンロー主義を發揮し、棉花栽培、養蠶、植林、排水、灌漑、用水の改良、資本の誘發等生產の改良を奬勵した。その間七年護法戰役の際、商震の一混成旅を派遣して湖北を攻めしめ、九年直隸安徽の兩派の戰ひには曹錕、吳佩孚と協力し、十一年の奉直戰には吳佩孚を助けた。然しながら以上の民國歷次の政變及びその戰役には單に消極的の援助を行つた程度に過ぎず、依然山西モンロー主義を堅持しつゝ推移した。然るに十五年國民軍の山西侵入を企つるや、張作霖、吳佩孚と聯合しつゝ國民軍に對して作戰した。蓋しこれが閻錫山の正式に戰爭の渦中に投ずるに至つた最初であつた。斯くて國民軍を驅逐し、同年十二月安國軍副司令に就任その軍隊を安國軍第四軍と稱へたが、のち奉天派との關係が決裂して、十六年四月國民革命軍に饗應し、青天白日旗を揭げ、六月太原に於いて國民革命軍北方總司令兼山西省政府主席に任ぜられたが、蔣介石の下野後も、尙ほ奉天軍との間に一種の協調を保つてゐたところ、同年九月武漢、南京の合作後、中央特別委員會委員、軍事委員會主席團、國民政府委員に任ぜられたと共に、奉天軍が山西討伐を斷行せんとする先手を打つて軍を動かし、同年十月奉天軍討伐宣告を發して進軍した。斯くて十七年二月第四次國民黨中央執行委員

全體會議で國民政府委員、軍事委員會委員、同常務委員、建設委員會委員に擧げられ、又國民革命軍第三集團軍總司令となり、同時に太原政治分會主席を兼ね、同年五月奉天軍を保定方面に擊破し、六月京津警備總司令に任命されて北京に入り、十月國民政府の組織改造に際し、國民政府委員兼內政部長となり、十八年國民黨第三次全國代表大會で中央執行委員に選擧されたが、十九年馮玉祥系及び汪精衛系、西山會議系、廣西系等と共に、反蔣聯盟を形成の上、北平に擴大會議を開催し、獨立政府を樹立したのち、中華民國陸海空軍總司令、國民政府委員會主席等に選ばれ、九月九日就職したと雖も、軍事行動に慘敗して山西に退き、遂に下野、大連に逃れた。然るに二十年八月廣東、南京兩政府の合作に伴ひ、所謂國難時期に於ける全國の團結一致運動の擡頭を動機に山西省に歸り、太原綏靖公署主任に就任以來、又もや山西モンロー主義の實踐に汲々として蔣介石との間も亦比較的圓滑となり、現在では國民黨第五期中央執行委員、軍事委員會委員に擧げられ、同時に中央政治委員會委員にも選ばれてゐる。

×　×　×

斯くの如くにして閻錫山及び現在の山西派は、中央政權の統轄の下に於いて、而かも蔣介石を主とする中央派とも表面協力しつゝあるが、その背景をなす山西軍は依然閻錫山の下に結束し、中央軍とは不卽不離の關係を持續してゐるだけに、蔣介石系にとつては一種の對立的勢力たるを失はないこと謂ふまでもない。

×　×　×

山西軍の最も强化してゐた時代は、民國十七年の五中全會直前であり、その兵力十五軍約五十萬と稱へられ、將領には商震（第一軍長）楊受源（第二、第三聯合軍長）傅存懷（第四軍長）傅作義（第五軍長）豐玉璽（第六軍長）張蔭梧（第七軍長）譚慶林（第八軍長）李維新（第十軍長）王茂公（第十一軍長）徐永昌（第十二軍長）張占鰲（第十三軍長）戴聯璽（第十四軍長）王英（第十五軍長）等を數へ得たのであつたが、擴大會議による反蔣擧兵の敗戰後、民國二十年一月十六日、蔣介石、張學良の聯名によつて改編された山西軍の各軍師長は次の如くであつた。商震（第四軍長）、徐永昌（第五軍長）、楊受源（第六軍長）、傅作義（第七軍長）、楊效歐（第三師長）、馮鵬翥（第四師長）、孫楚（第五師長）、楊澄源（第六師長）、王靖國（第七師長）、楊耀芳（第九師長）、傅作義（第十一師長）――。而して現在の山西軍は大體次の顏觸れにより統率されてゐる。

徐永昌軍（第三十三軍）

第六十八師（李服膺）第六十九師（楊澄源）
楊愛源軍（第三十四軍）
第七十師（王靖國）、第七十一師（楊耀芳）
傅作義軍（第三十五軍）
第七十二師（李世達）第七十三師（傅作義）
獨立第三旅（豐玉璽）

× × ×

從つて山西軍の全盛時代に於ける同軍の將領中、その後山西派から離脱したものも亦少からず、張蔭梧、商震（後述の如く山西派を離れて北支雜軍として準蔣介石系となつた）等その主なるものであり、現在の山西派としては（現國民黨中央委員のなかで）次の如く

（一）實力派――徐永昌、楊愛源、傅作義等の一派及びその部下、
（二）文治派――趙戴文、傅汝霖、趙不廉等。

の二系統に區分せねばならぬのであり、これらの各系はよく閻錫山の傘下に固く結束し乍ら、山西モンロー主義の實踐工作に協力する傍ら、何れも中央委員として中央政權との間に關聯をもち、同時に蔣介石を主とする中央派と或る程度までの協調を保ちつゝある。

× × ×

然るに最近北支一帶に亘る形勢に緊迫を加へて來た折柄、偶ま山西省が共産軍の侵入による脅威を受けたと共に、山西省としては或る程度まで共産軍の蹂躙に任さゞるを得なかつた上、その討伐に力が足らなかつた結果、中央軍の援助を受けたゝめ、中央軍の山西省侵入をも誘致し、勢ひ山西モンロー主義が中央軍――中央派のために破壞されさうな形勢にあつた等、山西系の將來とその動向に對し、夥しい興味を以て見られてゐるのであるが、この點に關し、北支の現地報告では次の如き觀測を加へてゐる。

「北支には目に見へぬ一つの動きがある。それは北支と中央との關係を次第に稀薄ならしめて、所謂「北支人の北支」を建設しやうといふ作用である。その中心人物とも見られてゐるのが、冀察政權の宋哲元である。しかも冀察二省の現勢力が、山西、綏遠、山東の三省を合體した時に於いて、始めて對中央關係に重大エポックを劃するであらう、といふのが一種の空氣である。だから閻錫山が共匪對策に宋哲元の力を借りるかどうかといふことが極めて重視されてゐたのだ。それが閻の態度表明、中央の實力援助によつて、一切合財明白になつて仕舞つた。閻

は完全に中央に叩頭したわけである。中央から山西に出動した軍隊は、第二、第四、第六、第二十五、第三十五の五個師で、その總指揮には蔣介石直系の陳誠が當つてゐる。別に傍系の商震麾下の二個師、都合七個師の中央勢力が山西に來たのだ。かうなれば山西は最早や完全に中央の支配勢力下に置かれたも同樣である。鎖國山西の扉はかくして中央勢力によつて打開され、封建的閻の勢力は、蔣の統一勢力に包含されたわけである。中央が山西を勢力下に收めるといふことは對北支策の根本であらう。山西勢力を中央によつて統制することが出來れば、少くとも、冀察政權の擴大强化を牽制し、宋哲元による北支五省の連衡といふ自治風潮を阻止し得る譯である。だから陝北から共匪が山西に侵入したことも、中央とある種の默契があつたのではないかといはれる。陝北の共匪討伐のために、張學良指揮下の剿匪陣營が整備されてゐたが、若し學良が眞實これを擊滅せんとしたならば、必らずしも不可能ではなかつたらうし、山西に逐ひ込むといふやうな愚策はない筈である。共匪が山西に入れば、山西が獨力で、これを討伐し得ぬこと明らかであるから、中央から援助名義で兵を出し、山西に牢固たる中央勢力を植ゑつける。といふ一石二鳥の計劃を蔣ならびに中央が謀つたのだと見るのも、あながち臆測とのみ評し得ない。しかし、そんな詮議を一生懸命して見たところで、どうにもならぬ。問題は中央勢力が山西を完全に乘取つて了ふか、といふところに中心がある。閻錫山の沒落近しと見ることは確かに先走り過ぎてゐる。成程、共匪に山西の奥地を荒らされては、經濟的にも相當逼迫するであらうし、いくら中央と協同だといつても、軍費の大部分は、閻自ら請負はねばなるまいから、財政的にもかなり痛みつけられる。地方軍閥として封建大名式にいまゝで蓄積した富を共匪討伐に支出するといふことは、閻にとつて、致命的打擊であらう。けれども、中央から閻の存在そのものを見れば、決して無意義ではなく、寧ろ利用價値十分な存在であるのだ。その說明は敢へてこゝで繰り返さない。從つてどのやうなことがあつても、閻の勢力そのものを叩き潰すといふやうなことはする筈がない。中央軍にしたところが、共匪討伐が完了すれば、いつまでも山西に殘すといふやうなことはしないだらう。そのやうなことは、徒らに各方面を刺戟するだけで、中央を利することが殆どないからである。さういふ點についてこの常識といふか、政略といふか、さういふことにかけては蔣介石は立派な腕を持つてゐる。つまらぬ誤解を受けたり、人氣を落したりするやうな馬鹿な眞似はしない。だが、閻が爾今完全に蔣ならびに中央のロボットとして山西に蟠踞するといふことだけは確實である。閻のロボット化、それが中央の意圖であるだらう」(北平――大平昌一氏の通信、東洋

六月號所載）

× ×

因に問題の山西省の中央化に對してはその後軍事委員長行營主任陳誠が山西陝西綏遠寧夏四省邊區剿匪總指揮に任命され同時に山西省主席徐永昌が免ぜられて蔣鼎文が任命されるに至つた。

× ×

徐永昌　山西省崞縣の產、北平陸軍大學卒業後、保定軍官教導團教官となり、民國十一年の奉天戰の後、冀南鎭守使孫岳に從つて大名に赴き、第十五混成旅參謀長に任ぜられ、第二團長を兼ね、十三年孫岳が國民第三軍に補充せらるゝや、中央暫編第一混成旅長に就任、十四年西安に入り陝西保安副司令となり、國民第三軍第一師長に昇進した。十四年の冬國民軍對直隷軍の衝突發生するに及び、津浦線に於ける李景林軍を攻擊し、十五年四月國民軍の南に退守するに隨ひ、のち山西軍に入り晉軍第三軍長に任ぜられた。十六年山西對奉天軍の戰ひに際して京漢線に進攻して驍勇を轟かせ、閻錫山の國民革命軍北路總司令に就任するや北伐に從ひ、十七年國民政府軍事委員會委員に擧げられ、次いで同年第三集團軍第三軍長となり、西北軍と協力の上奉天軍を破り、奉天軍總退却後國民革命軍として最初に北京に入城した。同年綏遠省政府成立するに當り同省政府主席に推され、十八年國民革命軍の改編により第三十三師長に任命された。斯くて十九年擴大會議の反蔣擧兵には山西軍前敵總指揮として京漢線方面に出動したが敗れて山西に退き、同年閻錫山の大連に亡命後その留守を守り、張學良と妥協して山西の保持に努め、二十年山西第五軍長に任ぜられ、同年閻錫山の歸省後山西省政府主席に任ぜられ、北方の各軍の稱號統一により中央陸軍第三十三軍長となり、二十四年國民黨第五期中央監察委員に選出されたが、最近山西省政府主席のみはこれを免ぜられた。

× ×

楊愛源・山西省五台縣の產、閻錫山と姻戚關係を有し、山西軍中最も實力をもつてゐる。保定軍官學校の卒業生、民國元年から四年まで閻錫山の幕下にあつて、順次營長、旅長、團長に昇進し、十五年には既に山西軍第二師長に任ぜられてゐた。斯くて閻錫山が國民革命軍北方總司令に就任するや、第三集團軍第二軍長となり、同年の奉晉戰には山西軍北路總指揮商震の下に第二軍長として京漢線方面に出動し、十七年國民政府軍事委員會委員に選ばれ、察哈爾省政府の成立に伴ひ、同省出席に任ぜられた。その後十九年の反蔣戰に參加して失敗し、大連に亡命したが、二十年陸軍第三十四軍長及び山西清鄉督辦に任命せられ、現に三十四軍長として留任し、同時に國民黨第五期中央候補執行委員に選出されてゐる。

×　×　×

傅作義　山西省孝義縣の產、山西陸軍小學生時代既に革命に從ひ、民國二年北京淸河軍官豫備學校を卒業後、保定陸軍軍官學校に入り、七年第五期生として卒業するや、直ちに太原に赴き學兵團の下級官となり、第十團附、第七團營長を經て團長に拔擢され、十五年國民軍對山西軍の戰ひには天鎭を守り功によつて旅長に昇進し、戰後第四團長に任ぜられた。十六年閻錫山の國民革命軍加入と共に、晉奉戰の發生により、總指揮に任命され、涿州で奉天軍に抗し驍名を馳せ、十六年萬福麟と協定成立の上、開城して天津に閑居し、同年奉天軍の京津撤退に伴ひ、山西軍第五軍長となり、天津警備司令に任ぜられた。十九年閻錫山等の反蔣擧兵に際しては山東に出兵したが、大敗し、山西軍の敗因を作り、閻錫山の大連亡命後は、徐永昌と共に山西軍の實力保持に盡し、一時張學良の下に屬して、第七軍長兼步兵第十師長となると雖も、二十年第三十五軍長兼第七十三師長に任ぜられ、綏遠省政府主席に就任、現在に至るまで繼續し、同時に國民黨第五期中央執行委員に選出されてゐる。

×　×　×

趙戴文　日本留學生出身。學生時代から革命運動に投じ、孫文の舊い同志であつた。歸國後山西農業專門學校に敎鞭を執り、學生間に革命思想の宣揚に努め、閻錫山も亦その門下であつた。第一次革命に際し太原占領に參加し、民國三年陸軍中將に任ぜられ、次いで山西督軍署參謀長、山西暫編陸軍第四旅長等に歷任したが、爾來閻錫山の顧問として、その山西自治建設を援け、十五年晉北鎭守使、十六年國民政府委員に任ぜられ、十七年太原政治分會委員となり、國民革命軍第三集團軍政治訓練部主任、察哈爾都統に就任、同年北伐完成後、北平政治分會委員に擧げられ、次いで國民政府に入り、內政部次長を經て、內政部長兼蒙藏委員會副委員長に任ぜられ、十八年國民黨第三期中央執行委員、中央政治會議委員に選出されたのち、國民政府委員兼監察院長ともなつたが、十九年の山西派を主とする反蔣擧兵に當りて辭任し、山西に歸り、現に國民黨第五期中央執行委員に選出されてゐる。

×　×　×

傅汝霖　黑龍江省安達縣の產、もと西山會議派に屬してゐた政客である。民國十三年國民黨第一期中央候補執行委員に選出されて以來、政界に活躍しつゝ、十四年西山會議に參加し、十六年武漢、南京、西山會議派の三派合作後、中央特別委員會候補委員及び國民黨中央黨部青年部主任に擧げられ、南京に居つたが、蔣介石系と合はず、十九年の擴大會議に加はり、反蔣運動

に從つたが敗れ、さらに二十年閻錫山の代表として廣東に赴き、廣東國民政府の成立に參加し、政務委員會委員となつたと雖も、同年末南京廣東政府の妥協と共に國民黨第四期中央候補執行委員に選ばれ、引續き現在では第五期中央候補執行委員に當選してゐる。

× × ×

趙不廉　山西省五台縣の產、山西大學の卒業生、早くから同盟會に加入し、蒙古で革命宣傳に從ひ、第一革命に際しては、山西軍政府祕書長として活躍し、南北妥協後山西都統府參謀、國民黨山西支部理事に推され、十五年閻錫山の代表として漢口に赴き、次いで南京に轉じ、十六年山西省政府委員兼農礦廳長となり、國民革命軍第三集團軍政治黨務代表、國民政府參事等に任ぜられ、十七年北伐完成後國民政府內政部次長、山西省黨務指導委員となり、十八年國民黨第三期中央候補執行委員、國民政府振災委員會委員、河北省政府委員等に就任、十九年擴大會議の反蔣擧兵には改組派、山西會議派との連絡の任に當り、山西派を代表して活動し、失脚後と雖も依然反蔣運動を策謀したが、二十年國民黨第四期中央候補執行委員に擧げられ、現に第五期中央候補執行委員に當選してゐる。

第六章　反國民黨各派の陣容とその構成分子

現在支那の政治形態は、國民黨の一黨專政であるだけに、支那には現實的に國民黨以外の政黨若くは公開的政治結社が何等存在し得ない譯である。

從つて前章に解剖した各派別は、何れも原則上國民黨々系に屬してゐること勿論で、これを强いて各派系に分析したものゝ、要するに國民黨內に於ける小組織の對立、またはその統轄軍隊の系統を異にする所以から來た實力を基礎とする勢力の對立であつて（支那の軍隊は傭兵制度であり、依然私兵制が殘されてゐる關係上、この點に於いて封建的軍閥と實質的に異るところがない）、具體的には蔣介石を主とする中央の大勢力の各地に對立する中小勢力に對する壓迫牽制と、對立地方中小勢力の中央大勢力に對する抗爭とが、その延長過程に於いて各種の黨派、派系等の形態を採り、若くは聯盟を形成せしむるに至つたのであり、自然そこには絕へず時局の混亂と、その動搖等々が展開された所以である。

×　×　×

然るに斯うした國民黨内に於ける各派、各勢力以外に國民黨の存在、若くはその主義政策、乃至そのイデオロギーに對して反對する各派、各勢力の存在すること謂ふまでもない。

但し前各章に於いて部分的に觸れておいた通り、國民黨の基礎、その組成單位にも亦、支那に於ける各階級を網羅してゐること周知の如くであり、さらにこれらの階級層を基調として國民黨内にそれ〴〵の小組織又は各勢力が形成されつゝあると雖も、そのほか支那には國民黨統治が、所謂訓政時期を經過しないため、法規的に政黨の存立が許されない結果、國民黨の主義、政策に反對するところの各々の階級を中心とする政黨乃至公開的政治結社に至つては未だ實現することの不可能な環境におかれてゐるのである。

×　×　×

斯くの如くにして現在の支那には、國民黨によつて代表されつゝある資産階級（小資産階級をも含み）の政黨と、無産勤勞大衆の組織化たる中國共産黨との二つの大政黨、二つの大勢力が對峙し乍ら、その二大政黨が各々自らの統制内部に於ける小組織、對立勢力を總增員しつゝ、決死的の闘爭を繰り返へしてゐるのである。

勢ひ反國民黨各派の陣營を解剖せんとするには、先づ國民黨にとつての對峙大勢力たるこの中國共産黨を取りあげなければならぬのであるが、中國共産黨の形成過程、その客觀的環境、その内容、若くは實力關係、主要構成分子等々を解剖せんとするには、到底かゝる小冊子の盡くし得るところでないため、中國共産黨關係に關する限りは、これを他日に讓りたい。

×　×　×

自然本章では勤勞無産大衆を除く各階級層を基礎とする反國民黨系の組織乃至代表派系及びそれらのイデオロギーに立脚する文化運動團體（それは前述の如き經緯により公開的政治結社として産生し得ないが）をのみ取り上げることゝした。

謂ふまでもなく、支那に於いても來るべき憲政開始後（中華民國憲法草案が民國二十五年五月五日國民政府命令として宣布され、同年十一月十二日に召集さるべき國民大會の討議を經て憲法として確定さるべき筈である）、憲法の條によつて集會結社の自由を保障された後に於いては、國民黨以外の公開的政治結社が出現するであらうし、それは現實の反國民黨系の各派または思想系統を基調として派生するであらう。

×　×　×

而して現在の支那に於いて反國民黨のイデオロギーに立脚する派系として擧げ得るのは大體次の如く

（一）社會民主々義を基調とする一派。

（二）復古主義を標榜し乍ら、一種の民族觀念に根ざしつゝある國家主義派。

（三）自由主義の範圍に於いて人權運動を實踐せんとする人權派。

（四）共產黨の外圍團體としての反帝同盟の一派、及び同じくC・Pの外圍文化運動團體たるプロレタリア文學系思想家の一派。

（五）聯省自治を具體的政策とする自由民權主義の一派。

（六）國民黨C・C團の文化統制とくに中國本位文化建設運動に對して反對する一派。

等々である。

× × ×

國民黨中央派――卽ち蔣介石を中心とする現南京政權の軍閥的獨裁强化に對して、自由、民權を標榜するところの廣汎なる自由主義のサークルの中から、獨裁――國民黨の一黨專政――に對する强烈な反抗思想が擡頭し、それらのイデオロギーが、さらに個々の幾つかによつて統制され乍ら、そこに國民黨反對の數個の派系が形成されるに至るのは、先進國に於ける政治結社組成の過程と、ほゞその軌を一にしてゐるが、これらの國民黨反對の各系統を大別すると、これまた先進國の政治的乃至思想的各派系と同樣、これを總括して左派と右派とに區別し得るのであり、前に掲げた各派別のうち、社會民主々義を基調とする一派及び共產黨の外圍團體としての反帝同盟の一派並びにC・P外圍文化運動團體乃至國民黨C・C派の中國本位文化建設運動に對して反對する一派等々は左派に屬し、國家主義派、人權派等は右派であり、聯省自治を具體的政策となす自由民權主義の一派も亦右派の中に分類して好からう。

× × ×

以上の反國民黨系各派のうち、何といつても國民黨反對への運動を大規模に實踐したものは社會民主々義を基調とする一派であつた。

この派は民國二十二年末福建省に於て國民黨政權に背叛し乍ら獨立政權を樹立した。そしてこの派は「生產黨」と稱する政治結社をすら結成しつゝ。人民政府を建立し、眞正面から國民黨及び國民黨政權に挑戰し、左翼社會民主々義のイデオロギーを實踐しやうとしたのであつた。

× × ×

「確かな筋の消息によると李濟深、陳銘樞、蔣光鼐、蔡廷楷、黃琪翔、章伯鈞等の福州に於ける連日に亘る會商は、當初の豫定通り、極めて順調に進展し、新政權の成立を告ぐる全國各界あての通電、並びに政治綱領も、既に作成濟みで、愈よこゝ數日内に局面の一大展開を見る形勢となつて來た。新政府によつて掲げられたスローガンは、反帝國主義、革命的民主々義、獨裁絶體反對、土地の均分（耕者當有田）、勞工の保障等々、可成り社會民主々義的政策を高唱したものであるが、對内政策に關する限り、土地問題の解決に對し、特に力を注ぐことゝなつてゐる。新政府の陣容も亦、全く最初の筋書通りで、李濟深を人民政府の主席に推し、陳銘樞は行政部の責任者となり、黃琪翔、章伯鈞等の援助の下に黨務をも總括する。關係の最高責任者は蔡廷楷がこれに當り、黃琪翔章伯鈞等は先づ參謀總長に就任した上、若し討伐軍事發動の際は、直ちに前敵總指揮に轉じて自ら陣頭に立ち、鄧演達の位牌を背負ひ、故人のために吊合戰を演ずる手筈となつてゐる。また外交部長は陳友仁に確定してをり、なほ今回の新政權は既に反動化し去つた改組派を始め、その他の國民黨の分派と截然自己を區別し、大衆的人氣を博するため黨務、思想運動の方面に力を入れる筈で、故鄧演達の衣鉢繼承の協約が既に成立してゐる以上、黃琪翔は第三黨々首を辭して、陳銘樞を後任に推し、陳銘樞は黨組織の擴大、發展を謀るため社會民主々義分子を打つて一丸とする新黨の組織運動を早晩開始するものと豫想される（當時民國二十二年十一月十八日の新聞記事から）。

×　×　×

右は、當時――福建の人民政府樹立の際に於ける新聞記事の要約であるが、その後新政府の組織進行と共に、その基調をなすところの黨の組織に對しては、陳銘樞が社會民主々義團體と、第三黨とを打つて一丸とした「生産黨」を組織し乍ら、支那革命を理論的に系統づけた新しい指導原理を生み出さうとし、同時に人民政府の基礎の擴大强化――そのための中央討伐軍との對戰等等に努めたが、これらの反國民黨への行動は幾何もなく崩壞するに至つた。

×　×　×

斯かる經緯に從ひ、急進的社會民主々義に立脚せる「生産黨」の組成運動、その實踐形態たる人民政府の確立運動は、遂に國民黨統治權力のために討伐され乍ら瓦解した以來、反國民黨各派の運動は全くその影を潜め、唯單に文化運動に於いてのみ、一種の反國民黨イデオロギーの普及に努めてゐるのであるが、それとても國民黨中央派――C・C團を主とする文化統制運動のために極度の彈壓を受け、全く手も足も出ない現狀にある。

勢ひ本章に於いて叙述解剖せんとする反國民黨各派も亦、既に過去の事實に至つたものもあり、また全然潛行運動にのみ、その實踐を續けてゐるものもある。

× × ×

而かも右派に屬する反國民黨各派に至つては、殆どその大部分が國民黨中央部に投降した。

第一節　生産黨系

こゝに謂ふところの生産黨系とは、前述の如き經緯により、福建に於いて人民政府と稱する急進社會民主々義政權を樹立した際の母體として、組成されつゝあつた政治的結社を指し、前に略述した通り社會民主々義系の盟主陳銘樞が、社會民主々義團體及び第三黨系並びに若干の急進的インテリ分子を糾合しつゝ、打つて一丸としようとしたものであつた。この生産黨の組織に關して、當時著者は次の如く

「斯くて新政府はその基調となすところの黨組織を結局どうするか、噂せられるが如く、陳銘樞が社會民主々義團體と、第三黨とを打つて一丸とした「生産黨」を組織しつゝ、支那革命を理論的に系統づけた、新らしい指導原理を生み出し得るか、而かもそれが果して新支那を建設すべき指導原理となり得るか、この二つの點こそ頗る興味ある問題であり、「人民政府」の前途も亦自らそれらの基本條件の如何によつて決せられるであらう。第三黨も、社會民主々義派も、ともに一種の社會民主々義を奉じてゐたとは謂へ、第三黨は三民主義の系統の下に、支那革命への指導原理を樹立し乍ら、三民主義を否定しなかつた。然るに福建新政府は社會民主々義の體系の下に國民黨に反對すると同時に、三民主義をも否認してゐる。そこで黃琪翔が「人民革命政府樹立と同時に第三黨を脫退する旨」の宣言を發した譯であり、胡漢民及び廣西系が、新政府に對して(「三民主義を否定する必要がないではないか」と詰問したのは、この間の經緯を物語つてゐる」(昭和九年一月一日發行支那問題パンフレット第一輯「福建獨立政權の解剖と支那統治の分裂」から)

と、批判推定したのであつたが、問題の「生産黨」は遂に正式の結黨を見るに至らないうちに、人民政府が崩壞したゝめ、遂にその輪廓だけを明らかにしたのみに終つた。

而かもその明らかにし得た輪廓なるものも亦「生産黨」が社會民主々義派と、第三黨との理論的基調の上に立ち、その二派の構成分子を包含してゐた關係上、これらの二派のイデオロギーを整理しつゝ、そこに純社會民主々義的な理論を體系づけるであらうことを推理し得る程度に過ぎ

なかつた。

× × ×

「福建獨立運動の組成主體は、前述の如く陳銘樞を盟主とする社會民主々義及び第三黨系並びに馮玉祥系の一部乃至李濟深と十九路軍の將士とであり、これに對し蔣介石は「全國の將士に告ぐる書」(民國二十二年十一月二十三日發出)で次の如く――「陳銘樞は社會民主黨を組織し、十九路軍の勢力を利用して中央に背叛したもので、この計劃は久しい以前から進められてゐた。陳銘樞が交通部長であつた時、電信借款及招商局變產契約で收賄したゝめ、輿論の指摘にあひ、職を去りて外遊し、歸國後香港、福州、漳州間を往復しつゝ第三黨と勾結の上、第三黨の黃琪翔、徐謙等の斡旋により共匪と聯絡し――」と指摘してゐる通り、共匪と勾結した云々は聊かデマに屬するが、その他のことは、まさに間違のない事實である。自然福建獨立運動を繞る基本的經緯と、その主體とを知らんとするには、社會民主々義及び第三黨の解剖からはじめ、李濟深、陳銘樞、蔣光鼎及び十九路軍將士との諸關係に及ぼさねばならぬ」(支那問題パンフレット第一輯「福建獨立政權の解剖と支那統治の分裂」から)

とは、著者が嘗て福建獨立政權を解剖せる際に叙述した一節であつたが、反國民黨各派中の一團としての生產黨系は

(一) 社會民主々義派

(二) 第三黨系

の二派をその構成分子となしてゐたものであつた。

(A) 社會民主々義派

支那に於いて社會民主々義思想が擡頭しながら、普遍化されるに至つたのは相當古く、勢ひその社會民主々義派として存在するやうになつてからも亦比較的久しいのであつたが、その團結的勢力に至つては頗る微弱たるを失はなかつた。

寧ろ社會民主々義黨としての組織が存在してゐたが否かさへも判然としてゐない。次に摘錄する一節は拙著「支那問題パンフレット」第一輯「福建獨立政權の解剖と支那統治の分裂」の中に於いて、社會民主々義派の形成過程を叙述したものであるが、この間の參考に資しよう。

× × ×

「社會民主々義派といふのは、尙は完全に組織化されてゐないのみでなく、祕密結社としてす

ら充分な形態を備へてゐなかつた。自然黨としての綱領も政策も亦出來て居らず、無論黨主もなかつた。一時世間から陳銘樞を盟主として「社民黨」なるものが結成されたもの丶如く傳へられたと雖も、それは單なる一種の集團に過ぎなかつたのは謂ふまでもなく、且つ政治結社と謂はんには餘りに貧弱であつた。最初陳銘樞が十九路軍總指揮として江西省で共產黨討伐に從事してゐた際、ソヴエート區域內に於ける共產黨の組織を破壞すべき運動の團體としてAB團なるものが組成された。團の首領は段錫明といひ、米國留學生出身の社會民主々義者であつた。この運動は「富田事件」(江西省富田に於ける共產黨組織に對する破壞工作として有名である)、または「全家塞事件（安徽省西部に於ける共產軍の巢屈でAB團の內部的破壞工作が功を奏した）等々によつて、その實績が擧つたゝめ、陳銘樞はこれを利用するに至つた。從つて陳銘樞對AB團との關係が密接を加ふると共に、當の陳銘樞も亦漸次思想的の色彩を帶びるやうになり、社會民主々義的傾向を强めて行つた。この後AB團は上海に文化運動を企て、陳銘樞の出資により、上海の神州國光社（大規模の出版書店）を買收の上、トロツキー派、及び改組派中の急進インテリ分子をその傘下に集め乍ら、相當の勢力の增大を來たした。而かも偶ま上海事變の勃發により十九路軍の名聲が全國に轟き渡つた際、陳銘樞を通じて十九路軍に働きかけた等、その文化運動及び社會民主々義黨組織の運動は、一時世上に喧傳された。然るに依然黨組織にまで進展するに至らず、文化團體としての「著作者協會」の組成などが、その具體的の現はれに過ぎなかつた。當時この派に屬してゐた重要分子は、王禮錫を筆頭に、劉仁靜、漆其生、孫家泳、區黨宣、梅龍彬、胡林厚、張相時、胡秋原、獘仲雲、李李麥、沈起子、羅章龍等々であつた。而して前述の如く政治結社として、正式に組織化されてゐないだけ、その綱領には、實踐的なものが乏しかつた。强ひてこれを求むるならば（一）中國の現實を資本主義制度の社會と認め帝國主義に抗爭する。（二）政治に對しては民主の實現を主張し階級專政に反對する。（三）國民黨の革命が中斷したとは謂へ共產黨の革命は危險であり、社會民主々義派としては兩者の中間を行かうとするものである——等々のスローガンに盛られた理論體系を基調としてゐた。だがその後陳銘樞の失脚外遊と共に、これらの文化運動も亦漸を追ふて下火となり、同時にファツシスト團體からの猛烈な壓迫を受くるに至つたなど、幹部連は多く十九路軍の移駐地たる福建に移つた。當時福建に赴いた連中は同省を中心として社會民主々義運動に暗躍した結果、第三黨の活躍と相呼應して今次の福建獨立運動を釀成するに至つたものである。社會民主々義派の幹部で獨立運動に參加したものゝうち、王禮錫は外遊中であつたが、外國で陳銘樞と會見

の上、福建獨立運動の企劃を慫慂し、結局陳銘樞をして決意せしむるに至つたものゝ如く、王禮錫は新政權の樹立と共に急遽歸國の途に着いた。斯くて福州に於ける社民派の幹部の双璧は胡秋原と龔梅彬とであつて、胡秋原は早稻田大學の出身、新政府では文化委員祕書長となり、龔梅彬は東京帝大政經科の出身、新政府の文化委員兼政務委員を兼ねてをり、その他彭芳草、嚴靈峰を始めとして何れも新政府に重要な地位を占めた」(支那問題パンフレット第一輯「福建獨立政權の解剖と支那統治の分裂」から)

×　×　×

斯くて陳銘樞を盟主とする社會民主々義派の一團は、福建新政權の樹立と共に、その實踐工作に移る第一歩として第三黨と合同の上、「生產黨」を組成することにより、イデオロギーの整理を行はんとした刹那、脆くも崩壞するに至つたのであり、爾來「生產黨」の流產に伴ひ、これらの幹部連は何れも四散し、現在では國民黨中央派の文化統制運動に壓迫せられつゝ何れもその影を潛めてゐる。

(B) 第三黨系

第三黨は國民黨が容共政策を斷行した際、既に國民黨內に於いて形成されつゝあり、當時の武漢政府(國民黨が共產黨と分離しない以前)に於いて國民黨內の急進派として擡頭してゐた。但し當時は共產黨の影に隱れて表面化するに至らず、寧ろ一般に共產黨系として評價されつゝあつた程であつた。

然るに國民黨が淸黨運動を斷行して共產黨を離脫した後は、第三黨の如く急進社會民主々義のイデオロギーに立脚する分子が、急激に目につき出した。

而かも國民黨が中央派の勢力の增大、蔣介石中心の獨裁强化につれ、その對立勢力として黨內に於ける急進分子が猛烈に活躍し出した。卽ち第三黨國民黨內の反逆分子として益々注目を惹くに至つた。

×　×　×

こゝで第三黨の形成過程を知らんがため左に著者の舊稿を摘錄して置かう。

「第三黨といふのは民國二十年八月蔣介石から銃殺された鄧演達の組織したものであり、「中國國民黨臨時行動委員會」のことを指し、一般にはこれを「行動派」または「第三黨」と呼んでゐた。社會民主々義派のなかに編入すべき種類で、國民黨を第一黨とし、共產黨を第二黨とし

て、その中間であるため、第三黨と稱するに至つた所以である。最初の領袖は鄧演達と譚平山とであつた。國民政府が南京に奠都した後、南京對武漢の對立が益々險惡化するに至つた際、武漢政府の內部も亦分裂するに至り、宋慶齡、鄧演達、徐謙、劉澤民、柳亞子、譚平山等は宣言を發して武漢政府を去つた。次いで武漢對南京が反共の爲に一致して南京中央特別委員會の成立を見るに至るや、宋慶齡、鄧滿達等は科學的三民主義を標榜して第三黨の組織を進めた。最初宋慶齡、鄧演達、陳友仁等が武漢を離脫したのち、モスコーに行つて第三國際との間で、支那の革命問題を討議し、支那に於ける革命のコースの變更を要望したが容れられなかつたゝめ、露西亞を去つて獨に渡り、第二インターナショナルの指導の下に黨の組織を決定することとし、黨の名稱を「中國共產黨臨時行動委員會」と名づけ、伯林で代表大會を開いた上黨の行動方針を決議し、第一次中央委員として宋慶齡、鄧演達、譚平山、陳友仁、徐謙、章伯鈞、黃琪翔等が當選した。然るに宋慶齡等は名義のみに止り、黨務は全く鄧演達の指導するところとなり、民國十九年鄧演達の歸國と共に黨務の進行を謀りつゝ、全國各省市の代表を召集して、擴大會議を開催し、その政治的主張を宣言した。この時鄧演達が第二インターナショナルから黨の資金二十萬元を携へて來たとすら宣傳された。歸國後の鄧演達は祕密裡に上海に落つき、黨の總機關を設置すると共に、黨員の獲得に熱中した。鄧演達は以前に黃埔陸軍々官學校の教頭兼總隊長であつたのと、總司令部總政治部主任であつた關係上、軍隊側の中堅將校を入黨せしめ、一時素張らしい勢力を示現した。鄧演達自身は左派國民黨と稱してゐたが、その指導理論は、農工平民政權の樹立を綱領として、社會民主々義的政策を盛つたものであつた。斯くて第三黨は民國二十年六、七月の頃早くもその黨員數四千餘名を擁し、勢力の最も伸びた地方—福建省では、二千餘名の黨員を算するに至つた。第三黨が勢力を得ると共に鄧演達は、中央軍を內部から切崩さうとして、その敎頭時代の黃埔陸軍々官學校卒業生を中心に、猛烈な潛行運動を試みつゝあつた矢先、同年八月十六日上海の租界內で逮捕され、南京の總司令部に押送の上、極祕裡に銃殺された。鄧演達の死後その領袖を失つた第三黨は事實上の分裂を免れなかつた。最高幹部として殘されたものは徐謙、譚平山、章伯鈞、黃琪翔等々であつたが、徐謙らの黨內に於ける勢力が漸次黃琪翔に壓倒せられ、民國二十年十一月、上海でその後の黨の善後策を講ずべき代表大會が開催された際には、黨の勢力分野が、徐謙系十分の二、章伯鈞系十分の二・七、黃琪翔系十分の四・五その他は社會民主々義系の一部が占めてをり、民國二十一年後黃琪翔が第三黨の首領となつた。同時に章伯鈞はその一黨を率ゐて別動隊を形成し、徐謙も

亦退却して「民權聯治黨」の組織に熱中しつゝ、傍ら馮玉祥の中支に於ける宣傳係をつとめてゐた。一時第三黨が馮玉祥に統率せられるに至つたと傳へられたなどは、こゝから出た消息であり、宋慶齡が第三黨の領袖となつたとの流説さへ傳つた。その間黄琪翔の黨勢擴張のための暗中飛躍には、すさまじきものがあり、さきに第三黨華やかなりし頃、江董琴（武漢政府時代には總司令部政治科長であり、民國十七年福州厦門を中心として第三黨の組織擴張運動に努力した）が、福建省の工作を受けもち、胡蘭畦（四川婦人運動の先驅者として有名な婦人）が、江西省方面に於ける工作を受持ち、それ〴〵勢力を扶植してゐたので、それらの關係を辿つて、專ら十九路軍に喰ひ入り、十九路軍が同地に基礎を固むるにつれ、第三黨も亦當然同地方でその勢力を盛り返へし、延ひて福建新政府樹立運動が、第三黨を中心とする社會民主々義の理論に、その基礎を置くことゝなつた所以であり、運動の進むにつれ、第三黨に屬してゐた分子は大部分これに馳せ參じた。とくに福建獨立運動に際して暗躍の最も猛烈であつたのは黄琪翔であり、その他章伯鈞、徐謙、陳友仁、彭澤相等も亦、第三黨に屬する分子である。（支那問題パンフレット第一輯「福建新政權の解剖と支那統治の分裂」から）

×　×　×

然しながらこの第三黨も亦福建新政府の壞滅、社會民主々義派の統制團體たる「生産黨」の流産後、必然的に崩壞し、その構成分子が何れも四散するに至り、唯一の後繼者黄琪翔は事變の失敗後、直ちに獨逸に亡命し、今尚ほ外遊中である。而して黄琪翔は元來第四軍の出身であるだけに、中央派の舊四軍系には相當の同情を有すると雖も、廣東の舊四軍系には頗る嫌惡されてゐる。

×　×　×

黄琪翔　廣東省の産、民國十五年國民革命軍第十五師長として北伐に從ひ、十六年武漢國民政府から國民革命軍第二方面軍第四軍長に任ぜられ、同年張發奎と前後して廣東に歸り、廣東政治分會委員となつたが、南京政府の唐生智討伐令を發するや、李福林等と協同して南京政府に加擔してゐた李濟深、黄紹雄等の廣西派に對しクーデターを斷行し、これを廣東から驅逐しつつ、臨時廣東軍事委員會、護黨軍西路總指揮に任ぜられ、次いで廣東に共産黨事件の發生するに及び廣東を逃れて、失脚以來第三黨の鬪士として活躍した。

第二節　舊十九路軍系

十九路軍系を中心とする反國民黨のイデオロギーは、社會民主々義的であり、思想的には支那

に於ける軍事勢力中に於いて最も急進派に屬してゐた。

それは同軍が陳銘樞との關係上その幹部將校のうちに早くから社會民主々義の洗禮を受けたものが多かつたからであらう。

然しながらその意識的行動に至つては、社會民主々義派に於ける一般的のそれとは、大いにその趣を異にしてゐた。即ち國民黨反對と謂はんよりも、寧ろ蔣介石中心の軍事獨裁——中央派の軍事的勢力——に對する抗爭に實踐上の中心を置いてゐた。

このことは十九路軍の生立ち上、必然的の趨勢であつたと同時に、十九路軍の幹部將校のなかにも亦、一般的軍事勢力把持者のもつと同樣の軍閥的意識が極めて濃厚に働いてゐたからでもあつた。

勢ひここでは便宜上これを十九路軍系として、特殊的の存在であるかの如く取扱つておいたが、それは一地方軍事勢力の思想的傾向の稍や急激なものとしての存在より他に何物もないのであつた。

但しそのうち陳銘樞のみが獨り異彩を放つてゐたこと謂ふまでもない。

×　×　×

元來十九路軍といふのは最初李濟深に統率されてゐた廣東軍第一師から分離した軍隊で、廣東軍の嫡流として鐵軍の稱さへあつた程である。

「李濟深と陳銘樞乃至十九路軍との關係に至つては、民國十二、三年廣東に第一師（前清末に編成された廣東出身の革命軍人で、これに關係のないものは殆ど皆無といつて好い）が存在してゐた頃から始まる。時に李濟深は師長と參謀長を兼ね、その下に陳銘樞、陳濟深、張發奎、蔣光鼐、蔡廷楷、鄧演達などが旅長若くは團長をして居つた。第一師は東江の戰功によつて第四軍に編成せられ、李濟深が軍長となり、陳銘樞が第十一師長に就任した。その後第四軍の北伐に參加した際、軍長李濟深と第十師長陳濟棠との二人が留守司令として廣東に止つた。この結果李濟深、陳濟棠が相次いで西南にその覇を稱ふるに至つた原因である。北伐軍が孫傳芳軍を擊破したのち、陳銘樞の第十一師は第十一軍に擴張され、陳銘樞が軍長に、蔣光鼐が第十一師長となり、第十師長には蔡廷楷が任命された。その後南京武漢の分裂により陳銘樞の南京に說走するや、十一軍は一先づ張發奎の手に移され、張發奎は十二軍を合せて第二方面軍總指揮となり、當時張發奎の下に居つた黃琪翔が副指揮兼第四軍長に昇進した。一方陳銘樞は南京に走つた後前述の如く第二方面軍に合併されてゐた蔣光鼐、蔡廷楷の率ひる二個師を相前後して

取戻し、福建でその陣容の建直しをやつた上、一旦廣東に歸り、のち十九路軍と改稱して再び北上し、民國十九年の河南大戰に參加しつつ山西軍を破り、次いで江西省に共產軍討伐のため出動したが、民國二十年南京、廣東の合併の條件として京滬衞戍司令に轉じ、京滬線一帶に駐屯し、上海事變を惹起するに至つたが、上海事變の終熄と共にまた共產軍討伐のために出動を命ぜられ江西省の共產軍を龍巖を陷れて漳州に進攻した等、福建南部に移駐の命を受けて駐地に至り、實力により福建に於ける海軍派と土着軍との聯合政權を壓倒しつつ、全省の軍政權を收め乍ら、その基礎を固めたのであつた。而して陳銘樞自身は江西省に於ける共產軍討伐を引き上げた當時から十九路軍總指揮の職は、これを蔣光鼎に讓り、上海事變當時は尙ほ蔣光鼎が總指揮として就任しつゝあつたが、福建に移駐後は蔡廷楷が既にその總指揮に任ぜられてゐた。然るに十九路軍はその歷史の頗る古い軍隊だけに團結力が極めて强く、陳銘樞對十九路軍の關係は依然として舊態と異るところがなかつた。福建新政權が十九路軍の實勢力を背景として樹立され、第一師時代の師長であつた李濟深を新政府の主席に擔いだことは、陳銘樞、蔣光鼎、十九路軍にとつても亦可成りに意味のあることで、同時にまた第三黨の黃琪翔對李濟深乃至十九路軍との舊關係が、大いに働いてゐた點をも見逃せないのであつた」。

×　×　×

以上はその發生以來福建獨立政權樹立直後崩壞するに至るまでの十九路軍の形成過程を略述した一節を摘錄したものであるが、斯くて福建に慘敗した十九路軍は、その後一部分が廣西軍に改編されたが、その他の大部分は四散するに至つたこと勿論である。

從つて陳銘樞は香港に亡命後外遊し、本稿起稿當時は蘇聯モスコーに滯留中であり、蔣光鼎、蔡廷楷等は廣西軍の客分として香港に居つた。

×　×　×

陳銘樞　廣東省合浦縣の產、保定陸軍軍官學校の卒業生、第一革命以後革命運動に終始し、袁世凱の帝制問題の當時、龍濟光の暗殺を企てゝ失敗したゝめ日本に亡命し、民國十三年歸國後李濟深の麾下にあつて國民革命軍第十一師長に任ぜられ、次いで第十一軍長となり、北伐に出師して武漢の陷落と共に武漢衞戍總司令に任ぜられたが、共產黨系に追はれたゝめ九江に赴き、十六年南京政府の樹立に伴ひ江蘇省政治委員會委員、國民革命軍政治訓練部副主任、國民政府軍事委員會委員等に歷任し、同年末廣東共產黨事件ののち、東江方面各路指揮として張發奎軍の討伐に當つた。十七年春南京派を代表して李宗仁と共に武漢、長沙に赴き、程潛、白崇禧一

派の連絡を計り、以て北伐軍に響應せしめ、次いで廣東に歸つた上廣東省政府委員となり、十八年國民黨第三期中央執行委員に選ばれ、同時に廣東省政府主席に就任、蔣光鼎、蔡廷楷等腹心の軍隊を擁して南京政府の廣東に於ける代表者となり、同年の冬廣西派の反蔣擧兵を鎭壓した。十九年擴大會議の反蔣擧兵に際しては十九路軍を北上せしめて討伐戰線に參加せしめ、戰後江西に於いて共產軍討伐に從事させた。二十年の廣東獨立に當り廣東を逐はれ、南京、廣東兩派の妥協運動に從事し、京滬衛戍司令長官に任ぜられ、蔣介石軍に代り、麾下の十九路軍をして南京、上海の警備に當らせ妥協成立後、國民黨第四期中央執行委員に選ばれ、國民政府交通部長に就任、二十一年軍事委員會の成立と共に常務委員に擧げられたが、同年上海事變後、十九路軍の福建移駐と廣東右派の中央に對する立場漸次惡化するに及び辭任し、福建新政權の樹立運動に失脚して露國に亡命中である。

蔣光鼎　廣東省東莞縣の產、保定陸軍軍官學校卒業後、廣東軍第一師第四團營長として陳銘樞の麾下に屬し、民國十一年陳炯明の叛亂に際しては軍艦楚豫に奔つて陳炯明を援助したが、十二年第一旅第二團長に任ぜられ、十四年國民革命軍第四軍第十師副師長に就任、二十八團長を兼ね、十五年には北伐に出師して武昌に至り、國民政府から第十一軍副長兼第十師長に任ぜられた。十六年の春南京武漢の分裂と共に武漢を離脫し、蔡廷楷が十師長に任ぜられ、同年秋陳銘樞が十一軍の改編を行つた際副軍長に擧げられ、次いで廣東に於いて訓練に從ひ、十八年の春の縮編會議では、一師一旅に縮小されたため第三師長となり蔡廷楷は第二獨立旅長に任ぜられたが、十九年夏十九路軍總指揮に推され津浦線に於いて山西軍を破り、平定後江西省に轉じて剿匪軍第一軍團總司令となり。滿洲事變後陳銘樞が京滬衛戍司令に任ぜられたゝめ、十九路軍を率ゐて京滬に駐屯し、遂に上海事變を惹起するに至り、停戰後福建に移駐を命ぜられ二十一年五月閩綏靖主任に就いたが、その後福建の獨立運動に敗れて失脚、香港に亡命中である。

×　×

蔡廷楷　廣東省羅定縣の產、保定陸軍軍官學校卒業後、早くから陳銘樞の麾下に屬したが、漸次累進しつゝ、十四年國民革命軍第四軍第十師第一旅長に任ぜられ、十五年第二十四副師長となり、十六年第十一軍第十師長に擧げられた。次いで北伐完成後討逆第八路軍第三師副師長兼第七旅長となり、十八年の兩廣戰に際し、第六十師長に就任した上、十九年江西に入つて共產軍の討伐に當り、二十年南京、廣東兩政府の妥協後、上海、南京方面へ移駐を命ぜられて、上海にあり、討逆第十九路軍總指揮蔣光鼎を代理し、同方面を警備中、上海事變發生したゝめ日

本軍と戰ひ、二十一年上海事變の終熄後、福建に移駐を命ぜられ、部下を率ゐて福建に入り、次いで十九路軍總指揮に任ぜられ、蔣光鼐の病氣中駐閩綏靖公署主任をも代理し、その後福建獨立政府の樹立に失敗して、香港に亡命中である。

第三節　文化陣に於ける各派

前節に略述した社會民主々義系統に屬する反國民黨系が、福建獨立新政權の樹立に失敗以來、全く四散して了つた後、國民黨反對の各派としては、左派系統のものは、殆どその影を潛むるに至つた。

就中宋慶齡を中心とした「反帝同盟」に屬する急進分子の如き、その一例である。

反帝同盟系は外部からは、これを共產黨系の外圍團體として認められてゐた。一時宋慶齡、蔡元培等がその中心人物たるかの如き觀を呈してゐたが、中央派C・C團の文化統制斷行後、それから來る彈壓嚴重を極むるに至つたと共に、殆ど手も足も出なくなつた。

×　×

宋慶齡　故孫文未亡人。孔祥熙夫人宋藹齡の妹、宋子文及び蔣介石夫人宋美齡の姉、江蘇省上海縣の產、米國ウイルズレイ大學卒業後、民國元年南京臨時政府成立し、孫文が大總統に就任するや、その祕書に任ぜられ、第二次革命の失敗後、孫文に從つて日本に亡命し、三年日本で孫文と結婚した。その後孫文の北京に客死後、十五年國民黨第二期中央執行委員に擧げられ、孫文の思想宣揚に努め、國民黨左派を率ゐて活動し、十六年國民政府の武漢移轉と共に武漢に入つて武漢政治委員會、國民政府委員となつたが、同年ソヴェート顧問ボロヂン及び共產黨系が武漢を追はるゝに及び、陳友仁、鄧演達等と渡歐し、伯林及びモスコーに赴いて第三黨を組織し、十八年國民黨第三期中央執行委員に擧げられ、次いで孫文の移靈祭に際して歸國したが依然蔣介石始め中央派と合はず、上海に於いて第三黨運動に盡し、反帝同盟にも參劃する等、左派の驍將として數へられつゝあり、國民黨側では現に第五期中央候補執行委員に擧げられてゐる。

×　×　×

反帝同盟系に屬する分子以外左派急進系には、胡愈之、茅盾、鄭振鐸等C・Pの外圍文化團體に所屬する分子を擧げねばならぬのであるが、これらはC・C團の文化政策、とくに中國本位文化建設運動に對して、反對を續けてゐる。

然しながらこの團體を始め、舊反帝同盟のグループに屬してゐた極左團體の勢力は單獨的には極めて微弱たるを失はず、國民黨に對する反對派としては殆ど問題でなく、唯共產黨の外圍文化團體としてのみ、一つの反國民黨系陣營を形成してゐる。

× × ×

そのほか反國民黨系の文化陣には、次の各派がある。

(一) 在野派
(二) 人權派
(三) 墮落派

(A) 在野派の分子

上海に黃炎培の江蘇學閥關係者があり、從來可成り猛烈な反國民黨的陣營を形成してゐた。然しながら近年に至り政學會系と聯絡するに至つたものゝ如く、國民黨に對する抗爭よりも、寧ろC・C團に向つて依然反對を繼續しつゝある。但しその實力に乏しく唯「申報」と「生活書店」「職業教育社」の僅かな經濟力を以て文化運動に携つてゐるに過ぎぬ。

× × ×

黃炎培　上海の產、上海南洋大學を卒業後、日本に留學して教育學を專攻し、第一次革命に際しては江蘇都督府教育科長、江蘇教育司長等に任ぜられ、民國三年辭任し、長江沿岸各省の教育視察に赴き、四年實業視察團書記として渡米した。歸國後爾來上海にあり江蘇省教育會副會長、中華職業教育社長、江蘇省議會議員に歷任し、十年北京に於ける梁士詒內閣及び十一年奉直戰後の顏忠慶內閣に教育總長に任ぜられたが何れも就任せず、十四年教育減債基金委員となり、現に上海申報館設計部長、中華職業教育社長に就任してゐる。

(B) 人權派

胡適、陶希聖等を中心とする學究的論客の一團を人權派と稱し、何れも自由主義の立場から國民黨の一黨專攻に對して反對の態度を持續しつゝあるが、これらも亦、その實力に乏しく、胡適は辛うじて雜誌「獨立評論」をその國民黨反對の陣營としてゐるに過ぎない。然し乍ら反國民黨の一團として靑年間にその渦仰者が多い。

× × ×

胡適　安徽省積溪縣の產、上海震旦大學、吳淞中國公學に學び、のち政府留學生として米國に赴き、コーネル大學、コロンビア大學を卒業し、民國六年歸國して、北京大學教授となり、八年所謂五四運動の發生當時から北京大學文學部長陳獨秀と共に雜誌「新青年」に據つて、近代支那文學史上に一時期を劃する白話文學運動を開始した。支那舊來の難解な文語體の文學を排して、說話體の文學を創始主張し、延ひて傳統的封建思想を排すると共に、個人の自由解放を唱へ、後來文學上のみならず、思想的、社會的、又はあらゆる文化的方面に於いて、支那が一大轉換を遂げしむるに貢獻するところ夥しく、十一年陳獨秀の南京に去るや、その後を承けて北京大學文學部長となり、北京に「努力週報」を發行し乍ら、これを主宰した。十二年病のため北京大學を退いたが、十三年又復任し、十五年渡英、十六年米國日本を經て歸國のち、上海で光華大學教授、吳淞中國公學校長兼文理學院長となつた。然るに孫文の三民主義を批判したゝめ、國民黨部の忌諱に觸れて壓迫を被り、一時公職を辭し乍ら商務印書館に入つたが、十九年北平に歸り、二十年再び國立北京大學の教授に任ぜられた。

(C) 墮落派の分子

國民黨文化支配階級（C・C團）に秋波を送りつゝ、現在では寧ろ國民黨系に近い存在となつたものに墮落派と稱する一派がある。

林語堂、曹聚仁、謝文逸、陳子展、徐懋庸

等々がその代表である。

第四節　國家主義派

國民黨C・C團の文化統制斷行と、その新文化建設運動の擴大强化以來、國民黨反對の各派及び反國民黨文化團體等々は漸次その影を潛めて行つた。而して或るものはその彈壓に耐へ兼ねて方向を轉換し、或るものはその統制陣に投降した等、結局殘されたのは、頗る寥々たるものである。

而かもそれは獨り左派の團體のみに止らず、極右の派系たる國家主義までが、それに例外たるを得なかつた。

×　　×　　×

そも〳〵支那に國家主義運動の發生するに至つたのは、民國十二年からであり、當時曾李、李

璜、張子桂等が佛蘭西にて同志と聯合の上共産黨に對抗しつゝ、その活動を阻止すべく國家主義派組織に對する種子を下した。斯くの如くにして國家主義派は同年十二月十二日、祕密裡に正式組織を持つに至つたのであるが、この種の組織未成立以前に於いてすら、既に國家主義の鼓吹が行はれてゐたものゝ如く、余家菊、李璜等が青年中國學會叢書の名義で、「國家主義の教育」と稱する一書を出版し、一部分の注意を惹いてゐたとは、國家主義運動史の錄するところである。

× × ×

以上の經緯が示す如く支那に於ける國家主義運動も亦、先進國のそれと同じく、共産黨の國際的活動に對する民族的抗爭運動として生れたものであつたが、以下支那に於ける國家主義運動の史的發展を知らんがため、左に「國家主義運動史」からその部分を摘錄しやう。

「次いで陳啓夫が「國家主義と中國の前途」を起稿して「青年中國」に發表した。以來共産黨對國家主義の論戰が開始された。次いで民國十三年上半期巴里の「先聲週報」で國家主義思想を鼓吹したのに對し、獨・佛、英、白に於ける留學生の同情を喚起し、國家主義の組織は、佛國より獨、英、白、墺等に於ける留學生間に普遍し、堅固なる基礎をもち、發展への一路を辿つた。同年九月曾琦、李璜等の歸國後、國家主義運動の機關誌として「醒獅週報」を上海から出版し、爾來積極的には國家主義の理論と、政策とを主張し、消極的には軍閥、共産黨及び國民黨の聯俄容共とに反對した。斯くて十四年十月十日「醒獅」誌上に、國家主義青年國の宣言、主張及び規約を發表して、國家主義各團體の團結を謀つた。斯かる聯合奮鬪の結果は、民國十五年教育界と青年間に著大なる影響を及ぼし、國家主義青年團に加入するもの增加するに至つたと共に、その組織の集中と勢力の集結とを促し得た。從つて國家主義青年團の支部は都市より縣城に普及し、國家主義運動は更に一歩を進めた」（國家主義運動史から）

× × ×

然るに國家主義派は、國家主義青年團を結成後、その團結的勢力の增大を來すに伴ひ、單に共産黨運動に對して反對するのみに止らず、政治舞臺に於ける政權の爭奪に對する野心をも抱くやうになつた。從つてその組成當時猛烈に敢行した共産黨に向つての反對の鋒先はさらにこれを國民黨治に對する反對にさし向けつゝ、次の如く

（一）五族共和の擁護と一黨專政への反對、（二）人權の保障、（三）聯盟自治（四）職業選擧による國會の組織、（五）總統民選、（六）司法獨立、（七）官吏の試驗登用、（八）男女平等、（九）蒙藏自治、（十）華僑保護、

等の十大政綱を振りかざし乍ら、その實踐運動に從事し出してからは、國民黨政權――とくに蔣介石系から猛烈な彈壓を受くるに至つたこと謂ふまでもない。

自然一時張學良を中心とする東北系に接近して北支方面に暗躍したことがあり、舊軍閥吳佩孚を擔いで反蔣行動を起すべく企てたなど、國家主義一派は各方面に亘つて可成り猛烈な運動を試みたが、依然徒勞に歸したのであつた。

× × ×

それは統治權力が支配階級の命ずるままに、獨裁强化への過程を辿りつゝある時、かうした國家主義運動の如きは、その思想的背景から謂つて寧ろ支配階級――その統治權力に合流せなければならなかつたのであるにも拘らず、誤つて支配權力に對する執拗な抗爭を續けたのであるだけに、當然崩壞せざるべからざる運命をもつてゐたと謂はざるを得ない。これらの點に關し支那急進批評家の一部では大要次の如き批判を下してゐる。

「中國々家主義派には多くの小資產階級の青年智識分子が屬してゐる。これは中國に於ける文化の落伍と、小資產階級の墮落とを意味するものである。そも〳〵歐米に於ける國家主義の理論は、夥しく非科學的であり、專ら感情に根ざした唯心論に偏してゐた。而かも中國に於ける國家主義の理論に至つては、その幼稚さの點に於いて寧ろ滑稽に價する。（中略）國家主義派の主張の主要點は、主として國民性を說くにある。然るに國家主義派は、國民性なるものが十八世紀と十九世紀の初期に於いて、歐洲各個の國家が初めて形成した時期に要求されたものであることを知らない。尙且つ國家主義派は、社會が絕へず流動しつゝあることを知らない、資本主義の發展以來生產力と、生產關係とは甚だしく變轉した。社會の上層建築物、政治、法律、意識形態も亦、大いに變轉した。所謂國民性なるものは、資本主義初期の產物であつて、資本主義の發展以後、國民性は甚だしく重要ならざる地位に墮した。それは資本主義の生產は、既に各個の國家にその關係の發生を要求し、それを國際化せしめたのみでなく、從つて國家主義の謂ふるところの國民性は、明らかに資本主義の生產と相矛盾し、且つ資本主義生產力の發展に適しなくなつたからである（中略）。加ふるに中國小資產階級の國家主義派は、中國統治階級の動搖に乘じて、突然野心を起し政治舞臺に上り、國家の政權を取得せんとした。卽ち國家主義派は歐洲十八世紀と十九世紀の小資產階級の國家主義派が、曾て官に陞り、財を蓄へ得たのを見て、その後塵を拜せんがために、國家主義を振りかざしつゝ、群衆をその傘下に呼集せんとしたのである。而かも國民主義派は歷史的唯物論を了解せず、且つ社會の流轉を知らない。

國家主義派は、時間と空間性の萬應靈藥ではない。中國には既に革命的無產階級の政黨が生れ、その政權さへ樹立され、資產階級の獨裁政權と對峙しつゝある。この間に於いてマルクス主義の社會民主黨さへ、尙ほその技を賣ることが不可能であり、自ら勞農の利害を代表してゐると稱する改組派も亦然り、同樣の失敗に陷つた。況んや反動的の國家主義に於いてをや」(孫倬章著「中國革命問題批判」の一節から)。

× × ×

近年の國家主義派は前述の如く徹底的に凋落し、大部分國民黨中央派に投降した。就中國家主義青年黨の牛耳を採り、努めて實踐の方面に活躍しつゝあつた王造時、吳澤霖、張耀翔等がその投降組の主なるものである。

勢ひ主腦部の中央投降後に於ける國家主義派は、現在出版界では「中華書局」(上海福州路にある)をその本營とし、軍政界では張學良の東北系と相當の連絡を保ち、敎育界では、復旦大學、大夏大學等を根據とし、文化運動の上では、在野派の穩健組と堅く結び乍ら、辛うじてその餘喘を保ちつゝあるに過ぎぬ。

第七章　むすび

——憲政問題を繞る中央派と各派——

問題の「中華民國憲法草案」は、民國二十五年五月五日國民政府命令の形式で公布された。同時に、この草案を討議すべき國民大會も亦同年十一月十二日に召集する旨公表されたのである。而してこの草案は國民大會の討議を經たのち、確定憲法として公布される筈である。

この場合國民大會は、現在の支那に於いては、現蔣介石政權のお手盛選擧によつて組成されることに間違ひなく、自然この憲法草案も亦、國民大會に於いて根本的の修正が加へられることなどのあり得ないのは謂ふまでもない。

勢ひ支那が憲法發布と共に、國民黨の訓政時期を打切り、憲政を開始するに際しては、大體現在の憲法草案が示す如き輪廓に於いてなされること勿論である。

× × ×

憲法の制定、憲政期の開始この問題を繞つて展開された國民黨各派の過去に於ける鬪爭は、蓋し久しいものであり、同時に著しく眞劍であり、頗る露骨でもあつた。

元來憲法問題が、初めて問題化されるに至つたのは、民國二十二年からで、同年の二月國民政府立法院内に「憲法起草委員會」が設置された。

爾來四十名の起草委員が、その準備を進め乍ら、同年六月主稿委員の私的草案起草に端を發してから、數十回に亘る審議を經たのち、民國二十三年三月一日「中華民國憲法草案初稿」なるものが發表されたのであつた。

而して右の初稿の審査修正案が、同年七月九日「中華民國憲法草案初稿審査修正案」として發表され、次いでそれが立法院大會を通過するに至つた。これが立法院通過の第一次草案であつた。

×　×　×

この第一次草案なるものは、全文十二章百七十八條から成つてをり、著しく民主的色彩に富んでゐたと共に、中央派にとつては頗る不利な條文が盛られてあつたこと周知の通りである。

このことは當時蔣介石を中心とする中央派の勢力が、尙ほ今日ほどの段階にまで達して居らず而かもその内部統制の充實を缺くところあつたのと、憲政問題に對しては、汪精衛派が最初からの行き懸り上、そのために奮鬪した上、孫科が立法院長として頑張つてゐたのみでなく、立法院に於ける太子派の勢力も亦少なからず優勢であつたのに反して、中央派としては、これらの勢力を統制する程にまで達してゐなかつたからでもある。

とくに中央派にとつて最も面白くなかつたのは

「軍人は解職後にあらざれば、總統又は副總統に當選することを得ず」

と稱する條文の明記されてゐることに對してゞあつた。中央派としては、當時から蔣介石中心の獨裁强化への覇權を目ざしつゝ邁進してゐた關係上、蔣介石を總統に祭り上ぐべき準備おさおさ怠りなかつたのである。

然るに當時の中央派は前述の如く黨内に於ける反蔣各派の勢力を牽制して了ふまでの餘力を持たなかつた上、西南派との對立關係が益々尖鋭化しつゝあつた等、「憲法草案」に對する中央派の對策が暗々裡に講ぜられ、中央派對反蔣各派はこの憲法草案——憲法問題を繞つて相當猛烈な暗鬪が續けられたのであつた。

×　×　×

斯くて立法院大會を通過した「中華民國憲法草案修正案」は、民國二十三年十二月十四日の第

四期五中全會の討議に上程された。

「中華民國憲法草案」が第四期五中全會で討議されることゝなつた經緯にも亦、この憲法問題を繞る中央派の懸引が潜んでゐた。それは當時第五次全國代表大會を開催せなければならぬ時期に迫つてゐたことに端を發した。もとより國民黨の最高機關たる全國代表大會は、二年毎に一回開かれる順序であり、熄むを得ざる場合のみ一箇年延期出來る規定となつてゐる。そして第四次全國代表大會は民國二十年十一月十二日南京で開催されたのであるから、第五次全國代表大會は當然二年後の二十二年の秋に開かなければならなかつたのである。然るに共産黨の討伐、その他南京政府の都合で延期され、二十三年に開催すべく持越しとなつてゐたのであつた。從つて二十三年には是非共開催せねばならぬ性質のものであつた。而かもこの五全大會の目的としたところは國民黨治の段階である訓政期を終へてその最後の段階たるべき憲政期に入るための新憲法を公布し、黨治完成の新時代を劃立しやうとするにあり、當然國民大會の開催期及び憲法草案が中心問題となる。そこで共産軍討伐の最重要期に軍政の要人が中央に引揚げることは、共産軍の討伐を頓挫せしむる所以であるとの理由から、蔣介石系の將領及び省政府主席等が、大會延期要求の通電を發し、蔣介石自らは剿匪に名を藉り、四川省を始め、廣西系との間に特殊關係を保ちつゝあつた雲南、貴州、湖南の各省に於ける政治軍事、財政等の中央化に專念してゐた。勢ひ五全大會を延期する代り、五中全會を開いて重要黨務を處理し、これに間に合はせるといふことゝしたのであつた。

×　×　×

第四期五中全會では憲法問題に對しては次の如く

「五全大會を民國二十四年の一月十二日に開くこと、並びに民國二十四年三月開催することになつてゐた國民代表大會をも延期し、右の五全大會に諸つた上改めて開催期を決定すること」等を決議し、先づ國民黨の一黨專政の解消を豫約して、訓政時期を延長することゝなつたと共に、憲法草案を再討議した。その結果左の如く

「中華民國憲法草案は總理の三民主義を遵奉し、民有、民治、民享の國家を建設せんことを期し、同時に中華民族目前の環境、及び危險を討論し、實際政治の經驗を斟酌の上、國民を集中する制度たらしめんことを期すべし、草案は中央常務委員會に交附し鄭重に審議せしむべし」と決議し、これによつて憲法制定上の原則を決定したのであつた。これを換言すると、

「この草案は實際の環境に適しないがため、さらに國力を集中する制度たらしむるが如き憲法

を必要とする」

といふにあつたが、蔣介石系の中央派にとつては、中央派の實勢力が未だ憲政の開始に處するまでに充實强化してゐなかつた上憲法公布に伴ふ大總統問題が、中央派の策動によつて、蔣介石をこれに祭り上げることが出來る環境にあつたと假定しても、前述の如く

「現役軍人の總統選任を禁止してゐる」

條文の存する限り、中央派としては、これをこのまゝにして置けないのは勿論であつた。こゝに於いて憲法問題は全く停頓して了つた。

× × ×

然るにその後民國二十四年十月に至つて中央常務委員會は、漸く「憲法草案」を審査の上、次の五項の原則を決議したゝめ、憲法問題は急に政局の中心話題となるに至つた。

（一）革命の歴史的基礎を尊重し、三民主義、建國大綱及び訓政時期の約法等の精神を以て、憲法草案の根本となすこと。

（二）政府の組織は實際政治の經驗を斟酌し、國力集中の制度を造成運用すべく、行政權行使の制限に、剛性の規定あつては不可ない。

（三）中央政府及び地方制度は、憲法草案中にあつては、職權上大體を規定し、その組織は法律を以てこれを定むること。

（四）憲法草案中必須の規定條文にして、事實上即時施行或は、全國同時に施行不可能なるものは、その實施順序を法律を以て定むること。

（五）憲法の條文は繁雜であつてはならない。その文字は努めて簡明を要する。

× × ×

謂ふまでもなく、以上の決議は「憲法草案」に對する積極的の修正要求を意味してゐた。而かもその修正要求なるものが、蔣介石を中心とする中央派によつてなされたのであつた。

中央派としては、さきに延期した五全大會の開催期の切迫と共に、憲政開始問題に對する最後的態度を決定せねばならなかつた。而かも五全大會では憲法を決議すべき國民代表大會の開催期をも決定せなければならぬ順序にあつた。當然これに處するためには、憲法草案の條文に大修正を加ふると共に、蔣介石を總統に就任せしむる準備に充て、同時に總統の權能をも極度に擴張强化した條文を制定せしむる必要に迫られてゐたのであつた。而かも當時の中央派としては、大總統には何日でも蔣介石を就任せしめ得るだけの遺憾なき準備が既に出來てゐたこと謂ふまでもな

かつた。

そこでそれらの結果が、中央執行委員常務委員會の審査決議となつて現はれたのである。

× × ×

「國力集中の制度を採用し行政權行使に剛性の制限を附すべしといふ要求は、憲法草案に於ける總統、及び行政院長等に現役軍人を就任せしめてはならぬといふ制限を、撤廢せよといつた意味を表示してゐたに外ならぬ」

とは當時このことに對する一般的の批評であつた。斯うした結果、立法院では、憲法草案の再修正に從ひ、民國二十四年十月二十五日の立法院會議で、八章百五十條の修正草案を通過したのである。

× × ×

この修正草案の公表後、憲法問題は、とん〳〵拍子に進捗した。それは同年十一月の第四期六中全會に於ける審議の結果、次のやうに決議したのに徵して知ることが出來る通り、その條款の全文が中央派にとつて、その希望を滿たすのに充分であつたからである。

「本會議は立法院が最近起草せる憲法草案を、大體妥當と認むるものである。たゞ國家現實の情勢に適應し、且つその實施に便するため、相當の期間をおいて、詳細に研究議論すべきである。但し現在から全國大會までは日數がなく、且つ全國大會の會期は頗る短かく、恐らく最後的決定の暇がないであらう。ために本憲法草案を、第五次全國代表大會に提出して、憲法草案及び國民大會召集期日を先づ決定し、本草案に對しては、大體の審査を加へ、綱領を指示し、再度次期の中央執行委員會に交付し、精密に決議した後、國民代表大會に提出してこれを發布するものとする」。

× × ×

以上の決議に從ひ、民國二十四年十一月に開催の第四期六中全會後召集された五全大會では、確定せる「憲法草案の宣布及び國民大會召集の期日はこれを第五期第一次中央執行委員會全體會議」に委任することゝしたゝめ、この委任によつて第五期一中全會では、それ〴〵の期日を次の如く定めたのであつた。

(一) 確定憲法草案の公布期日を民國二十五年五月五日とし、同年十一月十二日國民大會を開催すること。

(二) 國民大會の選擧は十月十日以前にこれを執行すること。

（三）憲法草案審議委員會を設け草案審議の責任をもたせた上、大會が認めた提案は、二箇月以内に修正を加へて、中央常務委員會から立法院に移交し條文の整理をなすこと。

大體以上のプログラムに從つて、審査が進められたのち、多少の修正が施された上「確定中華民國憲法草案」は愈々豫定通り、民國二十五年五月五日國民政府命令として宣布されたのである。

× × ×

右の如く「確定憲法草案」が世に出るまでには、それを繞つて幾多の波瀾曲折があつた。とくに大修正を施せる憲法草案を審議すべき第四期六中全會では、開會式の當日、行政院長汪精衛に對する射擊事件があつて、一時混亂を極めたとは謂へ、一體に於いて中央派の意志のまゝに、殆んどその註文通りの形態と、實質とを備へ、最初中央權力の獨裁強化をこれによつて牽制しやうとした自由主義派の要望は、數回に亘る修正によつて全く骨抜きとなつて了つた。一部の間ではこの憲法草案を目して次のやうに

「國民黨の存立の基調である三民主義、五權憲法の諸特質が全く喪失して了ひ、總統中心の獨裁的憲法となつた。ひたすら中央政府の强化、中央集權を目指す憲法として、また蔣介石の總統就任を豫想する憲法として、ここにその最重要なる準備段階を終へた」

とすら喝破し、蔣介石を中心とする獨裁政權の中央集權化を促すべき法文化であるとさへ極言してゐるのも亦決して過言ではない。

× × ×

試みにここで確定憲法草案の特質を檢討して置かう。最もこの憲法草案には、原則として孫文主義の五權憲法、五院制度が規定されてをるが、條文の上ではこの主義五院制度が殆ど形式上の存在に過ぎなくして、一方總統に對しては極めて强大な權限を附與すべき規定が設けられ、そのために三民主義の特質である五權憲法が歪められた點に特質がある。

卽ち總統は國民大會に於いて選出される民選元首であるが、その憲法上與へられてゐる權限は欽定憲法に於ける皇帝の權限より、より低いものではなく、そのために五權分立の精神を完全に破壞して了つてゐる。

確定憲法草案第四章第一節總統　第三十六條總統を國家の元首となし對外的には中華民國を代表す。第三十七條總統は全國の陸海空軍を統率す。第三十八條總統は法により關係院長の副署を經て法律を公布し命令を發布す。第三十九條總統は法により宣戰講和及び條約締結の權を行使す。第四十條總統は法により戒嚴解散を宣布す。第四十一條總統は法により大赦特赦減形復

權の權を行使す。第四十二條總統は法により文武官員を任免す。第四十三條總統は法により榮典を授與す。第四十四條國家が緊急事變に遇ひ或は國家經濟上重大なる變故あり急速に處分せざるべからざる時總統は行政會議の議決を經て緊急命令を發布し必要の處置を採ることを得。但し命令發布後三個月以內に立法院の追認を得べし。第四十五條總統は二院以上の事項及び總統諮詢事項に關し五院院長を召集して會商することを得。第四十六條總統は國民大會に對してその責任を負ふ。第四十七條中華民國の國民にして滿四十歲以上のものは總統副總統に選ばることを得。第四十八條總統副總統の選擧は法律を以てこれを定む。第四十九條總統副總統の任期を六年となし再選により一回留任することを得、第五十條總統は就職日の宣誓に於いて次の如く誓詞をなすべし「余正心誠心、向國民宣誓、余必導守憲法、盡忠職務、增進人民福利、保衞國家、無負國民付託、如違誓願受國法嚴厲之制裁、謹誓、」第五十一條總統缺位の時は副總統その任を繼ぎ總統副總統事故により執務不能の時は行政院長その職權を代表す。第五十二條總統はその任期滿了の日に解職す若し次期の總統副總統が尙ほ選出されず或は選出後の總統副總統未就職の時は行政院長に於いて總統の職權を行使す。第五十三條行政院院長が總統の職務を代行する時はその期限六箇月を逾ふることを得ず。第五十四條總統は內亂或は外患の罪を犯したる場合を除くほか罷免或は解職を經ざる後にあらざれば刑事上の訴究を受けざるものとす。

第二節行政院　第五十六條行政院には院長副院長各一人政務委員若干人を設け總統よりこれを任免す　第四節司法院　第七十七條司法院には院長副院長各一人を設け任期を三年として總統よりこれを任命す。第五節考試院　第八十四條考試院には院長副院長各一人を設け其任期を三年として總統よりこれを任命す。第八章憲法の施行及び修正　第百四十三條全國に於いて地方自治の完成せる省區の未だ半數以上に達せざる時立法委員及び監察委員は左記の規定により選擧してこれを任命す（一）立法委員は各省蒙古西藏及び國外に僑居する國民より選出する國民代表は第六十七條所定の人員數の半數を國民大會の選擧に充てその餘の半數は立法院長より總統に提請の上これを任命す。（二）監察委員は各省蒙古西藏及び國外に僑居する國民より選する國民代表は第九十條所定の人員數の半數は國民大會よりこれを選擧しその半數は監察院長より總統に提請の上任命す。

×　×　×

以上摘錄した各條がこれを有力に物語つてゐる如く、この憲法草案に規定された總統の權限は、如何に强固なものとされてゐるかは寧ろ豫想以上で、而かもそれによつて定められた總統の

權限によると、恰も第一期の總統は既に蔣介石に確定したものとの豫想の下にこれを規定した觀なしとせないのであり、そこに最も大きな特質を表示してゐるのである。そのことは次に列擧するが如く

（一）行政院長及び政務委員、行政院各部部長の任免權を掌握してゐること。

（二）司法院、考試院の各院及び副院長の任免權をも掌握してゐる。

（三）五院院長會議の召集權をもつてゐること。

等等の各項を明らかにした點に頗る明確に表示され、行政機構に於ける全主腦部の任免權を保有し乍ら、行政權を左右し、その上司法、考試の兩院長及び副院長をまで、自己の方針によつて左右することが出來るのみでなく、五院間の意見對立を解決するために五院會議を組織し得ることとは、五院のうち三院までが既に總統の自由裁量に任せられてゐるとせば、その規定の活用によつて、立法、監察の二院をもその統制に歸せしめたものであり、さらに立法院委員及び監察院委員を院長より總統に提請の上任命せしむるの規定をも設けてあることは、兩院の相對的獨立性に或る程度までの曲歪を加へた所以である。勢ひこゝにも亦立法院、監察院の官僚機構化への努力が暗示されてをり、總統の獨裁性は彌が上にも擴大强化されてゐることを看過出來ない。

×　×　×

さらに確定憲法草案に規定された國民大會の各條を見るとき、そこにも亦その無力性が發揮されつゝある。前述の如く、立法院、監察院の官僚機構化と共に、假令憲政時期が開始されたとしても、憲法は民主、民權への表現を缺き、而かもそれによつて引き出されるものは、全國的の中央集權、國民の總意を裏切る中央集權化、獨裁政治の一手段であつて、それを美化する憲法であることを意味するものである。

×　×　×

斯うして「確定中華民國憲法草案」は、前述の如く蔣介石の總統就任を豫想する憲法草案として宣布されたのであつた。

と謂つて了へば至極簡單であるが、中央派としては環境をこゝに運んで來るまでには（斯かる憲法草案を世の中に送り出し得るまで）、並々ならぬ努力を費したのであつた。そしてその三年間に亘る努力は遂にこの憲法草案をして蔣介石を中心とする中央派の獨裁强化を美化する一つの法文たらしむるに至つたのであると謂へよう。從つてかうした憲法によつて行はれる憲政は、先づ中央集權を强化し、次いで中央政府と支配階級を中心とする支配的要素との結合を强めねば熄ま

ないこと謂ふまでもない。

×　×　×

これに反し憲政開始は從來の形態を以てする國民黨黨治を根柢から覆すものであつて、國民黨の一黨專政に狎らされて來た黨人にとつては、餘りに望ましからざることであつたであらう。

この意味に於いて憲政の開始、從つてまた憲法草案の宣布に對しては國民黨元老系を中心に可成りの反對意識が濃厚であつた。

就中死んだ胡漢民一派の西南派文治系がその一方の旗頭であつたことは周知の如くである。これらの反對論に從へば、現在の支那の政治的段階は、なほ訓政時期に彷徨するものであつて、憲政開始には時期尙早である訓政時期に於ける所謂訓政强化によつて國民黨々治の基礎を鞏固ならしめ、同時に黨の勢力をも擴大せねばならぬと謂ふのであつた。

この點に於いては蔣介石一派の中央系も亦一時は憲政の開始に對し極力反對的立場に立つてゐた。それは中央派の統制力の充實さが、未だ憲政開始を斷行し得るまでの客觀情勢――段階に達してゐなかつたからであり、胡漢民一派の反對意識とは本質的にその選を異にしてゐた。

×　×　×

胡漢民系以外に憲政の開始に對して極力反對しつゝあつた勢力は、廣西及び廣東派實力系の兩系及び舊馮玉祥系並びに山西派等の地方勢力――地方的實權の把持者であつた。これらは各章に於いて部分的に略述した通り、地方に於ける軍閥的存在であり、これらの舊封建性殘存勢力は、憲政の開始により、中央集權への强化に伴つてその地方的地盤の獨占確保が覆へされることに夥しい脅威を感ずるためであつた。

勢ひこの系統に屬する分子は、過去に於いて憲政問題に對しその程度の差こそあれ、何れも反對的態度を表示しつゝ、相當の鬪爭を繼續して來たのであつた。

×　×　×

これに反して小資產階級及び民族產業資本家階級の一部を代表する各派は、憲政の開始によつて、中央權力の基礎を鞏固ならしめる措置には決して反對しなかつた。これらの各派には黨權を神聖視する必要はなく、寧ろ憲政の開始後に於いて支配權力に割り込まんとする機會を望んでゐたからである。

×　×　×

然しながら憲政問題を繞る各派の鬪爭は確定憲法草案の宣布と、憲政開始期の確定とにより一

應終熄した。

とは謂へ支那に於ける政局の紛糾化は、それによつて解消されたものではない。

ここまで書いて來たとき、突如西南派の中央背叛が具體化され、軍事行動の發生を見んとする趨勢をすら示現した。蓋しこれも亦所詮西南派——とくに廣西系を中心として——の地方軍閥的勢力が、中央集權强化の壓迫に耐へ兼ねた結果、それに對する反噬への實踐を具體せしむるに至つたものであり、而かも斯くの如く他方軍閥勢力が、殆ど耐へ切れないまでに感受しゝある中央勢力の壓迫は、この憲政開始期の切迫と共に、一層その趨勢を顯著ならしむめば熄さなかつたからであつた。

昭和十一年七月十八日印刷
昭和十一年七月二十二日發行

現代支那の政治機構とその構成分子

著者　濱田峰太郎　東京市京橋區銀座西八丁目五

發行者　廣田義夫　東京市牛込區矢來町三六

印刷者　本間十三郎

定價　貳圓

清揚社印刷

發行所　東京市京橋區銀座西八丁目　學藝社　電話銀座(57)一二六一番　振替東京五四九五五番

□□□ 學藝社刊行 □□□

ヤマールチ支那農業經濟論　井上照丸譯　定價參圓八拾錢　送料貳拾貳錢

支那農業經濟の諸問題　田中忠夫著　定價壹圓八拾錢　送料四拾錢

支那經濟現勢講話　孫懷仁等著　支那經濟研究會　定價壹圓四拾錢　送料拾四錢

現代支那の基本的認識　田中忠夫著　定價參圓五拾錢　送料貳拾貳錢

支那經濟の崩壞過程と方法論　田中忠夫著　定價五圓五拾錢　送料參拾八錢

支那に於ける列强の工作とその經濟勢力　原勝著　定價壹圓五拾錢　送料拾四錢

□□□ 學藝社刊行 □□□

〔北支那事情叢書〕

北支那經濟概論　田中忠夫著　定價八拾錢　送料六拾錢

北支那の天然資源　五十子宇平著　定價八拾錢　送料六拾錢

北支那の外國貿易と列國の商勢　細見健三著　定價八拾錢　送料六拾錢

北支那に於ける列國の權益　高木陸郎著　定價八拾錢　送料六拾錢

北支那とソヴイエット・ロシア　長谷川了著　定價八拾錢　送料六拾錢

解說 北支に關する日支關係條約　村田孜郎著　定價壹圓貳拾錢　送料十錢

□□□ 學藝社刊行 □□□

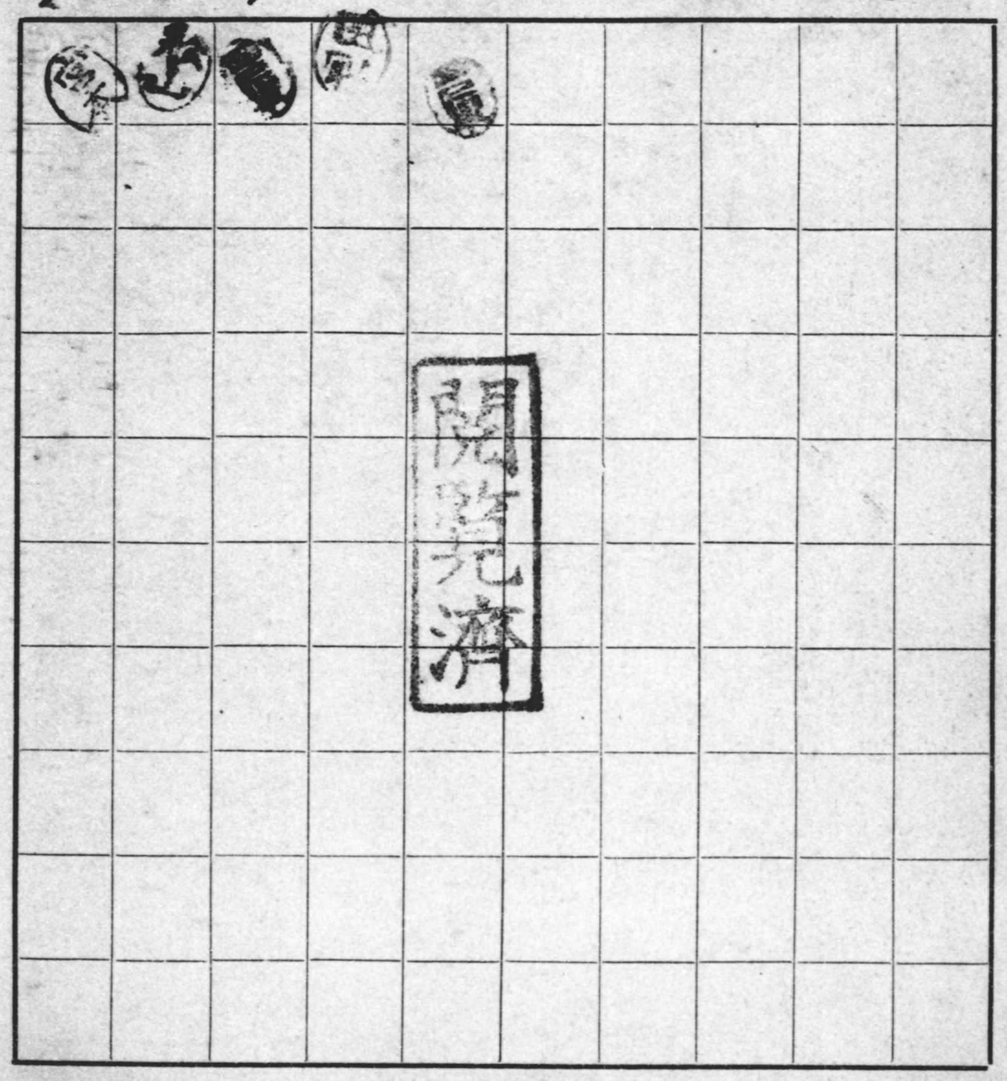
ポクロフスキイ ロシア史　岡田宗司譯　定價六圓參拾錢　送料

北支那經濟總攬（北支那事情叢書合本）　田中忠夫、五十子巳平、細見健三、高木陸郎著、長谷川了、村田孜郎　定價參圓五拾錢　送料參拾六錢

エドワード フユター 概觀世界近世史　松本金次郎譯　定價參圓五拾錢　送料貳拾貳錢

現代支那の政治機構とその構成分子　濱田峰太郎著　定價貳拾四圓　送料錢

日語大文典（滿洲國版 中華民國版）　曾野一路著　定價（各）八圓　送料六拾錢

742
58

13年 9月 20日 205